

浦添市立図書館紀要

BULLETIN OF THE URASOE CITY LIBRARY

No. 7 1996・3

□ グラビア

内からみた図書館運営の一考察 遠山 満 (3)

評定所文書覚書(6) 徳元 剛 (11)

『球陽』と『年中各月日記』に見る近世沖縄の気象

〔研究論文〕 伊波普猷と新おもろ学派 末次 智 (27)

— ナショナリズムと郷土＝沖縄研究 —

〔研究論文〕 沖縄芝居の動向(揺籃期～明治33年) 徳元 剛 (38)

〔研究論文〕 琉球王府の糖業規制・取締りについて(概観) ... 金城 功 (46)

〔研究余滴〕 ささやかな愛知県岡崎市との交流 栗国 恭子 (50)

— 志賀重昂を背景に —

□ 浦添関係文献紹介 (55)

□ 『琉球王国評定所文書』既刊分の紹介 (56)

□ 沖縄学研究室寄贈受付図書資料一覧(1993年度～1994年度前半) (57)

〔史料紹介〕 民俗研究家・源武雄氏蔵書の「寄贈資料」報告 長間 安彦 (67)

栗国 恭子

浦添市立図書館

—— 裏石垣に行く・開拓地を訪ねて —— 地域史協議会・石垣市で開催 ——

1995年の10月4、5、6日、沖縄県地域史協議会が石垣市で開催されました。協議会には、沖縄学研究室の長間、粟国の両名が参加しました。今回のテーマは、「移民」です。4日（水）は、石垣市立図書館を会場に、記念講演を友寄英正氏が「八重山開拓移民史」と題して行いました。琉球王府時代の移民（寄百姓）、明治の開墾（寄留民、台湾からの入植）、日本政府の移民（移民計画事業）、戦後の入植（郡島政府時代、琉球政府時代、自由移民）、移民の出身地と人口、移民の意識、新たな出発などの内容を盛り込みながら、八重山開拓移民の方々からの聞き取り調査の成果をまとめられました。

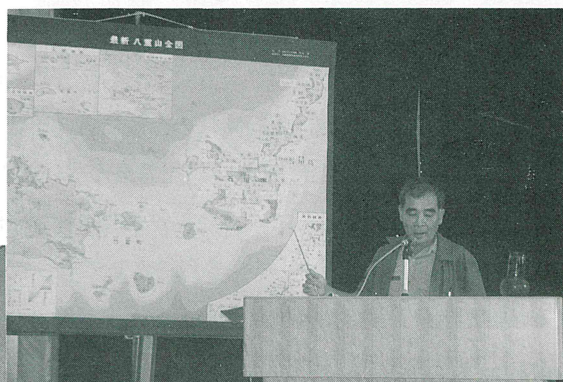
資料として石垣市史編集室編『移民関係文献目録』（コピー製本）が提供されました。内容は、「友寄英正蔵資料（140点・スクラップ資料を含む）」、「学校関係記念誌及び作文集等——移民集落地関係——（24点）」、「石垣市史編集室所蔵移民集落地関係書籍（16点）」、「石垣市史編集室所蔵移民関係資料（31点）」、「牧志家所蔵移民関係資料（25点）」、「旧大浜町関係資料」の資料が目録化されています。その他「八重山開拓移住に関する年表——知花成昇氏のメモを中心に——」の資料等も提供。

また、図書館2階では、図書館及び石垣市史編集室所蔵の八重山開拓移民関係資料が展示されました。

5日（木）には、石垣市史の内原節子氏から「八重山入植資料について」の説明を受け、実際にマイクロバスで裏石垣と呼ばれる移住地域を巡見。明石部落では、沖縄本島からの開拓民の方々（6名）から公民館で実際にお話を伺いました。6日（金）は、具志川市、糸満市の地域史担当者から八重山入植に関しての事例が報告されました。

提供された資料は、図書館沖縄学研究室にて、ご利用下さい。〈粟国恭子〉

図書館2階での移民資料展示



友寄英正氏の講演

浦添市立図書館10周年を迎える——『浦添市立図書館10周年記念誌』の紹介——



『浦添市立図書館10周年記念誌』表紙

1985年4月23日に開館した当館は、1995年4月23日で10周年を迎えました。その記念事業として、①10周年記念誌の編集・発行、②10周年記念式典、③市民フォーラム、④記念展示会、⑤記念品作成、⑥小・中学校記念作文コンクール、⑦図書館ネットワーク整備等の取り組みが行なわれました。

『浦添市立図書館10周年記念誌』は、500部発行しました。沖縄建築の特徴を持つ当館の赤瓦の屋根を表紙に使いました。

記念誌の中には、1984年の準備室時代から現在までの主な出来事を年表と活動風景写真で紹介した「としょかんの10年——浦添市立図書館10年のあゆみ」、記念事業で利用者から募集したシンボルマーク（デザイン）と作文を「10周年記念公募作文とシンボルマーク」で紹介しました。「図書館刊行物の紹介」では、毎年1冊刊行される『浦添市立図書館報』（創刊号～11号）、図書館学及び沖縄学研究所の論文を掲載した『浦添市立図書館紀要』（創刊号～6号）、沖縄学研究室で編集される、沖縄の歴史資料としても重要な琉球王府時代の行政文書『琉球王国評定書文書』（第1巻～第10巻）、毎月発行される図書館情報誌『はながわら』、その『利用者あんない』や目録類等、10種類の図書館刊行物が紹介されています。

また、図書館での活動として、秋の読書週間に毎年企画している展示活動を取り上げ「私の1冊——1993年秋の読書週間企画展より——」を資料として残しました。その他、館内の様子を記録写真風に捉えた「目で見る図書館風景」等、10年間活動の図書館史資料としての性格をもった記念誌となっています。

また、10月14日（土）に開催された、「市民フォーラム in うらそえ——その歩みとゆめ21——」では、高良倉吉氏（2代目館長・現琉球大学教授）を進行役に、大澤正雄（鶴ヶ島市立図書館準備室長）、石川清治氏（浦添市立図書館協議会長）、長堂英吉氏（作家）、西原廣美（市教育部長）、宮城篤正氏（初代館長・現浦添市美術館長）、西平実（現館長）によって、図書館10年の歩み・図書館の現状（開館にむけて、活動内容、蔵書、利用者について、組織体制等、地域とのネットワークについて等）、浦添市立図書館をめぐる課題（職員体制の強化、分館構想について、福祉サービス等の充実等）の内容が、専門家、利用者、行政側からの地域の図書館活動への意見、提案等、真剣かつ厳しい議論がなされました。このフォーラム内容も、報告書（簡易製本）として作成され、図書館で利用できます。

＜栗国恭子＞

内からみた図書館運営の一考察

遠 山 満

1. はじめに

浦添市立図書館に関わって、かれこれ1年8ヶ月になる。この間、内側から「公立図書館」を経験した実感は、「公立図書館は、常に成長するものではない」ということである。

この拙稿では、図書館の制度・政策やその運営に関する技術的な方法論の類いについて展開しようと意図するものでは毛頭ない。まして、浦添市立図書館という限られた「世界」の運営論でもない。しかし、敢えて言えば、この限られた「世界」から感じた図書館に対する「普遍性と現実性」への、ある意味で自覚的な挑戦かも知れない。

これまで、単に意識の外側というか、無自覚なまま漠然と外側から眺めているに過ぎなかった一般的な「図書館」から、幸いに図書館運営の一端を内から体験したあるがままの「実感」を、おもむくままに「雑感」として綴ってみようと思う。

絶えず離れることのない「実感」をベースにし、この小論のテーマを極めて内側に引き寄せて、述べていきたい。

ここでは、図書館運営における展開されるであろう多種多様な諸要因の中でも、特に「創造性」という概念との関連から、図書館員の心のあり様や外から伺い知れない図書館運営の一部についての普遍的側面と我が浦添市立図書館の今後の現実的な課題を言及できればと思う。

ここで述べていこうする手がかりは「創造性」という概念のもつ意味と、インドの図書館学者S・R・ランガナタン(1892~1972)が、1931年に著した『図書館学の5法則』で提起した言説と重ね合わせ

ようとするものである。

それに加え、浦添市立図書館が直面している事態について、私なりの思いを記そうと思う。その意味であくまでも個人的な観点に基づく記述である。

2. ランガナタンの卓見

ランガナタンの著作である『図書館学の5法則』の成果を、「図書館現象における経験的事実およびそこで駆使される技術に対して演繹的な説明を与える規範的原理として、図書館学の5法則を提示している」⁽¹⁾といわれる。

- (1) 図書は利用するためのものである
- (2) いずれの読者にもすべて、その人の図書を
- (3) いずれの図書にもすべて、その読者を
- (4) 図書館利用者の時間を節約せよ
- (5) 図書館は成長する有機体である

以上が5法則の簡単明瞭な文言であるが、彼の公にした『図書館学の5法則』を一読していけば、図書館についての、おおまかな歴史とその運営について、彼独特の口調により、平明かつ簡潔に語っていることがわかる。

そのおかれた国と時代状況のなかで、彼の果たした図書館への情熱を、イギリスの植民地にあった当時のインドの社会的・文化的な状況から、「祖国の独立を念願し、図書館によって、文化を振興するという啓蒙的な意味を含んでいる」⁽²⁾という側面もあり、また、1945年に結成されたユネスコが、「ランガナタンの思想を基盤として、1949年に公共図書館

宣言を発表した」³⁾といわれる思想的伝統も指摘されている。

しかし、一方で、「将来、図書館学がさらに発展して、スマートな理論体系が出現するかもしれない。そうなることを期待する。しかし、そういう理論体系を構築する際に、ランガナタンの5法則を無視することはできないであろう。これらの法則を完全に吸収消化した上でなければ、より高度の理論化は不可能であろう」⁴⁾とされるように、図書館学の学としての確立の観点からの位置は必ずしも高いものではないようだ。

しかしながら、「何か新しいものをこの世にもたらす思想は、それがたまたま出会い、自分の運動の中に引き込む既成の観念を通じて、自分を表明せざるをえないのです。こうして思想は、この哲学者の生きた時代に相対的なものとして現れます」⁵⁾と主張されるように、図書館学としての彼の表明は、「相対的な時代の思潮」という制限つきではあっても、使命感に裏打ちされた彼の先駆的な業績は、図書館自体の本質を、見事に演繹し、普遍化してみせた慧眼と信念の迫力さにあるのではないかと思う。

ともあれ、「ランガナタンの5原則を前提とすれば、現に図書館で行われている各種の実務およびそのための技術を、相当程度統一的にできることは確かである」⁶⁾との明言のように、ランガナタンの示した卓見は評価されてよい。

3. 図書館は成長する有機体

ランガナタンが示した第5の法則である「図書館は成長する有機体である」との言葉と、私の実感がある意味で重なっていることを知ったのは、後日のことであった。その後、この第5の法則の内容は興味引かれる対象になっていった。

彼の古典的著作といわれる⁷⁾『図書館学の5法則』で提示されているこの一つの法則は、「施設としての図書館の、重要で持続的な特性に関するものであり」⁸⁾、「第5の法則は、図書館の計画と組織化にかかわる基本的原理を表明する」⁹⁾と彼が述べていることから分かるように、具体的に詳述された理論

は、生物学的な観点を想起させる表現をしているが、「図書」、「利用者」、「職員」などを中心としたいわば「成長過程における物理的な増加という量的側面」が主に論じられている。

しかし、私の実感は、むしろこの法則の精神的側面に属するものであり、「物理的な増加に対応しなければならない図書館」を支える「ひとの内側」に関する問題なのである。その意味で、ランガナタンの自明的な公理の論述は、私にとって残念に感じられるのである。

一般的に、「図書館は、図書館資料、職員及び建物・施設（図書館の三大要素）と、これに利用者を含めて成立するものである」¹⁰⁾といわれるが、この内、私が心ひかれ言及しようとするものは、物理的に成長し続ける有機体を、生きながら、これを成長させなければならない人（職員）の精神のあり方についてである。つまり、図書館という社会的機関を推進する職員の「役割認識」と「創造性」についてである。

しかしながら、ランガナタンの5法則を貫く問題提起の底流には、それが物理的な側面への論及が主眼ではあったものの、「図書館の立地、開館時間、図書館家具、及び図書の保存方法が何であれ、図書館の運命を左右するものは最終的に図書館職員である」¹¹⁾という彼の強固な信念が脈打っていることを忘れてはならないだろう。

4. ランガナタンが示す図書館員の役割認識

ランガナタンの示した図書館職員の「役割認識」として諸点あげられている。ここでは、特に重要と思われる2点をあげてみたい。

ランガナタンは、「図書館職員」の本質的な心構えについて、「図書館職員のサービスの利益は教師のサービスによる利益と同じように、次の瞬間には——翌年あるいは10年後になっても——認められないものである。この利益は、もっとも普遍的で永続的であるけれども、一、二世代後にやっと表面化することであろう」¹²⁾と指摘している。

この指摘は、図書館の存在価値の意味内容とそれ

に属する構成員の役割の重要性をも示している。

ところで、図書館現象を社会科学的研究によって、論究しようとした、ピアス・バトラー（1866～1953）¹³⁾は、「図書館とは、人類の記憶を保存する——一種の社会的メカニズムであり、図書館はこれを生きている個人の意識に還元するこれまた社会な一種の装置といえる」¹⁴⁾という位置づけをしており、これを図書館学の「一つの原因とさえ見ることが出来る」¹⁵⁾との学的価値はともかくして、「図書館史」が物語っているように、人類が獲得しえたある意味での「社会的装置としての図書館」の役割の特質を、ランガナタンが言い当てていると思われる。

私に言わせれば、「図書館員は社会における文化遺産の世話人にすぎない」¹⁶⁾と指摘されるように、図書館が果たした社会的な役割に対する評価は、利用者が判断するものであり、利用者を媒介にして、誤解を恐れずにいえば、利用者の心的な価値の獲得を通じて体现されるもので、この意味において、図書館の特質の一つは普遍的な「無報酬性」にあるといえよう。

この普遍的な「無報酬性」は、功利的な心情とは、無縁であり、図書館の普遍的な「無報酬性」を支える職員は、図書館の役割を受け止め、当然のごとく懐の深い、開かれた心が、図書館員の心の様相でなければならないと思われるのである。

次に紹介する点は、『青い鳥』の作者で有名なモリス・メーテルリンクの触れている「ミツバチの精神」についてである。

ミツバチの巣箱の中の仕事振りと重ねて、図書館員の精神としての「無記名性」をランガナタンは、「職員は、互いに極めて温かい関係にならなければならない。職員は互いにあらゆる可能な方法で進んで協力をしあうべきである。嫉妬やねたみが、わずかでもあってはならない。排他的に自分の功績であると主張するような性格は、完全に克服されなければならない。〔図書館の〕すべての仕事が無記名のままで行われることを、職員のだれもが納得する程度までに、自己を抑制しなければならない」¹⁷⁾といっている。この考えは、集団生活においても適用される原則の一つでもあるといえるが、特に「図書館」

のもつ社会的機能からみれば、そのもつ重大な意味が浮かび上がっているように思える。

確かに図書館の業務の多くは、「無記名性」を帯びている。くる日もくる日もやってくる毎日の本の排架作業をはじめとして、図書等の装備作業、各種のサービス提供に至るさまざまな業務を、与えられた責任の上から「職員」が、果たさなければ機能しない。

これらは、単なる歯車の一部の役割であるかもしれないが、図書館という社会的機関全体を機能させる意味で、重要かつ偉大な一部である。その意味から、この心的様相は、図書館の機能維持で必須の基本的な心情であろう。ランガナタンも、「図書館が最大の効果で機能するためには、第5の法則にしたがって必然的に成長するにつれて、この精神が大事になる」¹⁸⁾と強調しているように、ここで問われているものは、その役割の一つずつが、「無記名」で、確実にやり遂げられているかどうかであろう。

これまで、「役割認識」としての普遍的な「無報酬性」と「無記名性」という心の様子に触れてきたが、ある意味での、静止的なこの二つの「精神」をさらに調和と前向きなエネルギーへ運ぶための動的な「特質」は何であろうか。

このもう一つの「心構え」のヒントになるのが、多くの臨床心理学者の「健康な人間」に関する考え方である。「精神の健康は、人格内外の諸機能の間に調和と統一が見られ、そのエネルギーは、効率的に行動推進に利用せられ、最高度の人格発達と最大限の生産性をもたらすような人格の状態を意味するものと考えられる」¹⁹⁾ような職員の生産的な心という「動的因子」であろう。

5. 図書館の発生と役割

前に、人類が獲得した「社会的装置としての図書館」の役割についてと記したが、ランガナタンの示した図書館職員の役割認識の諸点をふまえ、図書館職員の創造性の問題をさらに進めるためには、ここで図書館の発生と役割について、若干触れてみないわけにはいかない。

発生と役割といっても、私にとって、手に負えない困難なこの課題に取り組むつもりはない。ただ、私なりの感想を述べるに過ぎない。

「図書館は、たんに研究のための道具ではない。図書館は、人類の知的遺産を守り伝えているのである。だから、図書館利用という面からだけ見た場合でも、研究者が少なくとも図書館の歴史のアウトラインや、そしてまた何代にもわたって伝えられたこの偉大な遺産が、どのようにして収集者や司書たちによって、整備運用されてきたかを知らないでいたのでは、図書館を使いこなし、そこから大きな収穫は、引き出せないであろう。」⁽²⁰⁾といわれるように一部の権力者の恣意によって発生し、「知る権利」の要求に対する社会的保障という民主主義の展開の過程から、「図書館」という社会的機関の存在が獲得されたという自覚なしには、図書館のめざす方向は見えてこないのではないだろうか。

「図書館の発生は、古い時代に、その地域を支配していた権力者が、資料を収集し、蓄積することから始まったようである」⁽²¹⁾といわれ、「その意図は、絶対権力者としての自己の権威を誇示するためであり、資料を財宝視し、富を誇ることで、即ち、富の象徴としての満足を表わすものであった」⁽²²⁾とされ、「図書館は、最初一部の特権階級や権力者の意欲から、資料を収集・蓄積することから発生したが、人間社会と文化の歴史的発展にしたがって、漸次、現在のような図書館に発展したきた」⁽²³⁾との説は、説得力があるように思われる。

ある意味で、私は、少なくとも図書館の「形」の変遷として、「記録の蓄積・保存」という独占的形態から人類の普遍的権利としての「知る権利」の保障・解放であったと思う。

図書館の役割としては、次の指摘でも分かるが、「図書の存在と使命の達成を、社会的に半恒久的に保障しようとする施設が図書館です。図書をして、その使命をより完全に達成させること、いいかえれば知識の体系的な蓄積、その伝達と普及、そこに図書館の目的があります」⁽²⁴⁾とあり、一方、前述したランガナタンも図書館の果たす役割について、「図書館は、普遍教育の手段であり、図書館は、あらゆる

る教育の道具を一同に集め、無料に分配し、それらの助けで知識を普及するということである」⁽²⁵⁾と述べている。

このように、図書館のもつ普遍的な意義・役割を理解することができる。

6. 動的因子としての「創造性」について

これまで、図書館員の心のあり方としての「無報酬性」と「無記名性」ということについて触れ、図書館の発生と役割について述べてきたが、次に「創造性」との関連について進めていきたい。

創造について、19世紀のフランスにおける代表的な知性の1人であるアンリ・ベルグソン（1859～1941）は、彼の著作で、「生物の役割は、創造することです」⁽²⁶⁾といっているが、ランガナタンのいった「成長する有機体」の言を思い起こさせる。また、ベルグソンは、「創造は、自分で自分を創造することであり、少ないものから多くのものを引き出し、無から何ものかを引き出し、世界の豊かなものにならず何かをつけ加える努力によって、人格を大きくすることです」⁽²⁷⁾ともいっている。

創造とは、「基本的によいものを作ろうとする努力」であり、それが精神的な創造に由来すればするほど、人格も成長していく関係とも整理することができる。その意味あいにおいて、「成長欲求の人格こそ、最も創造性の高い人格である」との結論に到達できる」⁽²⁸⁾とする説と共通するものがある。

一方、ほぼ同時代に生きたイギリスの歴史学者A・J・トインビー（1889～1975）も創造について、同様の内容を指摘し、「私たちの生きがいは、創造的であるということです。創造的とは、私たちが住んでいるこの宇宙を変えようと努力すること。宇宙上に与えられたものに悪いものではなく、善いものをつけ加えようと努力することです」⁽²⁹⁾と言及するように、前出のベルグソンの創造性についての認識と極めて一致している。

前述のように、トインビーは、「創造」と「生きがい」の関係性を述べたが、ベルグソンは、生きがいの内容を、「創造」と「喜び」の関係性から、さ

らに展開して、次のように言及している。

「楽しみは、生命に生物を保存させるために、自然が考え出したてくだに過ぎません。楽しみは、生命が進んでいく方向を示すものではありません。しかし、喜びはいつも生命が成功したこと、生命が地歩をえたこと、生命が勝利を得たことを告げています。喜びがあるところにはどこにでも、創造があることが知られます。創造が豊かであればあるほど、喜びは深いのです」⁽³⁰⁾。

これらの主張は、社会的使命を帯びる図書館職員の内側の意識のあり方にとっても、示唆に富む内容といってよい。図書館における特質としての普遍的な「無報酬性」と「無記名性」をさらに下から支える職員の生産的な心、言い換えれば「創造性」という概念に帰着すると考えられるからである。

創造とは、常に開いていこうする心のあり方であり、社会的に図書館サービスが、基本的人権としての「知る権利」の保障という普遍性を帯びているがゆえに、このサービスも、今後とも永遠に創造していかなければならないのである。

「われわれの人格は、たえず成長し、発達し、成熟する。人格の各瞬間は以前からあったものに付け加えられた新しいものである」⁽³¹⁾とベルグソンがいう「人格」と「創造」の関係でいえば、図書館の有機体としての「人格」の成長も、このことが実は基底に要請されるものであろう。

全人類の規模の情報化という推移の中で、情報量の増加など常に物理的にも成長し続けなければならない知的サービスの拠点としての図書館を、機能させる図書館職員の心の「かたち」も、すべての人々に、図書館サービスが提供されるよう創造的な進化が要請されるのである。

冒頭ですでに示したランガナタンの第5の法則であった、「図書館は成長する有機体である」という命題の精神的な側面として、物理的な限界を常に乗り越えつつ、より質の高い図書館サービスの理想を追求し、未来に進む有機体の「創造的運動」そのものが、彼が希求した図書館ではなかったのかと私には思えてならないのである。

7. 浦添市立図書館の生まれた背景と市民の役割

これまで、どちらかといえば、理念的な議論を展開してきたが、今後は、現実的な課題について論じてみようと思うが、その前に、少々我が「まち」の事情を語っておきたい。

我がまちにある市立図書館は、1985（昭和60）年に誕生した。ちょうど今年（1995年）は、開館10周年の佳節を刻むことができた。10周年というと西欧世界における図書館史からみれば途方もなく微かな営みにもみえて心細く思われる。

さらに、残念ながら、我が市立図書館は、市民が自ら獲得した知的財産ではなかったことである。

M・H ハリスは、公立図書館の成立と発展に関して、もっともよく指摘される要因として、次の5つを挙げている。⁽³²⁾

- (1) 図書館を設立し維持しうる経済力
- (2) 教育（とりわけ公教育）に対する全般的関心の増大
- (3) 産業化に伴う都市居住者の増加
- (4) 活力ある、開明化した指導者の存在
- (5) 自己教育への熱意

以上の公立図書館の成立と発展をもたらした要因とされる、「経済力」、「都市化」、「指導者」、「教育」の中でも、特に我がまちへの図書館の誕生の秘話として（いつのときにでも、できごとの発端としての先駆的な萌芽があるものであるが）、「活力ある、開明化した指導者の存在」としての要因が強くあげられることである。

この間の事情を、第二代の館長であった高良倉吉氏は、かつて図書館設立の発端について、時の市長が、「……………では浦添市から始めてみよう」と決意し、直ちに実行に移した⁽³³⁾と綴っている。

私は、特定した人物の先見性を宣伝しようとするものでもないし、県内でも比較的早く図書館ができたことをもて遊ぶものでもない。そもそも日本の

おかれている図書館に関する本格的な認識や議論が深まってきたのも高々近年に過ぎないし、日本への「図書館」導入の経緯も、「公的な社会制度としての図書館」は明治期に発生したが、それは共同体の要求に支えられ、国民の権利としてヒエラルキーの底部から胎生したいわゆる《生まれた図書館》でなく、良心的インテリゲンチヤによって文明開化のシンボルとして輸入され、公権力によって近代国家としての整備と富国強兵の一環として、お上から下附されたいわゆる《作られた図書館》であった⁽³⁴⁾とされる事情とあまり変わらないからである。

ただ、図書館建設についての意思是、あくまでも各地域住民における図書館のもつ社会的な意味や認識の重要性に負うところが大きいことを論じたいためである。(そのことについては、あらためて触れたい)。

「図書館運営における市民と図書館の関係は、そのまま市民と自治体の関係でもある。すぐれた施策を実行する自治体では、市民の要求もレベルが高くなるが、みてくれだけの施策ばかりの自治体では、要求もそれに見合ったものになってしまう⁽³⁵⁾との指摘と、また「自治体は、見せかけでない文化を市民生活の中に育ていかなければならない。それは自分で考え、その考えに従って行動する自立した市民こそが自治体の支え手になるからである。自治体がそのような施策を進めるとき、市民の要求は中身も要求も表し方も違ったものになってくる。目先の小さな欲求を満足させるための要求でなく、広い視野からの発想となって、自治体を変える力になるだろう。自治体のすぐれた施策は、すぐれた市民を育て、その市民がまた行政水準をより高いものにしてゆくのである⁽³⁶⁾との鋭い指摘は、図書館設置の意義などを含む、地域住民の意識のあり方を示して余りある。

これらのことから、図書館設置やその運営については、図書館に対する地域住民の真剣な要求が不断から醸成・構築されることだと思われる。

我がまちへの図書館誕生の経過がどうであれ、社会におけるサービスの持続的成長機関としての図書館が、今後このまちへの形成に果たした成果は、時

代を重ねた市民の成長とともにこそありえよう。

私は、図書館という社会的機能をうまく利用する市民、情報を選択し、活用する自立した市民を育てることだと思うものであるが、その環境を提供し醸成するための、市民の理解と協力が一層もとめられていよう。その意味で、我が図書館は、わずか10年しか歩んでいないこれからの「有機体」なのである。

8. 公立図書館成立の根拠と住民の真価

前述した図書館設置に関して、「地域住民」が担う重要な役割について触れたが、そのことについて今少し、簡略化して述べたい。

1950(昭和25年)年に、我が国に成立した「図書館法」の第10条に「公立図書館の設置に関する事項は、当該図書館を設置する地方公共団体の条例で定めなければならない」という規定になっている。

この規定を棒読みするだけでは、実は規定の歴史的苦悶の経過が看過されることになる。

日本における文言規定にも反映されると思われる歴史的背景の一部については、後に譲ることとするとして、公立図書館を規定する法律の条文に込められた原意を、結論から先にいえば、図書館を設置するかしないを判断するのは、あくまでも国の判断が先行するものではないということである。

それを逆説的にいえば、図書館建設については、住民の、すぐれて主体的・自主的な発意が原動力とならなければならないことを示しているといえる。

また、図書館設置にかかわる費用について、同じく「図書館法」の第20条では、「国は、図書館を設置する地方公共団体に対し、予算の範囲内において、図書館の設置、設備に要する経費の一部を補助することができる」と規定(国の財源負担の回避との関係も想起されるが)されるように、図書館を作らなければならないので、国の費用と自治体の費用を使わなければならない。とはなっていないことからそのことを察することができる。その意味で民主的であると同時に地域の価値判断を問う厳しい主体性の問題に帰着せざるを得ない。

各地域のこのような最終的主体的判断なるものは

取りも直さずこの地域の「住民」の真価を問うものとなっているのである。

1850年には、イギリスにおける最初の図書館法が成立した年で、この立法の経過はさておき、図書館を包括する考え方として、近代の図書館は「公開性」、「公費負担」、「無料制」を示している。

このなかでも注目されるのが、「公費負担」についてである。前の法律の審議に際して、特別委員会での考え方として「結局、図書館の設置と維持のため課税する権限を市議会に与えることによって、実際に図書館を設置するかどうかは、それぞれの都市の判断にゆだねるという道を選んだのである」⁽³⁷⁾という審議過程のながれの考え方は、注目に値するものといえよう。少なからず、わが国の図書館法にも引き継がれている精神ともいえよう。

9. 図書館を支える人の問題

我が図書館は、わずか10年の歩みではあるが、その間、蔵書や数々の図書館サービスも、それなりに物理的に成長してきたといえる。

しかしながら、普遍的な信条の強調のみで片付けられない極めて、現実的な問題が職員体制の問題である。逆に、ここで当初で触れたランガナタンの第5の法則である「図書館は成長する有機体である」という量的・物理的側面の課題に引き戻される。

図書館の有するこれまで触れてきた社会的機能を支える職員の適正な物理的数量に配置になっているとはいいたい。

図書館の職員の過半数が臨時雇用（嘱託雇用も含む）の形態で勤務をしている状況になっているのである。

ことに臨時雇用の職員が、定期的に入れ替わりを余儀なくされることによって、積み上げられてきた図書館の「機能」や「伝統」は、振り出しに戻る状況が繰り返されてきているのである。この状況は、公的機関としての図書館の今後の創造的な進化を阻む最大の要因となっている。

そのことは、多くの図書館の中でも、特に、図書館サービスが広がりをもつに伴って経験されている

ある意味で、客観的な状況ではないだろうか。人の資質を問うことも必要なかも知れないが、基礎的な人員確保もより重要なことである。

それを阻む要因の中に、「法的制約」と「公費負担」などの問題が予想される。膨張していく社会的サービスをどのように公費で賄うかという難問に突き当たらざるをえない。

それは、この「図書館」がどのような歩みをしていくか、つまり、市民が「図書館」をどのようにしたいのかという今後の「哲学的な選択」にかかっているのである。

10. まちへのサービス展開の問題

市の図書館協議会でも答申済みであるが、図書館ができて既に10年が経過した現在、果たして「一館主義」でいいのかということが、常に抱えているもう一つの問題である。

それは、内にあっても、「蔵書の増加」等に伴う「一館主義」での図書館サービスの限界がまもなく訪れようとしている現在、そのことと、外へのサービスの具体的な展開というより重要な課題を背負っている。

人類にとって、普遍的な「知る権利」の保障を、この「まち」の隅々まで、どのように浸透させていくか、ここでも「自立した市民の声」と、「公の財源負担」の問題が待ち構えるのである。当然のこととして、財源負担の課題は、避けて通れないことはいうまでもない。

いずれにせよ、図書館の価値が、よりよい市民を育てるための内面充実への先行投資の施策だとすれば、そのことの普及は、その前に、どのような「まち」にしていこうかという、そこに住む市民の意思にかかっているといっていよい。

この図書館サービス機能の合理的な地域化の課題も、ある意味で、市民合意の「演繹的な戦略」にあり、また、公費で支出される財源の問題は、あくまでも行政の「現実的知恵」によるものといえよう。

おわりに

「公立図書館は、常に成長するものでなければならぬ」という実感を中心に、現実の図書館職員として、あくまでも図書館の内から見、感じてきたことを、これまで雑感として述べてきた。

図書館にかかる「普遍性」と「現実的課題」の一端に触れてきたが、「普遍性」の展開として、図書館職員に共通する精神的側面が浮かび上がったか、大いに反省が残る。また、現実的な課題に対する客観的な分析のゆとりがなかったことをお詫びする。

ともあれ、人類と共に、これからも離れることのない「図書館」は、単なる社会的施設でなく、成長する「社会的遺産」である。更に、「内」と「外」の課題を抱えるものの、その機関を担う「ひと」の内側も、困難に見える課題を乗り越えながら、創造し続けなければならない。この遺産を次の世紀へ引継ぐためにも。……………多少なりとも私の抱いた「実感」がイメージできたのであれば幸いである。機会があれば、深く追及できなかった図書館に関する現実的な課題の具体的化を試みたい。

〈引用文献〉

注

- (1) 森 耕一 『公立図書館原論』 全国学校図書館協議会 1983年 P115
- (2) 椎名六郎 『新図書館学概論』 学芸図書株式会社 1973年 P111
- (3) 渡邊正亥監修 『図書館通論』 東京書籍印刷株式会社 1983年 P139
- (4) 森 耕一 前掲書 P115～P116
- (5) 矢内原伊作訳 『ベルグソン全集』第7巻 白水社 1965年 P142
- (6) 森 耕一 前掲書 P115
- (7) 小林 宏訳、マソン・サルヴァン共著 『図書館』 白水社 1969年 P96
- (8) (9) 森 耕一監訳、SRランガナタン 『図書館学の五法則』 日本図書館協会 1981年 P305
- (10) 渡邊正亥監修、前掲書 P11
- (11) 森 耕一監訳、SRランガナタン 前掲書 P48
- (12) 森 耕一監訳、SRランガナタン 前掲書 P64
- (13) 渡邊正亥監修、前掲書 P125
- (14) ピアス・バトラー 『図書館序説』 日本図書館協会 1987年 P23
- (15) 椎名六郎、前掲書 P115
- (16) ピアス・バトラー 前掲書 P122
- (17) (18) 森 耕一監訳、SRランガナタン 前掲書 P327～P328
- (19) 上田吉一 『精神的に健康な人間』 川島書店 1969年 P37
- (20) 小林 宏訳、マソン・サルヴァン共著 前掲書 P11
- (21) (22) 椎名六郎 前掲書 P30
- (23) 椎名六郎 前掲書 P31
- (24) 森 耕一 『図書館の話』 至誠堂 1966年 P174
- (25) 森 耕一監訳、SRランガナタン 前掲書 P331
- (26) 渡辺 秀訳 『ベルグソン全集』 第5巻 白水社 1965年 P25
- (27) 渡辺 秀訳 前掲書 P38
- (28) 上田吉一 前掲書 P195
- (29) A. J・トインビー 『未来を生きる』 毎日新聞社外信部 1971年 P25
- (30) 渡辺 秀訳 前掲書 P37
- (31) 松浪信三郎・高橋允昭共訳 『ベルグソン全集』 第4巻 白水社 1965年 P23
- (32) 森 耕一 『公立図書館原論』 前掲書 P68
- (33) 高良倉吉 『切ない沖縄の日々』 ボーダイUNK社 1995年 P161
- (34) 裏田武夫 『図書館学の創造』 日本図書館協会 1987年 P15～P16
- (35) (36) 前川恒雄 『われらの図書館』 株式会社筑摩書房 1987年 P112
- (37) 森 耕一 前掲書 P33

『球陽』と『年中各月日記』に見る近世沖縄の気象

徳 元 剛

はじめに

伊志嶺安進氏の『沖縄気象歳時記』（ひるぎ社、おきなわ文庫、1987年）より、気象庁が区分した沖縄の季節を見ると、以下のようである。

春	春	2月下旬～4月下旬
	初夏	4月上旬～5月上旬
	雨期	5月中旬～6月下旬
夏	夏	6月下旬～9月中旬
	残暑	9月中旬～10月上旬
	秋	10月上旬～11月
	冬	12月～2月下旬

沖縄ではどうやら、春・夏・秋・冬の四季に雨期を加えて五季とでもいうような、そんな季節区分が成り立っらしい。

例えば雨期に注目すると、咸豊5年（1855）旧4月の中旬から旧5月の上旬、1ヶ月ほど間を置いて、旧6月中旬まで雨天が多く、この時期が雨期に当たっている。

咸豊5年旧4月の『年中各月日記』には、この年のはじめから水不足に悩まされ、とうとう旧4月3日から5日にかけて雨乞いを執り行うことが決定されたとの記事が載っている。しかし、この時の雨乞

いでは降雨に恵まれなかった。そこで同月15日から17日にかけて再び雨乞いを計画し、実行に移そうという矢先に、まるで人をからかっているかのように大降りの雨が6日間降り続いた。役人の家屋敷が雨漏りしたり、石垣が崩壊したりと、被害が出た。

その他、落雷、雪、霰、竜巻など、近世沖縄の歴史資料の中には、随分とそれらについての記事が出てくる。『球陽』がその筆頭に挙げられるが、その記事を補って余りあるのが『年中各月日記』という資料である。特に原本と思われる国立公文書館所蔵の咸豊5年と6年（1856）分のそれには、その年の何月何日の天気や風向きがどうだったかまでが律儀なまでに記されている。しかも、豪雨や落雷などによって人身や家屋にどの程度の被害が出たかについての情報は、『球陽』に比較してかなり詳しい。

そこで、以下に『球陽』と『年中各月日記』の中の気象関係記事を抜き出して、近世の沖縄でどのような自然災害が起こっていたのかを概観してみるのもよいと思う。さらに上の2つの歴史資料における、記述の比較なども見えてくるであろう。

〔咸豊5年1月8日／旋風〕

◇本年豊見城郡金良平良両村旋風大作、吹倒各処人家及諸木

〔『球陽』巻22-1975番〕

◇ 覚

豊見城間切

金良村

仁王赤嶺

一あな屋壺軒、長式間五合・よく式間

赤嶺筑登之

一同壺軒、長式間・よく壺間五合

同人

一同壺軒、長式間五合・よく式間

赤嶺筑登之

一同壺軒、長式間五合・よく式間

とく赤嶺

一同壺軒、長式間五合・よく式間

赤嶺筑登之

一同壺軒、長式間・横壺間五合

おた

一同壺軒、長式間・横式間

但、七行吹被倒置申候。

一諸木式拾五本

内

壺本廻六尺程、式本廻四尺五寸程、拾五本廻三尺程、七本廻式尺五寸程之等吹折置申候。

平良村

かな宮城

一あな屋壺軒、長式間・横壺間五合

同人

一壅屋壺軒、長壺間五合・よく壺間

但、式行吹倒置申候。

運天筑登之

一あな屋壺軒、長式間・横壺間五合

但、居所より四拾間程へ吹放置申候。

同人

一壅屋壺軒、長壺間五合・よく壺間

但、居所より七拾間程へ右同。

右之通、去八日八つ時分逢風巻、本行但書之通被吹破候得共、人々へは何ぞ怪我無御座候。此旨首尾申（上）候。以上。

卯正月

喜屋武にや

金城にや

大城にや

具志筑登之

座安親雲上

〔『評定書文書』第9巻、451～453ページ〕

〔咸豊5年4月3日～5日／雨乞い〕

◇本年四月雪

此年正月下旬以来旱魃為灾雨沢不降自四月初三日以至初五日照例禱雨

〔『球陽』巻22－1979番〕

◇此程雨降候得共、田方水入候程之雨にて無之候付、今日より五日迄雨乞被仰付候。委細別段日記に相見得候事。

〔『評定所文書』第9巻、500ページ〕

◇

一早に付此間雨乞被仰付候得共、雨降不申候付、今日より来る十七日迄禪家・聖家・社家中自分にて雨乞御祈念仕度旨願出、其通言上相濟候処雨降候付、右雨乞被召留候。委細別冊に相見得候事。

〔『評定所文書』第9巻、506ページ〕

◇十四日丙午雨天 風子丑之間 夜同断

十五日丁未雨天 風卯辰之間 夜同断

十六日戊申雨天 風辰巳之間 夜同断

十七日己酉雨天 風卯辰之間 夜同断

十八日庚戌雨天 風卯辰之間 夜同断

十九日辛亥雨天 風亥子之間 夜同断

〔『評定所文書』第9巻より〕

◇御奉行様御住居所後表囲石垣、長式間計昨夜相崩不用心有之候上、当時異国人も時々致外出事にて御念遣被思召候間、人夫召重今日中築立候様可取計旨、分けて御沙汰之趣御座候段、御仮屋守申出有之候間、一刻も早目に相調候様、構之向へ被仰渡、此段致御問合候。以上。

附、御住居所所々雨漏有之候間、是又早々修甫被仰付度、御仮屋守申出有之候間、構之向へ被仰渡度候。

四月十七日

糸洲親雲上

川平親雲上

御鎖之側御方

〔『評定所文書』第9巻、510ページ〕

〔咸豊5年7月26日／旋風〕

◇本年恩納郡谷茶村旋風大作吹倒各処人家

〔『球陽』巻22-1982番〕

◇ 覚 谷茶村

一与儀筑登之家内大屋・台所共被吹倒、靈前并諸道具相損申候。

一かまと真栄田・当山筑登之親雲上・谷茶親雲上・石川筑登之四人、家内大屋・台所共つき被吹取申候。

一長浜筑登之親雲上・とゝう瀬良垣兩人、蔵之つき被吹取申候。

一前兼久親雲上台所屋中吹抜蔵之つき被吹取申候。

一かまと嘉手苅・うし山城兩人、家内大屋後平被吹取申候。

一かまと当山・かめ当山・山城筑登之親雲上・かまと嘉手苅四人、家内屋之つき被吹取申候。

右ヶ条之通、家内々々去廿六日夜之九ツ時分逢風まき被吹損申候。尤人々并諸作毛は別条無御座候。此段首尾申上候。以上。

卯七月

瀬良垣筑登之

山城にや

前兼久親雲上

〔『評定所文書』第9巻、588～589ページ〕

〔咸豊6年2月21日／落雷〕

◇本年二月二十一日雷震宜野湾郡真志喜村界内大川原此日真志喜村宮城筑登之親雲上妻併其孫那美兩人被雷震死

〔『球陽』巻22-1992番〕

◇ 覚 宜野湾間切

一当歳五拾四 妻

一同四 なへ

右者今朝真志喜村帳内大川原に落雷逢怪我致死去候間、此段首尾申上候。以上。

二月廿一日

呉屋筑登之

城間にや

又吉筑登之

知念親雲上

〔『評定所文書』第11巻、283ページ〕

〔咸豊6年4月27日／落雷〕

◇本年四月二十七日雷震寄居南風原郡兼城村界内新川原長尾筑登之宅

此日南風原郡宮城村仲里筑登之親雲上避雨暫居長尾宅之時被雷震死

〔『球陽』巻22-1994番〕

◇ 覚 南風原間切

当間切兼城村帳内新川原住居長尾筑登之宅へ今日之雨に雷落仕、宮城村上門之仲里筑登之親雲上逢怪我相果候付、此段首尾申上候。以上。

辰四月廿七日

知念にや

照屋にや

喜久本にや

宮城筑登之

仲里親雲上

〔『評定所文書』第11巻、352ページ〕

〔咸豊6年9月9日／落雷〕

◇本年九月初九日雷震東村田頭筑登之女子真蒲戸宅此日租居真蒲戸宅之無系宮城筑登之男子守人婦女加弥冒着雷烟身故其舌少黒奴女加真亦驚倒絶氣幸因調治全命（損破屋上約方二尺）

〔『球陽』巻22-1997番〕

◇ 覚

当歳六拾参成女

かめ

右者、今日七ツ過時分私共与内田頭筑登之女子真蒲戸借宅宮城筑登之家へ雷落、煙に当り候哉倒伏其儘相果、舌色少黒相成申候。尤下女かまにも倒伏気分為取失由候処、早速致養生候付西時分より気分宜相成申候。此段首尾申上候。以上。

附、家之上瓦式尺程打損置申候。

辰九月九日

田頭筑登之

喜屋武にや

伊差川にや

伊差川筑登之

屋嘉筑登之

〔『評定所文書』第11巻、461ページ〕

〔咸豐7年1月15日／降雪〕

◇十年丁巳正月初五日於大里郡稻嶺目取真湧稻国三
村有雪降其大如唐豆

〔『球陽』卷22－2004番〕

◇

一大里間切へ霰降候段首尾書之事。

〔1558号「年中各月日記」目録〕

〔咸豐7年2月29日～3月1日／雨乞い〕

◇本年二月雪

此年早魃爲災雨沢不降二月二十九日以至三月初一日
照例禱雨

〔『球陽』卷22－2005番〕

◇

一旱付雨乞之事。

〔1558号「年中各月日記」目録〕

〔咸豐7年3月13日／大雨乞い〕

◇本年三月大雪

客歲十二月以來禱雨兩次未見其効本月十三日 主上
親詣雨乞嶽併弁嶽禱雨更令爬龍舟于龍潭又行檄國中
暨附近諸島巡察山嶽拾集暴骨圪地埋葬賜祭安魂且墓
墳大壞屍骨暴露猶無子孫可修者令加修葺以安幽魂至
于四月雨沢大降

〔『球陽』卷22－2006番〕

◇

一早に付禪家・聖家・社家中雨乞被仰付候事。

〔1558号「年中各月日記」3月目録〕

〔咸豐7年6月24日／雨乞い結願〕

◇本年六月二十四日於靈嶽神宮等處始行禱雨報祭向
例於靈嶽神宮等處禱雨無行報祭今般 主上降旨令諸
官議定依照中華典禮行報祭乃于六月二十四日親詣
雨乞嶽併弁嶽始行報祭其餘靈嶽神宮等處或遣官或令
禪家聖家報祭

〔『球陽』卷22－2007番〕

◇一雨乞御結願之事。

〔1558号「年中各月日記」6月目録〕

以上のように『球陽』と『年中各月日記』との対
応関係にある記事を抜き出してみたが、近世の沖縄
は、異国人の逗留の他、気象の善し悪しにも悩ま
されていたのである。しかも気になるのは、落雷の記
事が多いことである。落雷に対して、何か予兆めい
た意識があったのだろうか。ちょうど天女の降臨と
同じようにである。

最後に、国立公文書館所蔵の咸豐5年・6年分
『年中各月日記』の、日付および天気・風向きにつ
いての記述をまとめてみた。

〔咸豐5年〕

□1月

1日乙丑	晴天	風未申之間	夜同断
2日丙寅	晴天	風未申之間	夜同断
3日丁卯	晴天	風辰巳之間	夜同断
4日戊辰	曇天	風戌亥之間	夜同断
5日己巳	曇天	間々小雨降	風子丑之間 夜同断
6日庚午	晴天	風丑寅之間	夜同断
7日辛未	晴天	風丑寅之間	夜五時分より間々小 雨降 風同断
8日壬申	雨天	七頭時分より晴	風寅卯之間 夜 同断
9日癸酉	晴天	風申酉之間	夜同断
10日甲戌	晴天	風卯辰之間	夜四時分より間々小 雨降 風同断
11日乙亥	雨天	風辰巳之間	八時分より晴 風子 丑之間 夜同断
12日丙子	曇天	間々小雨降	風子丑之間 夜同断
13日丁丑	曇天	間々小雨降	風戌亥之間 夜同断
14日戊寅	晴天	風戌亥之間	夜同断
15日己卯	晴天	風未申之間	夜同断
16日庚辰	晴天	風未申之間	夜同断
17日辛巳	晴天	風巳午之間	夜同断
18日壬午	晴天	風巳午之間	夜七時分より小雨降 風同断
19日癸未	晴天	風午未之間	夜六頭時分雨降 風

西戌之間
 20日甲申 晴天 風西戌之間 夜同断
 21日乙酉 晴天 風西戌之間 夜同断
 22日丙戌 晴天 風西戌之間 夜同断
 23日丁亥 晴天 風戌亥之間 七頭時分より寅卯之間 夜七時分より雨降 風巳午之間
 24日戊子 雨天 風巳午之間 七時分より晴 夜五時分より間々小雨降 風同断
 25日己丑 曇天 間々小雨降 風巳午之間 夜同断
 26日庚寅 曇天 風巳午之間 夜八時分より間々雨降 九頭時分より晴天 風同断
 27日辛卯 雨天 風巳午之間 四時分より晴 夜同断
 28日壬辰 晴天 風巳午之間 夜同断
 29日癸巳 曇天 風亥子之間 夜同断
 □2月
 1日甲午 晴天 風亥子之間 夜同断
 2日乙未 曇天 風戌亥之間 夜同断
 3日丙申 曇天 風戌亥之間 夜同断
 4日丁酉 晴天 風西戌之間 夜同断
 5日戊戌 曇天 風亥子之間 夜同断
 6日己亥 晴天 風西戌之間 夜同断
 7日庚子 晴天 風亥子之間 夜同断
 8日辛丑 曇天 風子丑之間 夜同断
 9日壬寅 晴天 風巳午之間 夜同断
 10日癸卯 曇天 風子丑之間 夜同断
 11日甲辰 晴天 風戌亥之間 夜同断
 12日乙巳 曇天 風戌亥之間 夜同断
 13日丙午 晴天 風戌亥之間 夜同断
 14日丁未 晴天 風西戌之間 夜同断
 15日戊申 晴天 風巳午之間 夜八時分より雨降 風同断
 16日己酉 雨天 風午未之間 酉時分より晴 同時より風戌亥之間 夜晴天 風同断
 17日庚戌 晴天 風戌亥之間 夜同断
 18日辛亥 晴天 風未申之間 夜同断
 19日壬子 晴天 風未申之間 夜六時分より雨降 風卯辰之間
 20日癸丑 雨天 風卯辰之間 酉時分より晴 夜晴天 風同断

21日甲寅 晴天 風子丑之間 夜同断
 22日乙卯 晴天 風子丑之間 夜同断
 23日丙辰 晴天 風子丑之間 夜同断
 24日丁巳 晴天 風辰巳之間 夜同断
 25日戊午 晴天 風辰巳之間 夜同断
 26日己未 晴天 風辰巳之間 夜同断
 27日庚申 晴天 風辰巳之間 夜同断
 28日辛酉 曇天 風午未之間 夜同断
 29日壬戌 晴天 風午未之間 夜同断
 □3月
 1日癸亥 晴天 風巳午之間 夜同断
 2日甲子 晴天 風午未之間 夜同断
 3日乙丑 晴天 風巳午之間 夜同断
 4日丙寅 晴天 風午未之間 四時分より間々小雨降 夜曇天 風同断
 5日丁卯 晴天 風午未之間 夜同断
 6日戊辰 晴天 風午未之間 夜同断
 7日己巳 晴天 風巳午之間 夜同断
 8日庚午 晴天 風午未之間 夜五頭時分より間々小雨降 風同断
 9日辛未 曇天 風未申之間 八頭時分より小雨降 七時分より晴 夜曇天 風同断
 10日壬申 晴天 風卯辰之間 酉時分小雨降 無間も晴 夜曇天 風同断
 11日癸酉 曇天 風午未之間 九頭時分より間々小雨降 七時分より晴 夜曇天 風同断
 12日甲戌 晴天 風午未之間 夜同断
 13日乙亥 晴天 風午未之間 夜同断
 14日丙子 晴天 風午未之間 入相時分小雨降 夜晴天 風同断
 15日丁丑 晴天 風午未之間 四過時分より小雨降 風亥子之間 夜同断
 16日戊寅 晴天 風子丑之間 夜同断
 17日己卯 曇天 風午未之間 夜同断
 18日庚辰 晴天 風午未之間 夜同断
 19日辛巳 晴天 風未申之間 七頭時分より間々小雨降 風戌亥之間 夜曇天 風同断
 20日壬午 晴天 風戌亥之間 夜同断
 21日癸未 晴天 風子丑之間 夜同断
 22日甲申 曇天 風卯辰之間 四頭時分より小雨降

八時分より晴 夜晴天 風同断
 23日乙酉 晴天 風辰巳之間 七頭時分より間々小雨降
 雨降 酉頭時分より晴 夜風同断
 24日丙戌 晴天 風辰巳之間 夜同断
 25日丁亥 晴天 風午未之間 夜同断
 26日戊子 晴天 風午未之間 夜同断
 27日己丑 晴天 風午未之間 夜同断
 28日庚寅 晴天 風午未之間 夜同断
 29日辛卯 晴天 風未申之間 夜五時分より間々小雨降
 風同断
 30日壬辰 晴天 風未申之間 八頭時分雨降 無間
 も晴 風辰巳之間 夜晴天 風同断

□4月

1日癸巳 晴天 風辰巳之間 八頭時分より雨降
 夜八頭時分より晴 風同断
 2日甲午 晴天 風未申之間 夜同断
 3日乙未 晴天 風巳午之間 夜同断
 4日丙申 晴天 風巳午之間 夜同断
 5日丁酉 晴天 風巳午之間 夜同断
 6日戊戌 晴天 風午未之間 夜同断
 7日己亥 晴天 風申之方 夜同断
 8日庚子 晴天 風申酉之間 夜同断
 9日辛丑 晴天 風酉之方 夜同断
 10日壬寅 晴天 風戌亥之間 夜同断
 11日癸卯 晴天 風午未之間 夜同断
 12日甲辰 晴天 風申酉之間 夜同断
 13日乙巳 曇天 風亥子之間 夜同断
 14日丙午 雨天 風子丑之間 夜同断
 15日丁未 雨天 風卯辰之間 夜同断
 16日戊申 雨天 風辰巳之間 夜同断
 17日乙酉 雨天 風卯辰之間 夜同断
 18日庚戌 雨天 風卯辰之間 夜同断
 19日辛亥 雨天 風亥子之間 夜同断
 20日壬子 晴天 風酉之方 夜同断
 21日癸丑 曇天 風卯之方 夜同断
 22日甲寅 雨天 風午未之間 夜同断
 23日乙卯 雨天 風亥子之間 夜同断
 24日丙辰 晴天 風午未之間 夜同断
 25日丁巳 雨天 風亥子之間 夜同断
 26日戊午 曇天 風丑寅之間 夜同断

27日己未 雨天 風丑寅之間 夜同断
 28日庚申 曇天 風巳午之間 四時分小雨降 無間
 も晴 夜雨天 風同断
 29日辛酉 雨天 風未申之間 夜同断
 □5月
 1日壬戌 曇天 風未申之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断
 2日癸亥 曇天 風未申之間 九頭時分より雨降
 風申酉之間 夜雨天 風同断
 3日甲子 雨天 風亥子之間 夜雨天 風同断
 4日乙丑 雨天 風申酉之間 九時分より晴 七時
 分より間々雨降 風未申之間 夜曇天
 風同断
 5日丙寅 曇天 風申酉之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断
 6日丁卯 曇天 風巳午之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断
 7日戊辰 晴天 風未申之間 夜同断
 8日己巳 晴天 風未申之間 夜同断
 9日庚午 晴天 風巳午之間 夜同断
 10日辛未 晴天 風巳午之間 夜同断
 11日壬申 晴天 風巳午之間 夜同断
 12日癸酉 晴天 風辰巳之間 夜同断
 13日甲戌 晴天 風辰巳之間 夜同断
 14日乙亥 晴天 風辰巳之間 七時分より小雨降
 夜曇天 風同断
 15日丙子 晴天 風午未之間 夜同断
 16日丁丑 晴天 風未申之間 四頭時分雨降 無間
 も晴 九頭時分雨降 無間も晴 夜晴天
 風同断
 17日戊寅 晴天 風午未之間 夜同断
 18日己卯 晴天 風午未之間 夜同断
 19日庚辰 晴天 風未申之間 夜同断
 20日辛巳 晴天 風午未之間 九時分より小雨降
 八頭時分より晴 夜晴天 風同断
 21日壬午 晴天 風午未之間 夜同断
 22日癸未 晴天 風午未之間 夜同断
 23日甲申 晴天 風午未之間 夜同断
 24日乙酉 晴天 風午未之間 夜同断
 25日丙戌 晴天 風未申之間 夜同断

26日丁亥 晴天 風申酉之間 夜同断
 27日戊子 晴天 風申酉之間 夜同断
 28日己丑 晴天 風寅卯之間 夜同断
 29日庚寅 晴天 風寅亥之間 夜同断
 30日辛卯 曇天 風子丑之間 七頭時分より間々小
 雨降 夜晴天 風同断

□6月

1日壬辰 晴天 風子丑之間 四時分小雨降 無間
 も晴 夜曇天 風同断
 2日癸巳 晴天 風亥子之間 夜同断
 3日甲午 晴天 風申酉之間 夜同断
 4日乙未 晴天 風申酉之間 夜同断
 5日丙申 晴天 風申酉之間 夜同断
 6日丁酉 晴天 風酉戌之間 夜同断
 7日戊戌 晴天 風申酉之間 夜同断
 8日己亥 晴天 風未申之間 夜同断
 9日庚子 晴天 風午未之間 夜同断
 10日辛丑 曇天 風卯辰之間 五時分より間々小雨
 降 夜曇天 風同断
 11日壬寅 晴天 風寅辰之間 夜同断
 12日癸卯 曇天 風辰巳之間 夜同断
 13日甲辰 雨天 風午未之間 夜同断
 14日乙巳 雨天 風巳午之間 夜同断
 15日丙午 雨天 風午之方 夜同断
 16日丁未 雨天 風午未之間 夜同断
 17日戊申 雨天 風戌亥之間 夜同断
 18日己酉 雨天 風亥子之間 夜同断
 19日庚戌 曇天 風卯辰之間 夜同断
 20日辛亥 晴天 風卯辰之間 酉時分小雨降 夜曇
 天 風同断
 21日壬子 曇天 風寅之方 夜同断
 22日癸丑 晴天 風卯辰之間 七時分より小雨降
 風立強有之 夜同断
 23日甲寅 雨天 風寅卯之間 風立強有之 夜同断
 24日乙卯 雨天 風未申之間 風立強有之 夜同断
 25日丙辰 雨天 風戌亥之間 夜同断
 26日丁巳 曇天 風戌亥之間 夜同断
 27日戊午 曇天 風戌亥之間 夜同断
 28日己未 晴天 風午未之間 夜同断
 29日庚申 晴天 風午未之間 夜同断

30日辛酉 晴天 風未申之間 夜同断

□7月

1日壬戌 晴天 風未申之間 夜同断
 2日癸亥 晴天 風未申之間 夜同断
 3日甲子 晴天 風未申之間 夜同断
 4日乙丑 晴天 風午未之間 夜同断
 5日丙寅 晴天 風巳午之間 七時分より曇天 夜
 五頭時分より間々小雨降 風寅卯之間
 6日丁卯 雨天 風巳午之間 風同断
 7日戊辰 晴天 風寅卯之間 夜同断
 8日己巳 曇天 風子丑之間 七時分小雨降 無間
 も晴 夜曇天 風同断
 9日庚午 雨天 風辰巳之間 七時分より晴 夜晴
 天 風同断
 10日辛未 晴天 風辰巳之間 夜同断
 11日壬申 曇天 風辰巳之間 夜四頭時分小雨降
 無間も晴 風同断
 12日癸酉 晴天 風辰巳之間 夜同断
 13日甲戌 晴天 風子丑之間 夜同断
 14日乙亥 晴天 風辰巳之間 夜同断
 15日丙子 晴天 風辰巳之間 酉頭時分小雨降 無
 間も晴 夜曇天 風同断
 16日丁丑 曇天 風巳午之間 夜同断
 17日戊寅 晴天 風午未之間 夜同断
 18日己卯 晴天 風午未之間 夜同断
 19日庚辰 晴天 風午未之間 夜同断
 20日辛巳 晴天 風辰巳之間 夜同断
 21日壬午 晴天 風辰巳之間 夜六時分小雨降 無
 間も晴 風同断
 22日癸未 晴天 風辰巳之間 五頭時分小雨降 無
 間も晴 夜晴天 風同断
 23日甲申 晴天 風辰巳之間 夜四頭時分より雨降
 風同断
 24日乙酉 晴天 風辰巳之間 夜同断
 25日丙戌 晴天 風巳午之間 夜七時分より雨降
 風未申之間
 26日丁亥 晴天 風午未之間 夜同断
 27日戊子 晴天 風未申之間 夜七時分より雨降
 風申酉之間
 28日己丑 曇天 風申酉之間 夜同断

29日庚寅 晴天 風戌亥之間 夜同断
 □8月
 1日辛卯 晴天 風亥子之間 夜同断
 2日壬辰 晴天 風巳午之間 夜同断
 3日癸巳 晴天 風巳午之間 夜同断
 4日甲午 晴天 風寅卯之間 夜同断
 5日乙未 晴天 風亥之方 夜曇天 風同断
 6日丙申 晴天 風亥子之間 夜同断
 7日丁酉 晴天 風丑寅之間 夜同断
 8日戊戌 晴天 風丑之方 夜同断
 9日己亥 晴天 風子丑之間 四時分より雨降 七時分より風立強 夜雨天 風同断
 10日庚子 雨天 風丑寅之間 明六時分より大風相成 八時分より風辰巳之間 同時より大風相弱 夜曇天 風巳午之間
 11日辛丑 晴天 風卯辰之間 夜同断
 12日壬寅 晴天 風卯辰之間 夜同断
 13日癸卯 晴天 風卯辰之間 夜同断
 14日甲辰 晴天 風巳午之間 夜同断
 15日乙巳 晴天 風卯辰之間 夜同断
 16日丙午 晴天 風卯辰之間 夜同断
 17日丁未 曇天 風丑之方 五時分より風立強 間々小雨降 夜同断
 18日戊申 曇天 風子之方 間々小雨降 風立強 夜同断
 19日己酉 曇天 風子丑之間 夜同断
 20日庚戌 雨天 風亥之方 九時分より晴 夜同断
 21日辛亥 晴天 風子丑之間 夜同断
 22日壬子 晴天 風子丑之間 夜同断
 23日癸丑 晴天 風子丑之間 夜同断
 24日甲寅 雨天 風寅卯之間 夜同断
 25日乙卯 晴天 風子丑之間 夜同断
 26日丙辰 曇天 五時分より小雨降 風卯之方 夜同断
 27日丁巳 晴天 風巳午之間 夜同断
 28日戊午 晴天 風巳午之間 夜同断
 29日己未 曇天 風子丑之間 間々小雨降 夜同断
 30日庚申 晴天 風子丑之間 夜同断
 □9月
 1日辛酉 晴天 風子丑之間 夜同断

2日壬戌 晴天 風卯辰之間 夜同断
 3日癸亥 晴天 風未申之間 夜同断
 4日甲子 晴天 風未申之間 酉時分より風子丑之間 夜同断
 5日乙丑 晴天 風卯辰之間 七時分より曇天 風同断
 6日丙寅 雨天 風卯辰之間 酉時分より晴 夜曇天 風同断
 7日丁卯 晴天 風午未之間 夜同断
 8日戊辰 曇天 風申之方 夜五時分小雨降 風同断
 9日己巳 曇天 風丑寅之間 九頭時分より雨降 夜曇天 風同断
 10日庚午 曇天 風丑寅之間 八時分小雨降 無間も晴 夜曇天 風亥子之間
 11日辛未 晴天 風亥子之間 酉頭時分より小雨降 夜曇天 風同断
 12日壬申 晴天 風丑寅之間 七時分小雨降 夜晴天 風同断
 13日癸酉 晴天 風子丑之間 夜同断
 14日甲戌 晴天 風子丑之間 夜同断
 15日乙亥 晴天 風戌亥之間 夜同断
 16日丙子 晴天 風戌亥之間 夜同断
 17日丁丑 晴天 風子之方 夜同断
 18日戊寅 晴天 風丑寅之間 夜同断
 19日己卯 晴天 風亥子之間 夜同断
 20日庚辰 晴天 風寅卯之間 夜同断
 21日辛巳 晴天 風丑寅之間 夜同断
 22日壬午 曇天 風丑寅之間 七時分小雨降 夜同断
 23日癸未 雨天 風丑寅之間 夜同断
 24日甲申 雨天 風寅卯之間 夜同断
 25日乙酉 曇天 風丑寅之間 間々小雨降 夜同断
 26日丙戌 晴天 風申酉之間 夜同断
 27日丁亥 晴天 風子丑之間 夜同断
 28日戊子 晴天 風子丑之間 夜同断
 29日己丑 晴天 風卯辰之間 夜同断
 30日庚寅 雨天 風卯辰之間 八時分より晴 夜間々小雨降 風同断

□10月

1日辛卯 曇天 風卯辰之間 夜七頭時分より雨天
風同断
 2日壬辰 曇天 風巳午之間 八時分より晴天 夜
晴天 風同断
 3日癸巳 晴天 風寅卯之間 夜同断
 4日甲午 晴天 風卯辰之間 夜雨天 風丑寅之間
 5日乙未 雨天 風丑寅之間 夜曇天 風卯辰之間
 6日丙申 晴天 風寅卯之間 夜同断
 7日丁酉 晴天 風卯辰之間 夜同断
 8日戊戌 晴天 風午未之間 夜同断
 9日己亥 晴天 風寅卯之間 八時分より間々小雨
降 夜晴天 風同断
 10日庚子 雨天 風戌亥之間 夜雨天 風同断
 11日辛丑 晴天 風巳午之間 夜同断
 12日壬寅 晴天 風午未之間 酉時分より雨降 夜
雨天 風同断
 13日癸卯 晴天 風午未之間 七時分より雨降 夜
雨天 風同断
 14日甲辰 雨天 風亥子之間 七時分より晴 夜晴
天 風同断
 15日乙巳 晴天 風子丑之間 夜同断
 16日丙午 晴天 風寅卯之間 夜同断
 17日丁未 晴天 風丑寅之間 夜同断
 18日戊申 晴天 風亥子之間 夜同断
 19日己酉 晴天 風亥子之間 夜同断
 20日庚戌 晴天 風亥子之間 夜同断
 21日辛亥 晴天 風戌亥之間 夜同断
 22日壬子 曇天 風亥子之間 夜八時分より小雨降
風同断
 23日癸丑 曇天 風午未之間 七時分より間々小雨
降 夜曇天 風同断
 24日甲寅 雨天 風亥子之間 夜同断
 25日乙卯 晴天 風酉戌之間 夜同断
 26日丙辰 晴天 風戌亥之間 夜同断
 27日丁巳 晴天 風申酉之間 七頭時分より曇天
夜七時分より小雨降 風寅卯之間
 28日戊午 雨天 風辰巳之間 八時分より子丑之間
夜雨天 風同断
 29日己未 雨天 風寅卯之間 九時分より巳午之間

夜雨天 風同断

□11月

1日庚申 曇天 風未申之間 九頭時分より雨降
風戌亥之間 八時分より晴天 夜同断
 2日辛酉 晴天 風未申之間 夜同断
 3日壬戌 晴天 風戌亥之間 夜同断
 4日癸亥 晴天 風子丑之間 夜同断
 5日甲子 晴天 風子丑之間 夜同断
 6日乙丑 曇天 風子丑之間 朝小雨降 夜五時分
より九時分迄間々小雨降 風同断
 7日丙寅 曇天 風亥子之間 九時分より晴天 夜
同断
 8日丁卯 晴天 風戌亥之間 夜同断
 9日戊辰 晴天 風戌亥之間 夜同断
 10日己巳 晴天 風戌亥之間 夜同断
 11日庚午 晴天 風戌亥之間 夜同断
 12日辛未 晴天 風戌亥之間 夜同断
 13日壬申 晴天 風戌亥之間 夜子丑之間
 14日癸酉 晴天 風子丑之間 夜同断
 15日甲戌 晴天 風酉戌之間 八時分より曇天 夜
風同断
 16日乙亥 晴天 風酉戌之間 七時分より小雨降
夜曇天 風同断
 17日丙子 曇天 風申酉之間 酉頭時分より小雨降
夜曇天 風同断
 18日丁丑 曇天 風子丑之間 夜同断
 19日戊寅 曇天 風子丑之間 夜同断
 20日己卯 晴天 風午未之間 夜五過時分より雨天
風亥子之間
 21日庚辰 曇天 風亥子之間 夜同断
 22日辛巳 曇天 風子丑之間 間々小雨降 夜曇天
風同断
 23日壬午 曇天 風子丑之間 間々小雨降 夜曇天
風同断
 24日癸未 晴天 風子丑之間 夜同断
 25日甲申 曇天 風子丑之間 夜同断
 26日乙酉 曇天 風子丑之間 夜同断
 27日丙戌 晴天 風子丑之間 夜同断
 28日丁亥 晴天 風子丑之間 夜同断
 29日戊子 晴天 風子丑之間 夜同断

30日己丑 晴天 風子丑之間 夜七時分より雨降
風同断

□12月

1日庚寅 雨天 風子丑之間 夜同断
2日辛卯 曇天 風子丑之間 間々小雨降 夜同断
3日壬辰 曇天 風子丑之間 五頭時分より四時分
迄雨降 夜晴天 風同断
4日癸巳 晴天 風子丑之間 夜同断
5日甲午 晴天 風丑寅之間 夜同断
6日乙未 曇天 風申酉之間 夜九時分より雨天
風同断
7日丙申 雨天 風戌亥之間 四時分より晴天 夜
同断
8日丁酉 晴天 風亥子之間 夜同断
9日戊戌 曇天 風子丑之間 夜同断
10日己亥 晴天 風子丑之間 夜同断
11日庚子 晴天 風亥子之間 夜同断
12日辛丑 晴天 風巳午之間 夜同断
13日壬寅 晴天 風辰巳之間 夜八時分より雨降
風亥子之間
14日癸卯 曇天 風亥子之間 夜同断
15日甲辰 曇天 風亥子之間 夜同断
16日乙巳 曇天 風亥子之間 夜同断
17日丙午 曇天 風亥子之間 夜同断
18日丁未 晴天 風子丑之間 七時分より辰巳之間
夜同断
19日戊申 曇天 風戌亥之間 夜同断
20日己酉 晴天 風亥子之間 夜同断
21日庚戌 晴天 風戌亥之間 夜同断
22日辛亥 晴天 風戌亥之間 夜五頭時分より雨降
八時分より晴天 風同断
23日壬子 曇天 風子丑之間 間々小雨降 夜同断
24日癸丑 雨天 風子丑之間 夜同断
25日甲寅 曇天 風子丑之間 夜同断
26日乙卯 曇天 風亥子之間 夜七時分より小雨降
風同断
27日丙辰 曇天 風亥子之間 夜同断
28日丁巳 曇天 風亥子之間 夜同断
29日戊午 晴天 風亥子之間 夜同断

〔咸豊6年〕

□1月

1日己未 曇天 風午未之間 八頭時分より雨降
夜曇天 風同断
2日庚申 晴天 風午未之間 夜同断
3日辛酉 晴天 風午未之間 夜同断
4日壬戌 晴天 風亥子之間 夜同断
5日癸亥 晴天 風亥子之間 夜八時分より雨降
風同断
6日甲子 雨天 風亥子之間 夜同断
7日乙丑 雨天 風未申之間 夜同断
8日丙寅 雨天 風丑寅之間 夜同断
9日丁卯 曇天 風午未之間 夜同断
10日戊辰 曇天 風未申之間 八時分より間々小雨
降 夜曇天 風同断
11日己巳 曇天 風亥子之間 夜同断
12日庚午 曇天 風亥子之間 夜同断
13日辛未 晴天 風子丑之間 夜同断
14日壬申 晴天 風辰巳之間 夜同断
15日癸酉 晴天 風辰巳之間 七時分より間々小雨
降 夜曇天 八時分より風丑寅之間
16日甲戌 雨天 風丑寅之間 四時分より晴天 夜
晴天 風同断
17日乙亥 晴天 風亥子之間 夜同断
18日丙子 晴天 風丑寅之間 夜同断
19日丁丑 晴天 風辰巳之間 夜同断
20日戊寅 曇天 風辰巳之間 四時分より雨天 夜
雨天 風同断
21日己卯 晴天 風丑寅之間 八過時分より小雨降
風寅卯之間 夜曇天 風同断
22日庚辰 雨天 風丑寅之間 夜同断
23日辛巳 曇天 間々小雨降 風丑寅之間 夜曇天
風同断
24日壬午 曇天 間々小雨降 風亥子之間 夜曇天
風同断
25日癸未 曇天 間々小雨降 風亥子之間 夜曇天
風同断
26日甲申 晴天 風亥子之間 夜同断
27日乙酉 晴天 風辰巳之間 夜同断
28日丙戌 晴天 風子丑之間 八時分より間々小雨

降 夜曇天 風同断

29日丁亥 晴天 風巳午之間 夜同断

30日戊子 晴天 風巳午之間 夜同断

□2月

1日己丑 雨天 風午未之間 夜曇天 風同断

2日庚寅 曇天 風亥子之間 八頭時分より晴天
夜右同 風同断

3日辛卯 晴天 風亥子之間 夜同断

4日壬辰 曇天 風子丑之間 間々小雨降 夜曇天
風同断

5日癸巳 曇天 風子丑之間 夜曇天 風同断

6日甲午 晴天 風卯辰之間 夜同断

7日乙未 晴天 風丑寅之間 夜同断

8日丙申 曇天 風丑寅之間 夜曇天 風同断

9日丁酉 晴天 風丑寅之間 夜同断

10日戊戌 晴天 風丑寅之間 夜同断

11日己亥 晴天 風申酉之間 夜同断

12日庚子 晴天 風酉戌之間 夜同断

13日辛丑 晴天 風未申之間 夜同断

14日壬寅 晴天 風未申之間 夜同断

15日癸卯 晴天 風巳午之間 夜同断

16日甲辰 曇天 風巳午之間 夜曇天 風同断

17日乙巳 曇天 風未申之間 夜曇天 風同断

18日丙午 曇天 風子丑之間 夜曇天 風同断

19日丁未 曇天 風子丑之間 夜曇天 風同断

20日戊申 曇天 風巳午之間 七頭時分より小雨降
夜四時分より晴 曇天 風同断

21日己酉 曇天 風辰巳之間 夜鼓青時分より間々
小雨降 風同断

22日庚戌 曇天 風巳午之間 夜五時分より間々小
雨降 風同断

23日辛亥 曇天 風亥子之間 九時分より間々小雨
降 夜曇天 風同断

24日壬子 晴天 風子丑之間 夜同断

25日癸丑 曇天 風亥子之間 五時分より間々小雨
降 夜曇天 風同断

26日甲寅 晴天 風亥子之間 夜同断

27日乙卯 晴天 風巳午之間 夜同断

28日丙辰 雨天 風巳午之間 夜曇天 風同断

29日丁巳 曇天 風辰巳之間 五頭時分より雨降

夜曇天 風同断

□3月

1日戊午 曇天 風亥子之間 夜晴天 風同断

2日己未 晴天 風亥子之間 夜同断

3日庚申 晴天 風巳午之間 夜九時分より雨降
風同断

4日辛酉 曇天 間々小雨降 風亥子之間 夜雨天
風同断

5日壬戌 曇天 風未申之間 八時分より晴天 夜
晴天 風同断

6日癸亥 晴天 風亥子之間 夜同断

7日甲子 晴天 風子丑之間 八時分より間々小雨
降 夜晴天 風同断

8日乙丑 晴天 風午未之間 夜同断

9日丙寅 晴天 風午未之間 夜同断

10日丁卯 晴天 風午未之間 夜同断

11日戊辰 晴天 風申酉之間 夜同断

12日己巳 晴天 風丑寅之間 夜同断

13日庚午 晴天 風巳午之間 夜同断

14日辛未 晴天 風午未之間 酉頭時分より間々小
雨降 風子丑之間 夜曇天 風同断

15日壬申 晴天 風午未之間 夜同断

16日癸酉 曇天 風酉戌之間 夜間々小雨降 風同
断

17日甲戌 曇天 間々小雨降 風亥子之間 夜晴天
風同断

18日乙亥 晴天 風酉戌之間 夜同断

19日丙子 晴天 風卯辰之間 夜同断

20日丁丑 晴天 風巳午之間 夜同断

21日戊寅 晴天 風午未之間 夜同断

22日己卯 曇天 間々小雨降 風戌亥之間 夜晴天
風同断

23日庚辰 晴天 風戌亥之間 夜同断

24日辛巳 晴天 風辰巳之間 夜同断

25日壬午 晴天 風辰巳之間 夜八時分より間々小
雨降 風同断

26日癸未 曇天 間々小雨降 風辰巳之間 夜曇天
風同断

27日甲申 曇天 風巳午之間 四頭時分より晴天
夜晴天 風同断

28日乙酉 晴天 風巳午之間 夜四時分より間々小雨降 風同断
 29日丙戌 曇天 風亥子之間 夜間々小雨降 風同断

□4月

1日丁亥 晴天 風亥子之間 夜同断
 2日戊子 曇天 風卯辰之間 間々小雨降 夜曇天 風同断
 3日己丑 晴天 風亥子之間 夜同断
 4日庚寅 晴天 風卯辰之間 夜同断
 5日辛卯 晴天 風卯辰之間 夜同断
 6日壬辰 晴天 風申酉之間 夜同断
 7日癸巳 晴天 風申酉之間 夜同断
 8日甲午 晴天 風未申之間 酉頭時分より雨降 夜曇天 風同断
 9日乙未 曇天 風子丑之間 夜曇天 風同断
 10日丙申 晴天 風丑寅之間 夜同断
 11日丁酉 晴天 風丑寅之間 夜同断
 12日戊戌 晴天 風寅卯之間 夜同断
 13日己亥 晴天 風寅卯之間 夜曇天 間々小雨降 風同断
 14日庚子 曇天 風卯辰之間 間々小雨降 夜曇天 風同断
 15日辛丑 曇天 風午未之間 間々小雨降 夜曇天 風同断
 16日壬寅 晴天 風亥子之間 夜同断
 17日癸卯 晴天 風子丑之間 七頭時分より間々小雨降 夜曇天 風同断
 18日甲辰 晴天 風卯辰之間 夜同断
 19日乙巳 晴天 風巳午之間 夜同断
 20日丙午 曇天 風午未之間 夜晴天 風同断
 21日丁未 晴天 風巳午之間 夜同断
 22日戊申 晴天 風子丑之間 夜同断
 23日己酉 晴天 風午未之間 夜同断
 24日庚戌 晴天 風巳午之間 夜同断
 25日辛亥 晴天 風午未之間 夜同断
 26日壬子 晴天 風未申之間 夜四時分より間々小雨降 風同断
 27日癸丑 雨天 風戌亥之間 八時分より晴天 夜晴天 風同断

28日甲寅 晴天 風酉戌之間 夜同断
 29日乙卯 晴天 風申酉之間 夜九時分より雨天 風同断

30日丙辰 雨天 風申酉之間 夜同断

□5月

1日丁巳 晴天 風未申之間 四時分より曇天 八頭時分より雨天 夜曇天 風同断
 2日戊午 曇天 風未申之間 五時分より晴天 夜曇天 風同断
 3日己未 曇天 風未申之間 九頭時分より間々小雨降 風亥子之間 夜曇天 風同断
 4日庚申 曇天 風戌亥之間 九時分より晴天 夜晴天 風同断
 5日辛酉 晴天 風戌亥之間 夜五時分より雨降 八時分より晴 風同断
 6日壬戌 曇天 風巳午之間 四頭時分より間々小雨降 夜曇天 風同断
 7日癸亥 曇天 風巳午之間 夜曇天 間々小雨降 風同断
 8日甲子 曇天 風巳午之間 九時分より雨降 夜雨天 風同断
 9日乙丑 曇天 風午未之間 八時分より晴天 夜晴天 風同断
 10日丙寅 雨天 風申酉之間 九時分より曇天 間々小雨降 夜曇天 風同断
 11日丁卯 曇天 風申酉之間 夜晴天 風同断
 12日戊辰 晴天 風未申之間 八時分より間々小雨降 夜曇天 風同断
 13日己巳 曇天 風辰巳之間 九時分より晴天 夜曇天 間々小雨降 風同断
 14日庚午 曇天 風辰巳之間 夜晴天 風同断
 15日辛未 雨天 風巳午之間 夜雨天 風同断
 16日壬申 曇天 風午未之間 四時分より雨天 八時分より晴 夜八時分より雨天 風同断
 17日癸酉 晴天 風未之間 夜同断
 18日甲戌 晴天 風午未之間 夜同断
 19日乙亥 晴天 風午未之間 夜四時分より雨天 風同断
 20日丙子 曇天 間々小雨降 風午未之間 夜曇天 風同断

21日丁丑 曇天 風未申之間 夜曇天 風同断
 22日戌寅 雨天 風午未之間 八時分より晴 夜晴天 風同断
 23日己卯 晴天 風巳午之間 夜同断
 24日庚辰 雨天 風辰巳之間 夜雨天 風同断
 25日辛巳 雨天 風巳午之間 夜雨天 風同断
 26日壬午 晴天 風辰巳之間 夜同断
 27日癸未 雨天 風辰巳之間 四時分より晴 夜雨天 風同断
 28日甲申 晴天 風寅卯之間 酉時分より雨降 夜曇天 風同断
 29日乙酉 曇天 間々小雨降 風辰巳之間 夜曇天 風同断

□6月

1日丙戌 曇天 風巳午之間 間々小雨降 夜曇天 風同断
 2日丁亥 曇天 風午未之間 九時分より晴天 夜同断
 3日戊子 晴天 風午未之間 夜同断
 4日己丑 曇天 風午未之間 九頭時分より雨天 夜雨天 風同断
 5日庚寅 曇天 風巳午之間 夜八時分より雨天 風同断
 6日辛卯 曇天 風巳午之間 間々小雨降 夜曇天 風同断
 7日壬辰 晴天 風巳午之間 八頭時分より間々小雨降 夜晴天 風同断
 8日癸巳 晴天 風巳午之間 夜同断
 9日甲午 曇天 風巳午之間 四時分より晴天 夜晴天 風同断
 10日乙未 晴天 風巳午之間 八時分より辰巳之間 夜同断
 11日丙申 晴天 風巳午之間 夜同断
 12日丁酉 晴天 風午未之間 夜同断
 13日戊戌 晴天 風午未之間 夜同断
 14日己亥 晴天 風巳午之間 夜同断
 15日庚子 晴天 風午未之間 夜晴天 風卯辰之間
 16日辛丑 晴天 風卯辰之間 夜同断
 17日壬寅 晴天 風卯辰之間 夜同断
 18日癸卯 晴天 風寅卯之間 夜晴天 風午未之間

19日甲辰 晴天 風午未之間 夜同断
 20日乙巳 晴天 風午未之間 夜同断
 21日丙午 晴天 風未申之間 夜同断
 22日丁未 晴天 風申酉之間 酉頭時分より雨天 夜曇天 風巳午之間
 23日戊申 晴天 風申酉之間 八時分より雨天 夜曇天 風同断
 24日己酉 晴天 風卯辰之間 八頭時分より間々小雨降 夜曇天 風同断
 25日庚戌 晴天 風卯辰之間 夜同断
 26日辛亥 曇天 風巳午之間 夜曇天 風同断
 27日壬子 曇天 風卯辰之間 四時分より間々小雨降 夜曇天 風同断
 28日癸丑 晴天 風卯辰之間 夜同断
 29日甲寅 晴天 風寅卯之間 七時分より雨天 風丑寅之間 夜曇天 風同断
 30日乙卯 曇天 風子丑之間 四時分より雨天 夜雨天 風同断

□7月

1日丙辰 雨天 風戌亥之間 夜間々雨降 風同断
 2日丁巳 雨天 風戌亥之間 八頭時分より子丑之間 夜雨天 六頭時分より晴 風同断
 3日戊午 晴天 風亥子之間 夜同断
 4日己未 晴天 風亥子之間 夜同断
 5日庚申 晴天 風戌亥之間 夜同断
 6日辛酉 晴天 風未申之間 夜同断
 7日壬戌 晴天 風巳午之間 夜同断
 8日癸亥 曇天 風巳午之間 夜間々小雨降 風同断
 9日甲子 晴天 風寅卯之間 夜同断
 10日乙丑 雨天 風亥子之間 夜雨天 風同断
 11日丙寅 風雨荒立 風丑寅之間 八頭時分より相止 風辰巳之間 夜間々雨降 風同断
 12日丁卯 雨天 風巳午之間 夜間々雨降 風同断
 13日戊辰 晴天 風巳午之間 夜同断
 14日己巳 曇天 風午未之間 四過時分より晴天 夜曇天 間々雨降 風同断
 15日庚午 曇天 風巳午之間 夜晴天 風同断
 16日辛未 曇天 風午未之間 四時分より間々小雨降 夜曇天 風同断

17日壬申 曇天 風午未之間 八時分より間々雨降
 夜曇天 風同断
 18日癸酉 晴天 風申酉之間 夜同断
 19日甲戌 晴天 風巳午之間 夜九時分より雨降
 八時分より晴 風同断
 20日乙亥 雨天 風巳午之間 七時分より子丑之間
 夜晴天 風同断
 21日丙子 晴天 風酉戌之間 夜同断
 22日丁丑 曇天 間々小雨降 風戌亥之間 九時分
 より晴 夜晴天 風同断
 23日戊寅 晴天 風巳午之間 夜同断
 24日己卯 曇天 風午未之間 九時分より晴天 夜
 晴天 風同断
 25日庚辰 晴天 風子丑之間 夜同断
 26日辛巳 晴天 風辰巳之間 九時分より間々小雨
 降 八時分より晴 夜晴天 風同断
 27日壬午 晴天 風卯辰之間 夜同断
 28日癸未 晴天 風卯辰之間 夜同断
 29日甲申 晴天 風卯辰之間 夜同断
 □8月
 1日乙酉 晴天 風辰巳之間 夜同断
 2日丙戌 晴天 風寅卯之間 夜曇天 七時分より
 雨降 風同断
 3日丁亥 曇天 風亥子之間 八時分より雨天 夜
 雨天 風同断
 4日戊子 曇天 風戌亥之間 五時分より間々小雨
 降 夜曇天 風同断
 5日己丑 曇天 風辰巳之間 夜雨天 風同断
 6日庚寅 曇天 風巳午之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断
 7日辛卯 晴天 風巳午之間 夜同断
 8日壬辰 晴天 風巳午之間 夜同断
 9日癸巳 晴天 風巳午之間 夜同断
 10日甲午 晴天 風午未之間 夜同断
 11日乙未 晴天 風午未之間 夜同断
 12日丙申 晴天 風午未之間 夜同断
 13日丁酉 晴天 風午未之間 夜同断
 14日戊戌 晴天 風申酉之間 夜同断
 15日己亥 晴天 風申酉之間 夜同断
 16日庚子 晴天 風午未之間 夜同断

17日辛丑 晴天 風未申之間 夜同断
 18日壬寅 曇天 風未申之間 夜曇天 風同断
 19日癸卯 晴天 風申酉之間 夜同断
 20日甲辰 晴天 風申酉之間 九時分より間々小雨
 降 夜曇天 風同断
 21日乙巳 晴天 風子丑之間 夜同断
 22日丙午 晴天 風丑寅之間 夜同断
 23日丁未 晴天 風亥子之間 夜七時分より雨天
 風同断
 24日戊申 晴天 風亥子之間 七時分より間々小雨
 降 夜曇天 風同断
 25日己酉 晴天 風申酉之間 夜同断
 26日庚戌 晴天 風申酉之間 夜同断
 27日辛亥 晴天 風申酉之間 夜同断
 28日壬子 晴天 風申酉之間 夜同断
 29日癸丑 晴天 風丑寅之間 夜同断
 30日甲寅 晴天 風辰巳之間 夜同断
 □9月
 1日乙卯 晴天 風午未之間 夜同断
 2日丙辰 晴天 風寅卯之間 夜同断
 3日丁巳 曇天 風巳午之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断
 4日戊午 晴天 風寅卯之間 夜九時分より雨降
 風同断
 5日己未 曇天 風巳午之間 九時分雨降 無間も
 晴 夜四時分より間々小雨降 風同断
 6日庚申 雨天 風辰巳之間 四時分より晴 夜晴
 天 風同断
 7日辛酉 晴天 風卯辰之間 夜同断
 8日壬戌 晴天 風辰巳之間 夜同断
 9日癸亥 晴天 風丑寅之間 四時分より曇天 七
 時分より雨降 夜曇天 風同断
 10日甲子 晴天 風丑寅之間 夜九時分より雨降
 六時分より晴 風同断
 11日乙丑 曇天 風子丑之間 九時分より雨降 夜
 雨天 風同断
 12日丙寅 雨天 風辰巳之間 夜雨天 風同断
 13日丁卯 晴天 風巳午之間 夜同断
 14日戊辰 晴天 風巳午之間 夜同断
 15日己巳 曇天 風戌亥之間 間々小雨降 夜晴天

風同断
 16日庚午 晴天 風亥子之間 夜同断
 17日辛未 晴天 風酉戌之間 夜同断
 18日壬申 晴天 風寅卯之間 酉時分より間々小雨
 降 夜曇天 風同断
 19日癸酉 晴天 風午未之間 夜同断
 20日甲戌 晴天 風辰巳之間 夜同断
 21日乙亥 晴天 風辰巳之間 夜同断
 22日丙子 晴天 風午未之間 夜同断
 23日丁丑 曇天 風子丑之間 夜同断
 24日戊寅 晴天 風酉戌之間 夜同断
 25日己卯 晴天 風辰巳之間 夜同断
 26日庚辰 曇天 風子丑之間 間々小雨降 八時分
 より晴 夜曇天風 風同断
 27日辛巳 曇天 風丑寅之間 八頭時分より小雨降
 七時分より晴 夜晴天 風同断
 28日壬午 晴天 風丑寅之間 夜同断
 29日癸未 曇天 風丑寅之間 夜同断
 30日甲申 晴天 風丑寅之間 八時分雨降 無間も
 晴 夜晴天 風同断

□10月

1日乙酉 晴天 風丑寅之間 夜同断
 2日丙戌 晴天 風丑寅之間 夜同断
 3日丁亥 晴天 風午未之間 九時分より雨降 七
 時分より晴 夜晴天 風子丑之間
 4日戊子 晴天 風申酉之間 夜六頭時分より雨降
 風同断
 5日己丑 雨天 風卯辰之間 夜曇天 風子丑之間
 6日庚寅 曇天 風亥子之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断
 7日辛卯 晴天 風子丑之間 夜同断
 8日壬辰 晴天 風寅卯之間 夜同断
 9日癸巳 晴天 風辰巳之間 七時分より間々小雨
 降 夜雨天 風同断
 10日甲午 曇天 風戌亥之間 夜間々小雨降 風同
 断
 11日乙未 曇天 風亥子之間 七時分より間々小雨
 降 夜曇天 風同断
 12日丙申 曇天 風亥子之間 夜晴天 風同断
 13日丁酉 晴天 風子丑之間 夜同断

14日戊戌 晴天 風子丑之間 夜同断
 15日己亥 晴天 風子丑之間 夜同断
 16日庚子 晴天 風丑寅之間 夜同断
 17日辛丑 晴天 風丑寅之間 夜同断
 18日壬寅 晴天 風子丑之間 夜同断
 19日癸卯 晴天 風寅卯之間 夜同断
 20日甲辰 晴天 風子丑之間 夜同断
 21日乙巳 曇天 風子丑之間 夜晴天 風同断
 22日丙午 晴天 風子丑之間 夜同断
 23日丁未 晴天 風子丑之間 夜同断
 24日戊申 晴天 風子丑之間 夜同断
 25日己酉 晴天 風子丑之間 夜同断
 26日庚戌 晴天 風戌亥之間 夜同断
 27日辛亥 曇天 風亥子之間 七時分より間々小雨
 降 夜雨天 風同断
 28日壬子 曇天 風丑寅之間 間々小雨降 七時分
 より晴 夜晴天 風同断

29日癸丑 晴天 風丑寅之間 夜同断
 30日甲寅 晴天 風申酉之間 夜同断

□11月

1日乙卯 晴天 風子丑之間 夜同断
 2日丙辰 晴天 風子丑之間 夜同断
 3日丁巳 晴天 風丑寅之間 夜同断
 4日戊午 晴天 風亥子之間 夜同断
 5日己未 曇天 風亥子之間 夜曇天 風同断
 6日庚申 曇天 風子丑之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断 六時分より小雨降
 7日辛酉 曇天 風亥子之間 間々小雨降 夜曇天
 風同断
 8日壬戌 晴天 風亥子之間 夜同断
 9日癸亥 晴天 風亥子之間 夜同断
 10日甲子 晴天 風子丑之間 夜同断
 11日乙丑 晴天 風子丑之間 夜同断
 12日丙寅 晴天 風子丑之間 夜同断
 13日丁卯 晴天 風丑寅之間 夜同断
 14日戊辰 晴天 風子丑之間 夜同断
 15日己巳 晴天 風卯辰之間 夜同断
 16日庚午 晴天 風卯辰之間 夜同断
 17日辛未 晴天 風卯辰之間 夜同断
 18日壬申 晴天 風卯辰之間 夜同断

19日癸酉 晴天 風申酉之間 夜同断
 20日甲戌 晴天 風子丑之間 夜同断
 21日乙亥 晴天 風子丑之間 夜同断
 22日丙子 曇天 風酉戌之間 八時分より間々小雨
 降 七時分より風亥子之間 夜間々小雨
 降 風同断
 23日丁丑 曇天 風亥子之間 夜同断
 24日戊寅 晴天 風丑寅之間 夜同断
 25日己卯 晴天 風寅卯之間 夜同断
 26日庚辰 晴天 風寅卯之間 夜同断
 27日辛巳 曇天 風子丑之間 夜同断
 28日壬午 晴天 風亥子之間 夜同断
 29日癸未 晴天 風子丑之間 夜同断

□12月

1日甲申 晴天 風戌亥之間 夜同断
 2日乙酉 晴天 風亥子之間 夜同断
 3日丙戌 晴天 風卯辰之間 夜同断
 4日丁亥 晴天 風巳午之間 夜同断
 5日戊子 晴天 風酉戌之間 夜同断
 6日己丑 晴天 風戌亥之間 夜同断
 7日庚寅 晴天 風戌亥之間 夜同断
 8日辛卯 曇天 風亥子之間 夜同断
 9日壬辰 晴天 風亥子之間 夜同断
 10日癸巳 晴天 風卯辰之間 夜同断

11日甲午 晴天 風子丑之間 夜同断
 12日乙未 晴天 風戌亥之間 夜同断
 13日丙申 晴天 風丑寅之間 夜同断
 14日丁酉 晴天 風子丑之間 夜同断
 15日戊戌 晴天 風丑寅之間 夜同断
 16日己亥 晴天 風丑寅之間 夜同断
 17日庚子 晴天 風丑寅之間 夜曇天 五頭時分よ
 り間々小雨降 風同断
 18日辛丑 曇天 風亥子之間 夜同断
 19日壬寅 曇天 風亥子之間 夜同断
 20日癸卯 晴天 風亥子之間 夜同断
 21日甲辰 晴天 風亥子之間 夜同断
 22日乙巳 曇天 風未申之間 七頭時分より雨天
 風亥子之間 夜同断
 23日丙午 晴天 風亥子之間 夜同断
 24日丁未 晴天 風巳午之間 夜同断
 25日戊申 曇天 風亥子之間 四時分より九時分迄
 雨降 夜曇天 風同断
 26日己酉 晴天 風子丑之間 夜同断
 27日庚戌 曇天 風亥子之間 夜同断
 28日辛亥 晴天 風亥子之間 夜同断
 29日壬子 晴天 風亥子之間 夜同断
 30日癸丑 曇天 風亥子之間 夜同断

伊波普猷と新おもろ学派

— ナショナリズムと郷土＝沖縄研究 —

末 次 智

1. はじめに

昭和20（1945）年、沖縄戦の終結、そして、第二次大戦の終結を迎える。その2年後の盛夏、沖縄学の父・伊波普猷は、この世を去る。明治9（1876）年に那覇に生まれてから、まさに近代とともに生きたといえる。

周知のように、外圧によって日本近代化への扉は開かれた。西欧の近代を接ぎ木した日本の近代化は、元祖とは異なる道をたどりながら、一方ではナショナリズムを共有する。とくに異なるのは、天皇という存在を核に日本が近代化への道を歩んだという点だ。伊波の歩いた道は、日本の特殊なナショナリズムが成熟していく道だった。だから、自らもそう呼んだ、伊波の「沖縄学」も、近代という時代を、つまりナショナリズムを背景とすることは自明なのだ。

伊波のいわゆる「日琉同祖論」が、沖縄の皇民化教育の根拠となったとする指摘はすでになされている⁽¹⁾。また、伊波がソテツ地獄と呼ばれる、第一次大戦後の全国的な恐慌（大正9年、1920、以降）がもたらした沖縄の窮状以後、琉球処分を一種の奴隷解放だとするそれまでの認識を捨て⁽²⁾、郷土沖縄の文化に立脚する視点から、近代日本の性急なナショナリズムを批判していたことも指摘されている⁽³⁾。

だが一方で、日本の近代化において、明治末から昭和の初期にかけては、郷土の文化が見直された時期でもあった。それは、柳田國男が創始した日本民俗学の例を引くまでもなく、周知のことだ。ナショナリズムは郷土の文化を根こそぎ批判するだけの単純なものでは、けっしてない。たとえば、橋川文三

はナショナリズム一般を論じながら、次のように言っている。

いわゆる郷土教育の必要が説かれるのは、ナショナリズムの画一主義が空洞化をもたらし、その人間論的基礎の再確認が必要とされる時期においてであるが、この場合には、パトリオティズムは、ナショナリズムの社会的機能障害に対する有力な補完作用として利用されている。⁽⁴⁾

ここでいうパトリオティズムとは郷土愛であり、「歴史の時代をとわず、すべての人種・民族に認められる普遍的な感情であって、ナショナリズムのように、一定の歴史的段階においてはじめて登場した新しい理念ではない」⁽⁵⁾。パトリオティズム（郷土愛）とナショナリズム（国民主義）を区別することは、伊波などの沖縄学を論じるときにとりあえず有効であるだろう。たとえば、伊波はパトリオティズムに立脚している、というように。だが、パトリオティズムもナショナリズムを補完しうるのだ。さらに、両者は本質的に異なるものなのだろうか、あるいは同根ではないのか。橋川が自己の書の冒頭に引く、F・シューマンの言葉を借りれば、ナショナリズムとは一つの「神秘」なのである⁽⁶⁾。本稿は、むしろこれを明らかにしようとするものではない。

とりあえずここで確認しておきたいのは、伊波が生きた近代という時代が、まさにナショナリズムを体現した時代であったことだ。あるいは、伊波は郷土沖縄からナショナリズムにいて考えつづけたと言えるかも知れない。

2. 郷土再発見の時代

いわゆる「南島の発見」では、柳田國男や折口信夫の沖縄訪問が契機となったことはよく知られている⁽⁷⁾。だが、郷土の再発見は、ナショナリズムによってまずもたらされ、橋川の言葉にあるように、「郷土教育」として現れたのだ。

日本の教育制度に「郷土」の語がはじめて明記されたのは、明治19（1886）年の「小学校ノ学科及其程度」の「地理」についての記述のなかだった。そして、明治33（1900）年の「小学校令」では「郷土」の語が消え、同年の文部省の告示211号により、郷土教育は地方に委ねられることになるという⁽⁸⁾。

沖縄における郷土研究の在り方を詳細に位置づけた新城安善は、「国家主義思想にもとづく教育理念」が日本で強調されるようになる一つの契機について、次のように述べる。

このような理念を踏み台とする「郷土」の存在価値が改めて重要視されるようになったのは、1900年（明治33年）の「小学校令」の改正を契機にしてのことである。その一つの例証は、国定教科書の採用を原則とする郷土認識への直感主義的教育内容が重視されたことである。⁽⁹⁾

沖縄において、郷土教育に大きな機能を果たした団体は、明治19（1886）年に設立された沖縄私立教育会で、最初は子女教育の啓蒙などを中心に活動を行なうが、その後組織の改編を行ないながら⁽¹⁰⁾、上記のような明治政府の方針を受けて、郷土教育の活動を行なうようになる。伊波普猷も、会からの要請により、明治39（1906）年に入会している⁽¹¹⁾。郷土研究は、このような郷土教育を前提として、つまり教材研究としてまず行なわれる。

こうして出発した地域の郷土教育熱、郷土研究熱がふたたび高まるのは、大正9（1920）年に続き、昭和2（1927）年にも起きた経済恐慌、さらにこれに追い討ちをかけた昭和4（1929）年の世界大恐慌から、地域を復興させようとする政府の意向によってであった。昭和2年文部省は全国の師範付属小学

校に「郷土教育に関する調査」を行なう。また、昭和5（1930）年には、文部省が師範教育費国庫補助金の一部を郷土教育施設費の補助として全国の師範学校に交付する⁽¹²⁾。また、昭和6（1931）年には師範学校規定を改訂し「地方研究」を果たし、昭和7（1932）年からは「公民教育に関する郷土教育講話」を開催し、郷土教育の振興をアピールする⁽¹³⁾。

このような政府の動きに対する地元沖縄での郷土教育実践については未確認だが、これらの動きを受けて、沖縄でも郷土教育熱、そして郷土研究熱が高まったことは間違いない。全国的な恐慌のあおりを受けた沖縄は、ソテツ地獄と呼ばれる苛酷な窮乏に陥っていたのだから。

ここで、第二次大戦前の沖縄で、郷土研究の目的で結成されたグループを、管見の限りで一覧しておこう。

- 明治30（1897）年 沖縄人類学会
- 明治34（1901）年 沖縄学術研究会
- 大正8（1919）年 沖縄地理歴史談話会（沖縄歴史地理研究会）
- 大正11（1922）年 沖縄史跡保存会
- 大正14（1925）年 沖縄郷土研究会
- 昭和2（1927）年 南島研究会
- 昭和6（1931）年 郷土研究座談会
- 昭和8（1933）年 沖縄県文化協会
- 昭和9（1934）年 沖縄郷土協会
- 昭和10（1935）年 沖縄文化探勝会

沖縄人類学会は、烏居龍蔵が台湾調査のあと明治30（1897）年1月に沖縄にたちよったことを契機にして、その年の2月に誕生する。西常央、太田朝敷、黒岩恒らが中心になり、当時の沖縄県尋常師範学校および沖縄県尋常中学校の教職員が参加する⁽¹⁴⁾。沖縄学術研究会では黒岩恒と加藤三吾が中心になるが、発起人22名のうち大部分が沖縄教育会の会員であり、そのうち20名が本州弧からの赴任教員であった⁽¹⁵⁾。この二つは、どちらかといえば、外からの刺激で会が結成された例だが、以降は地元の知識人たちの自主的な組織になる。

沖縄地理歴史談話会は、川平朝令や島袋源一郎らを中心とする地理・歴史の担当教師によって設立された私的な研究会で、地理・歴史の教授法を中心に、沖縄の歴史・風土・文化を授業の中でどのように教えるかをテーマに研究し、沖縄における教師の自主的研究会の嚆矢とされる⁽¹⁶⁾。柳田國男の来島以前に、地元の教師たちによって自主的な研究会が組織されていたことは注目される。粟国恭子は、真境名安興や末吉安恭もかかわっていたこの会の、沖縄研究における先駆性に注目している⁽¹⁷⁾。沖縄史跡保存会は、貴重な地元の史跡を保存することを目的につくられた会⁽¹⁸⁾。沖縄郷土研究会は、沖縄教育会の提唱でつくられた。初代会長は真境名安興。教育会内の本部の他に各郡教育会にも支部をおき、地域の郷土教材を内容に織り込む学習指導要領を作成した⁽¹⁹⁾。昭和2年に発足した南島研究会⁽²⁰⁾は、やはり真境名安興や島袋源一郎、それに後におもろ学派の中心になる島袋全発らが中心になって設立した会で、当時沖縄で唯一の学術雑誌の体裁をもつ『南島研究』をすくなくとも5号まで発刊している⁽²¹⁾。これには、柳田國男、折口信夫、伊波普猷、東恩納寛惇らも協力している。だが、たとえば、南島研究会の雑誌『南島研究』創刊号の「会員名簿」を見ると、20名中13名までが地元の教員で占められている。沖縄県文化協会は研究団体というには無理があるかも知れないが、沖縄の伝統文化の認識と、経済振興を結び付け、郷土博物館の建設や、沖縄県立図書館の早期移転拡張を県に要請するなどの活動を行っており⁽²²⁾、郷土再発見の流れに位置づけることができるだろう。沖縄郷土協会は、沖縄郷土研究会と沖縄県文化協会の合同により、国民精神作興のための郷土文化振興の組織として誕生する。太田朝敷を会長とし、島袋全発と島袋源一郎らを中心に組織され、さまざまな勉強会を行っている⁽²³⁾。沖縄文化探勝会は、郷土文化への認識を深めるために島袋全発が組織して、首里・那覇近郊の建造物をめぐる⁽²⁴⁾。

これらの研究団体、およびこれに参加していた人々の活動は、資料の制約などで明らかではない。だが、これらの活動の中心に政府の意向を受けた地元の教員たちがいたことは間違いなし。屋嘉比収は、これ

らを、学術活動を主な目的とする団体と地域の振興を主な目的とする会に分け、南島研究会・郷土研究会談会の流れを前者に、沖縄郷土研究会・沖縄県文化協会・沖縄郷土協会の流れを後者に位置づけている⁽²⁵⁾。この二つの流れは、諸刃の刃としての当時の郷土研究の在り方を示しているともいえる。後述する新おもろ学派は、とりあえず前者の流れに位置づけることができる。

たとえば高良倉吉は、これらの活動の中心にいたと思われる島袋源一郎について、その活動を、沖縄県師範学校卒業までの第一期（1885～1907）、名護尋常高等小学校訓導を皮切りに沖縄本島北部で教員として活躍した第二期（1907～1920）、社会教育主事になってから死去までの第三期（1920～1942）に分けた上で、第二期の国頭郡での地域社会教育、第三期での県中央からの社会教育運動を一瞥し、次のように言う。

第二期から第三期にいたる島袋源一郎の足跡は、①天皇制イデオロギーを具体的に個々のレベルで実践したことであり、②その活動の一環として沖縄研究に関与していたということの二点につくる。

さらに、島袋の沖縄研究について、次のように続ける。

①国家至上の論理について従属した形で「郷土」＝沖縄を問題にし、②対象を歴史的・社会的諸矛盾から切りはなした非科学的な方法によって成立した「研究」であるといえよう。⁽²⁶⁾

この指摘は重要だろう。たしかに、阪井芳貴もいうように、この時期に郷土を研究した者は多かれ少なかれ、皆その仕事に時代の制約を受けているし、時代のゆがみはすべての日本人に当てはまると言える。また、具体的な内容から仕事を評価しようとするのは正当な方法だろう⁽²⁷⁾。だが一方で、仕事を評価するさいに、時代的な制約も含めて、限界を見極めることも必要なのではないかと。

とくに沖縄において、郷土への愛に支えられながら郷土を研究することと、これが日本という国への愛国心につながることを、両者の境界を見極めることは、ナショナリズムの限界とパトリオティズムの可能性を見極める上で、重要な材料を提供してくれるはずだ。沖縄からナショナリズムへ向かうことと、本州弧の一地域からナショナリズムに向かうこととは、おそらく違う。たしかに両者の違いは、ナショナリズムの本質を突き詰めれば相対的に過ぎないかもしれないが、沖縄という郷土への愛は日本ナショナリズムには、直線的には結び付きにくい。そのもっとも大きな理由は、沖縄の前近代が天皇制の外に位置したことにある。

3. 新おもろ学派の出現

大正14年、当時の沖縄社会への絶望と、自己の恋愛事件により、伊波普猷は沖縄を後にし、東京で『おもろさうし』の研究に専念するようになる。だから、地元の郷土研究グループとの直接的なつながりは、それ以前のことになる。

東京帝国大学を明治39（1906）年に卒業した伊波は、その年に帰郷し、さっそく沖縄県教育会に入会している。すでにこのときから伊波と地元の教師との関係ははじまる。前節で確認した郷土研究グループの中で、伊波が沖縄で活動した時期に発会したのは、伊波が沖縄を離れる年に誕生した沖縄郷土研究会を除けば、沖縄地理歴史談話会と沖縄史跡保存会だが、おそらく伊波はこれらのグループに直接には属していない。伊波が地元での講演などをとおして精力的な啓蒙活動を展開していたことはよく知られているが、これらのグループとの関係に限らず、地元の教師と伊波との関係は、伊波の講演を一覧すればわかるように、教師より一段高いところからの啓蒙活動となっている。これらは、多くが地元の教師たちを前にしての講演だった。たとえば、大正元（1912）年12月25日から29日に行われた、国頭郡教育支部会主催の講習会では、午前音声学、午後歴史学（琉球史）の平行講演を行ない、とくに音声学では多くの国の言語を用い、小学校の教師達に多大な

感銘を与え、歴史学では、「郡教育家の頭脳改革」を目指し、沖縄の歴史が講じられた。これを聞いた一教員は次のような感想を『沖縄毎日新聞』に述べている。

吾輩は国定教科書の中に囚はれて応用の利かない杓子定規の教育が流行せる昨今伊波氏に依りて迷夢を一掃せられ甚だ緊要なる郷土の研究が盛になり追々小学校に於いて之が実施されんとしつゝある事を祝福せずにはゐられない。（「名護講習余感」）⁽²⁰⁾

伊波の啓蒙活動を熱望する当時の教員の気持がよく現れている。明治から大正にかわるこの時期に、伊波は地域教師の研修会（「隣校研究会」）で集中的に講演を行っている。まず教育行政から促された郷土の再発見は、郷土をはじめて学問の対象としたエリート学士を時代の寵児とした。だが、ソテツ地獄を転回点として、伊波は自己の啓蒙活動を支えた歴史認識の甘さに気付く。「今となっては、民族衛生も手緩い、啓蒙運動もまぬるい」⁽²¹⁾のだ。そして、伊波は沖縄を去る。

郷土研究グループの活動で見る限り、伊波が去った後、地元における郷土研究はさらに盛んになったといえる。ある意味で伊波の啓蒙活動が実ったとも言えるかもしれない。沖縄を去ることのできた伊波よりも地元の人の方が、ある意味で郷土を切実に考えなければならないのは当然だとも言える。おりしも、ソテツ地獄と呼ばれる窮乏がさらに苛酷になっていた。郷土復興のための郷土研究。だが、これはナショナリズムへと結び付いていく。ほんらいは矛盾するはずの、ナショナリズムとパトリオティズムはここでは同一とみなされる。伊波が抱いていた性急なナショナリズムへの疑問も、もうそこにはほとんど見られない⁽²²⁾。まず学生として、そして今度は研究者として、伊波は郷土から離れて生活することで、外から郷土を相対化して見ることができたとも言える。だが、地元の多くの教員にとって、郷土を研究することと国に尽くすことは矛盾なく結び付いていた。郷土教育が、そして郷土研究が日本の近代

化の過程とふかく結び付いている以上、この道程は避けることはできなかった。

これまで見てきた郷土研究の流れをうけて、一つのグループが誕生する。このグループは、東京に去った伊波に対抗することで自己を主張する。沖縄の古典学の中心に位置する『おもろさうし』研究に画期をもたらしたと評価される地元の研究者グループ、これが新おもろ学派と呼ばれる人々である。このグループは昭和7（1932）年に結成され、地元の新聞を中心に成果が発表されたが、周知のように大正時代の後半から昭和初期の新聞が沖縄戦により消失したため、活動内容がそれほど明らかではなかった。だが、個人的な新聞の切り抜き資料などが公開され⁽³¹⁾、グループの仕事がすこしずつではあるが明らかになってきた⁽³²⁾。

新おもろ学派が活躍した昭和7年から8年頃は、日本全域においてもっとも郷土研究が盛んになった時期だ。いうまでもなくそれは、昭和6（1931）年に起きた満州事変から、第二次大戦へ向かう日本の雰囲気象徴する現象である。すでに述べたように、郷土の再発見は、この時にはじまった訳ではない。ある意味で、それは近代という時代が孕む背理であり、すでに明治時代から準備されていた。新おもろ学派は、このような時代背景のもとに発足した。地元もこの学派に多くを期待していた。反応を当時の新聞記事から抜き出してみよう。

華々しかったのは、新おもろ学派の進出である。この派は伊波普猷氏によつて集大成された『おもろ草紙』に先づ音楽上から疑問を抱き、その原形を展開した結果、所謂正読法に到達し、伊波氏の取った草紙の解釈とは、根本的にことなつた読をも発見する。（「1932年を送る／新おもろ学派の華やかな出発」『沖縄日日新聞』1932年12月、沖縄日日新聞社）

一年の沖縄研究を回顧する匿名記事の一部だが、翌年の同様の記事には次のようにある。

所謂新おもろ学派は、今年になつてからその研究

は愈々深刻になると共に、内部にも可なりの整理が行なはれた模様であり、言はば沈潜の時期に入つてゐる。この学派は青年学徒のグループであつて、その振興の意気と集団の持つ力は、沖縄の学会へその雄姿を現実に現わすことであらう。学会の展望は広く、かつ豊かである。（「さよなら1933年」掲載紙、掲載日不明）⁽³³⁾

これを見れば昭和7・8（1932・1933）年という郷土研究熱のピークに登場した若きグループが、世間からいかに注目されていたかがわかるだろう。

満州事変を機に国内では軍部の支配力が強まる。恐慌で荒廃した郷土を復興するために求められた郷土教育、郷土研究が、いつのまにか忠君愛国に向かう限りにおいて許されるようになっていく。地元のこのような期待を背負って出発したのが、新おもろ学派というグループだった。

4 新おもろ学派と伊波普猷

伊波普猷の沖縄学、とくに古琉球研究の中心には、よく知られるように『おもろさうし』研究がある。伊波が沖縄を離れる目的にも、柳田國男が熱心にする『おもろさうし』研究に専心することがあった。沖縄を離れる前年には、地元の石塚書店から『琉球聖典おもろさうし選釈』を刊行し、翌年東京に移ってからは、柳田の努力で南島談話会から『校訂おもろさうし』が出る。ある意味で、伊波にとって『おもろさうし』研究の基礎が整ったのである。

ところが、東京で『おもろさうし』研究に専念する伊波に対抗することで、自己を主張するグループが登場したのである。前節に引いた記事にも明らかに、伊波の『おもろさうし』収録歌謡（おもろ）の読みに対する批判を全面に打ち出して、新おもろ学派は出発した。たとえば、昭和7年11月17日に、グループの中心である島袋全発が発表した「オモロ研究の二大収穫（上）」には、次のようにある。

オモロ研究の曙は来た。それは発音法の発見と展読法の発見とが、同時になされたからである。伊

波普猷氏は、琉球館訳語によりて六百年前の琉球語の音韻を見付け出され、従つてオモロの朗読法に光明をもたらされた事は何と感謝申し上げていゝ事か。…それにも譬へられない大功績は展読法の研究がほぼ完成されつゝあることである。発音法が国語学の大家によって発見され、展読法が琉球音楽をたしなむ比嘉盛昇によつて発見されたことも、私達に色々の教訓を与へてくれる。⁽³⁰⁾

比嘉盛昇もやはりグループの中心的人物である⁽³¹⁾。彼による「展読法」の発見を、伊波のおもろの発音法の発見と並べつつ称賛している。すでに『おもろさうし』の研究者として知られた伊波普猷を持ち上げながら、自分たちの仕事もこれに比肩するもの、あるいはこれを越えるものだとする、高らかな宣言である。冒頭の「オモロ研究の曙は来た」に代表される、昂揚した表現には、教師を中心とする地元の若き知識人たちの熱意が感じられ、またそこに参加した個々の資質も影響していると考えていた⁽³²⁾。だがその背後には、若気の至りと言ってすまずことのできない、時代背景があった。いうまでもなく、郷土研究熱の高まり、そして忠君愛国へという時代の要請である。

伊波以後の郷土研究の戦前の頂点とも言える時期に、伊波の研究対象の中心である『おもろさうし』研究についての批判が地元の若い知識人によってなされたのである。郷土研究を行うグループの中でも、伊波をほとんど名指しする形で批判の矛先を向けてきたのははじめてだった。それも、『おもろさうし』研究を通して。新おもろ学派と伊波の関係を丁寧に追った鹿野正直は、このときの伊波の心中を次のように推測している。

これは、伊波にとっては、後ろから弾丸が飛んできたようなショックを与えた。後継者がでないことを、歎く気持ちがむしろつよかったのに、故郷には突如として若い世代の『おもろ』研究グループが出現し、自分に刃をむけてきたのである。⁽³³⁾

この推測が正しいことを、鹿野が続けて引用した

伊波の文章（省略）が示している。屋嘉比収はこれを、新おもろ学派の立場から次のようにいう。

伊波に対する新おもろ学派の批判は、沖縄研究の先達に対する新世代としての側面とともに、中央に対し沖縄の地で研究する者の自負心の反転ともいえる。⁽³⁴⁾

郷土振興を目的とする郷土研究のピークに誕生した新おもろ学派の人々が、地元で『おもろさうし』を研究することに自負を抱いていたことは間違いない。地元の真境名安興は、新おもろ学派に「多くを期待している」と述べている⁽³⁵⁾。真境名が、僚友・伊波との親交にもかかわらずこのように述べなくてはならない雰囲気が、沖縄を満たしていた。

さらに、新おもろ学派と伊波の関係の前提として、以下も考えられるだろう。すでに述べたが、伊波の講演活動は、明治期に特徴的な啓蒙性を帯びて、上から下へという関係であった。伊波は郷土研究グループの中心で活動するというよりも、上から彼らと関係していたと思われる。ここに、権威に対する若い人達の反発という形をとる下地がたしかにあったといえる。

さて、よく引かれる箇所ではあるが、新おもろ学派の代表的な仕事、昭和8（1933）年に発表された、島袋全発の「おもろさうしの読方——展読法の研究——」から、伊波を批判したとされる箇所を引く。

人或ひは、おもろ研究は限られた先輩の領分で、濫りに後人の踏入る可らざる聖域であるとなさん。例へばわが国の古事記や万葉集などに縄張りがあるうか。さういふ誤解こそ、先人に対する冒瀆であり、祖先尊崇の赤心なき輩である。断じて敷島の大和心ではない。⁽³⁶⁾

『おもろさうし』研究について述べるのに、「わが国の古事記や万葉集」や「敷島の大和心」という表現を用いることに、ナショナリズムと沖縄研究の関係が典型的に現れている。伊波と新おもろ学派の関係からは、たとえば鹿野は、これを『おもろさう

し』研究の権威、伊波に対する挑発だと理解している⁽⁴¹⁾。たしかにそういう一面があることは否定できないが、この引用の前文では「先輩伊波普猷さんが半生の業績として、これを明るみへ出し、私達に読方の端緒と解き方のあらましとを授けて下さった」とし、柳田の奔走により『校訂おもろさうし』が出版されたことにたいし「何と感謝していいかわからぬ程」だと述べている。だから、右の引用は、伊波への反発ではなく、伊波という権威を仰ぐだけの後進の、あるいは地元の研究者に対する反発なのだ。たしかに、伊波の『おもろさうし』の読み方に対して「展読法」という方法を示しはしたが、伊波その人を批判しているわけではない。この論文を書いたのが、島袋全発であり、伊波と彼のそれまでの、そしてそれ以後の関係を考えても⁽⁴²⁾、右の引用は伊波という人物への反発ではない。

伊波の『おもろさうし』研究が他より先行した理由として、大正14年に『校訂おもろさうし』が出るまで限られた写本があるだけで、普通では手にすることができないという事情があった。伊波は、恩師・田島利三郎から託された写本を手元に持っていた。この辺の事情を、比嘉春潮は次のように言う。

『校訂おもろさうし』の刊行を見るまでは、田島本『おもろさうし』一部が伊波さんの手許にあるだけで、他の人が研究しようにも資料が全くなかった。もっとも尚家とおもろ主取の安仁屋家には王府時代からの原本があり、仲吉朝助氏の文庫にはいわゆる仲吉本が蔵されていたが、この三つは誰もが利用するというわけにはいかなかった。自然、おもろの研究は伊波さんの専売となり独占とならざるを得なかった。／大正十三年におもろ選釈、大正十四年に『校訂おもろさうし』が刊行されて、今まで伊波さんの筆と口とを通してのみおもろをのぞいていた、一般特に沖縄の読書人にはじめて研究資料が開放され、研究手引きも与えられて、おいおいとおもろの研究に手を染める者も現われた。しかし、二十有余年にわたり心血を注いだ専門家たる伊波さんの研究成果に何ものかを加えるようなことはなかなか容易なことではなかった。

昭和七、八年に名乗りを上げた新おもろ学派の中には、そのもどかしさに独占だ、専売だと愚痴るものもあったようである。⁽⁴³⁾

長い引用になったが、これを読めば、その辺の事情がよくわかる。ただ、新おもろ学派についての比嘉の評は、「おもろさうしの読法」を頭に置いてのことだと思われるが、そうだとすれば、すでに述べたように誤解なのだ。たしかに、新おもろ学派に所属した者の中には右のような意見を持っていた者も居るかも知れないが、すくなくとも「おもろさうしの読法」に、それは現れていない。

また、学派の一人・宮城真治は大正8（1919）年にすでに『おもろさうし』全巻を筆写し、これをもとにすぐれた研究を独自に行なっている⁽⁴⁴⁾。宮城が見たのがどの写本なのか明らかではないが、当時国頭郡で小学校の教員をしていた宮城でも何らかの写本を見ることが可能だったのだから、流布本や活字本がないことだけが、『おもろさうし』研究における伊波先行の理由ではない。もっと重要なのは、当時の郷土研究熱の高まりだろう。伊波が『万葉集』にたとえながらその価値を主張し続けた『おもろさうし』の、沖縄における重要性を、郷土再評価の時代背景のなかで地元の人々がようやく認識しはじめたのではないか。だが、伊波が望んでいた『おもろさうし』研究の後継者が、このような形で出てきたことに、伊波は戸惑ったに違いない。

5 今後の課題

伊波普猷と新おもろ学派の関係の背後に、ナショナリズムと郷土研究の関係があることを見てきた。近代日本の郷土再発見は、ナショナリズムとふかく関係していた。

パトリオティズム（郷土愛）が経験的な要素に基礎をおいていることと比較すれば、ナショナリズムは経験から離れた共同体（ネーション）に基礎をおいている。抽象的なナショナリズムは具体的なパトリオティズムによって補完されるのだ。近代以降の日本を、どんな客観的な事実にも依存しない「想像

の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)、つまりネーションだとする柄谷行人は、次のように述べている。

たとえば、日本史は、古代・中世・近世・近代と分かれているけれども、どの時代をやろうと、根本に近代に「起源」がある。明治までの歴史学は王朝史だった。なぜなら、それまでは、国家はあったけれども、ネーションがなかったからです。ネーションというのは、民族と訳しても国民と訳してもまずいので、ネーションということにしますけど。日本史学は、明治にできあがったネーション・ステートを、過去に投射してしまっている。王朝史ではだめだというのはわかるけれども、まるでそれ以前にネーションがあったかのように論じるのはまちがいです。⁽⁴⁾

これは日本歴史学の批判だが、日本民俗学への批判の過程で述べられている⁽⁵⁾。ここで注目すべきは、歴史学が日本というネーションをつねに前提にしていることの指摘だ。

もし、対象とされる郷土がネーション存立のために求められたものであれば、郷土教育・郷土研究はネーションへつながらないはずはないのだ。重要なのは、ネーションを前提としないこと、あるいは、ネーションを前提としていることへの徹底した自覚であるだろう。

伊波の仕事が、もしナショナリズムにつながる郷土研究をある部分で回避できているとすれば、郷土・沖縄という認識が日本というネーションを前提とすることに気付いていたからだ。これに対し、新おもしろ学派の郷土研究がナショナリズムにつながっていったのは、郷土認識が日本というネーションを前提としていたことに無自覚だからということになる。ひるがえって、沖縄学というとき、沖縄というネーションをどこかで前提としていないかという反省が、沖縄学にも必要なのではないだろうか。

さて、やっと出発点にたつたようである。このような視点から、伊波普猷や、新おもしろ学派の仕事をくわしく見ていく必要があるだろう。ネーションを

自覚しながら、ナショナリズムに囚われない真の郷土を見いだしているかどうかについて。

[注]

- (1) たとえば、大田昌秀1976『沖縄の民衆意識』(新泉社)では沖縄学について「それも…けっきょく、より早くより完全な形で皇民化を促進しようとする時流の一側面でしかなかった」(374頁)とする。また、新川明1973『異族と天皇の国家』(二月社)では「ともあれ、伊波の『日琉同祖論』に立つ『沖縄学』が、いかに学問的に多くの業績を残したとはいえ、その業績も含めて伊波普猷の全体像の評価は、彼の学問的作業が政治的または思想的に果たしつづけた役割の否定的な側面の重さと大きさを、必ず視野におさめながら考究しなければ妥当性を欠く」(343頁)とする。
- (2) 比屋根照夫1976「啓蒙者伊波普猷の肖像」『近代日本と伊波普猷』(1981、三一書房)、安良城盛昭1978「琉球処分論」『新・沖縄史論』(1980、沖縄タイムス社)、187～195頁、鹿野政直1992『沖縄の淵』(岩波書店)、157～169頁。
- (3) 比屋根照夫1978「明治国家と伊波普猷」『近代日本と伊波普猷』では『古琉球の政治』(大正14年、1925)出版以後に「伊波は偏狭な日本の国家主義を批判し、朝鮮、台湾など異民族統治のあり方へも根源的な疑念を表明するに至る」(155頁)とする。また、鹿野、注(2)同書では、伊波の「琉球史の趨勢」という論文で展開される日琉同祖論について「この論議が、琉球的個性の抹殺をかえって『国家の損失』とする角度からなされたことは、疑うべくもない。がそれは、日本政府およびその出先としての県当局の『国性剥奪』政策への、沖縄がわからのもっとも鋭い異議申し立てをなした」(97頁)と、伊波論の限界を見極めながら、日琉同祖論の意義を認めている。
- (4) 橋川文三1994『ナショナリズム』紀伊国屋新書、21頁。
- (5) 前注書、16頁。

- (6) 橋川、注(4)同書、5頁。
- (7) 最近では、村井紀1992「南島イデオロギーの発生」『南島イデオロギーの発生』(1992、福武書店)で、柳田が、自己の、そして近代日本の植民地政策を隠蔽するために「南島」を見出したとする批判が行なわれている。柳田の「南島」という視線はたしかに近代日本が琉球国を併合するという視点をソフトに覆い隠す。沖縄では無視されたかに見える村井の同書に対する沖縄側からの唯一とも見える反応として、新城郁夫1993「村井紀『南島イデオロギーの発生』をめぐって」『新沖縄文学』第95号(沖縄タイムス社)を挙げておきたい。
- (8) 高橋敏1978『日本民衆教育史研究』未来社、371～372頁。「郷土」という語は、ドイツ語の Heimat Kunde の翻訳として使われるようになったという。
- (9) 新城安善1975「沖縄研究の書誌とその背景」『沖縄県史』第6巻(各論編5・文化2)、862頁。なお、新城論文は、資料の掘り起こしにより、沖縄における郷土教育と郷土研究を詳細に跡付け、沖縄における郷土研究とナショナリズムの関係を論じている。
- (10) 沖縄私立教育会(明治19年、1886)→沖縄県私立教育会(明治24年、1891)→社団法人・沖縄教育会(明治31年、1898)→沖縄教育会(明治37年、1904)→沖縄県教育会(大正3年、1915)という変遷がある。
- (11) 新城、注(9)同書、887頁。
- (12) 高橋、注(8)同書、379頁。
- (13) 宮坂広作1968「第5章 日本資本主義の危機と教育」『教育学全集第3巻・近代教育史』小学館、161頁。
- (14) 新城、注(9)同書、848頁、ならびに、新城、1983「沖縄人類学会」『沖縄大百科事典』上巻、沖縄タイムス社。
- (15) 新城、注(9)同書、863頁、ならびに、西平功1983「沖縄学術研究会」『沖縄大百科事典』上巻。
- (16) 安里彦紀1983「沖縄地歴会」『沖縄大百科事典』上巻。
- (17) 栗国恭子1993「国粹主義の周辺と沖縄」『浦添市立図書館紀要』第5号、浦添市立図書館、68頁。また、同「人物列伝・沖縄言論の百年177—末吉麦門冬27」(『沖縄タイムス』1994年9月19日朝刊)では、沖縄地理歴史談話会について「この会の活動で興味深いのは、いわゆるフィールドワークを組織的に行っていること、教育会からの参加が多いこと、また青年会のメンバーも協力していること、講演会等で取り扱っているテーマが沖縄、日本、朝鮮等の東洋的なものがほとんどであるといった点」だとする。
- (18) 新城徳佑1983「沖縄史跡保存会」『沖縄大百科事典』上巻。
- (19) 新城安善1983「沖縄郷土研究会」『沖縄大百科事典』上巻。なお、発会の年は、栗国、「国粹主義の周辺と沖縄」注(17)同書によった。
- (20) 西平賀譲編、1928『南島研究』創刊号(南島研究会)の「編輯者より」(西平)に「本誌創刊号の計画を発表してから既に三ヶ月」とあり、雑誌が昭和3(1928)年2月1日発行だから、研究会は前年に発足していると考えられる。
- (21) 新城安善1983「南島研究会」『南島研究』『沖縄大百科事典』下巻。また、同会について「沖縄郷土研究会が母体であったとの説」(前者)があるという。
- (22) 新城安善1983「沖縄県文化協会」『沖縄大百科事典』上巻。
- (23) 屋嘉比収1995「人物列伝・沖縄言論の百年253—島袋全発33」『沖縄タイムス』1995年1月12日朝刊。
- (24) 屋嘉比収1995「人物列伝・沖縄言論の百年257—島袋全発37」『沖縄タイムス』1995年1月16日朝刊。
- (25) 屋嘉比収1995「人物列伝・沖縄言論の百年253—島袋全発33」『沖縄タイムス』1995年1月12日朝刊。
- (26) 高良倉吉1976「沖縄研究と天皇制イデオロギー」『沖縄歴史論序説』(1980、三一書房)、233頁。
- (27) 阪井芳貴1993「島袋源一郎の郷土研究 第一

- 部 資料編』『名古屋市立保育短期大学研究紀要』第32号、名古屋市立保育短期大学、58頁。
- (28) 外間守善・比屋根照夫1976「年譜」『伊波普猷全集』第11巻、平凡社、547～548頁。
- (29) 伊波普猷1924「琉球民族の精神分析」『伊波普猷全集』第11巻、299頁。
- (30) たとえば、屋嘉比収1995「人物列伝・沖縄言論の百年263—島袋全発43」『沖縄タイムス』1995年1月20日朝刊で、屋嘉比は「日本精神になりたければオモロを研究」すべきだとする、全発の言葉を紹介している。
- (31) たとえば、沖縄県立図書館所蔵の東恩納寛惇の新聞切り抜き帳、天野鉄夫の切り抜き帳（「琉球学集説」）、名護市史編纂室所蔵の宮城真治の切り抜き帳、また那覇市史編集室収集資料など。本稿はこれらに多くを負っている。
- (32) 末次1994「宮城真治と新おもろ学派—名護博物館蔵・宮城真治草稿から—」『地域と文化』第83号（ひるぎ社）など参照。
- (33) いずれも、沖縄県立図書館所蔵東恩納寛惇切り抜き帳より。
- (34) 副題「附『やりかさ』『おしかさ』の意義」『琉球新報』1932年11月17日号、琉球新報社。
- (35) 当間一郎1983「比嘉盛昇」『沖縄大百科事典』下巻。比嘉は新おもろ学派の中心人物で、彼の個性が学派のイメージに強く影響している。比嘉についても別稿を期したい。
- (36) 末次1996「南島歌謡研究史の一断面—新おもろ学派の仕事（1）—」『日本歌謡研究』第35号（日本歌謡学会）。
- (37) 鹿野、注（2）同書、231頁。
- (38) 屋嘉比収1995「人物列伝・沖縄言論の百年253—島袋全発34」『沖縄タイムス』1995年1月13日朝刊。
- (39) 注（33）「1932年を送る」同書。
- (40) 副題「展読法の研究」『沖縄教育』昭和8年1月号、沖縄県教育会、44頁。
- (41) 鹿野、注（2）同書、230頁。
- (42) たとえば、『うるま新報』1951年2月19日号の「月曜特集・先人はどう生き抜いたか・伊波普ゆう氏」の中で、全発は、中学時代から、伊波の弟・普助を通して伊波と関係があったことを述べている。学派発足以前からの伊波と新おもろ学派の人々との関係については別稿を期したい。
- (43) 比嘉春潮1957「仲原君とおもろ研究」『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、88～89頁。
- (44) 末次、注（27）同書、15頁。宮城は、写本（原本）研究の立場から、活字本（『校訂おもろさうし』）を用いた、新おもろ学派の研究の欠点をみごとに突いている。
- (45) 川村湊・村井紀・山口昌男・柄谷行人1992「（共同討議）植民地主義と近代日本」1994『シンポジウムⅠ』大田出版、124頁。
- (46) このシンポジウムは、注（9）に引いた、村井紀「南島イデオロギーの発生」をめぐってなされており、柳田の植民地政策への関与隠蔽についての討議だが、ここでの視点から言えば、柳田はそれゆえにというべきか、日本というネーションを自明としていない。たとえば、柳田が高木敏雄とともに『郷土研究』をはじめた大正3（1914）年当時、高木が「『郷土』の語をほとんど日本民族や国土の意と同一視して使っていた」のに対し、柳田は「それほど無造作な同一化は試みていない」と、永池健二はいう（1988「第三節 常民史学の確立」後藤総一郎監修・柳田國男研究会編著『柳田國男伝』三一書房、774頁）。さらに、郷土研究熱が高まる昭和初年度においても、柳田は自身の民俗学と当時の郷土研究は異なるものだとして認識していたようだ。すでに触れた、昭和初期には政府・文部省による郷土教育の推進や、小田内通敏や尾高豊作などによって結成された「郷土教育連盟」（昭和5年、1930より）による、官製とは別の郷土教育運動もあったが、柳田は「この二つの郷土教育運動のどちらにも加担して」おらず、「むしろ、終始冷ややかで、批判的な態度をとりつけていた」という。おなじ郷土教育・郷土研究でありながら、このように対立するのは、永池がいうように「郷土観のあまりにも大きな隔た

り」によるのであり（775頁）、これは日本というネーションへの自覚の在り方の問題だともいえる。

（付記）ほんらいは、1995年8月12日に浦添市立図書館主催の「第3回沖縄学講座」で話したことをまとめるつもりだったが、講座前後の会話で沖縄学研究室の栗国恭子さんに示唆され、新おもろ学派の背後にあるナショナリズムの問題に遅まきながら気付き、本稿ではこちらにテーマの中心が移っている。ただ、まだ調べ始めたばかりで、従来の仕事をまと

めた程度に留まっている。このテーマについては新おもろ学派の中心的人物の一人である世礼国男を論じるなかでもう一度取り上げたい。

また、講座で話したことについては、別稿を期したい。

最後に、ヤマトの一地方で沖縄のことを考えているにすぎない私のような者に、貴重な機会を与えて下さっただけでなく、ヤマトでは手に入りにくい資料を提供して下さいった沖縄学研究室の皆さんに感謝申し上げます。

沖縄芝居の動向(揺籃期～明治33年)

徳 元 剛

〔揺籃期〕

「琉球見聞雜記」(筆者不明、『沖縄県史』第14巻資料編4収録)に、明治21年当時の那覇の劇場および芝居についての記述がある。

「那覇ニ劇場一ヶ所アリ。一日之ヲ観ルニ、其仕掛ハ一口ニ之ヲ云ヘハ、内地ノ乞食芝居トモ云ヘキモノニテ、周囲ハ古ル板ナドヲ集テ堀ヲ作り他人ノ乱入ヲ防ギ、舞台ハ一寸内地ノ能舞台ニ類シ少シク狭ク、且ツ汚穢ナリ。舞台ノ正面ニハ黒幕ニ一ツ巴ノ紋アルモノヲ張り、其前ニ松ノ木ノ枯レ木ヲ立テタリ。但シ葉ハナクシテ幹ト枝トノミ也。舞台ノ家根ノ下ニ八野ノ額ヲ掲ケタルハ何カ故事ニテモアルコトナルヘク、柱ハ紅白ノ木綿ヲ以テ巻付ケアルコト相撲土俵ノ柱ノ如シ。間ニ又紅白ノ半幕ヲ掲ケタリ。扱観客ノ居所ヲ棧敷ト土間トノ二種トシ、家根ハ席ヲ掩ヒアルノミナレバ、日光ハ幾分カ避クルコトヲ得ルモ、雨天ニハ休業ヨリ致方ナシ。棧敷ハ東京ニテ競馬ノ棧敷ヨリハ余程粗末ニシテ卑シ。土間ハ真ノ土間ニテ只数枚ノ席ヲ敷キアルノミ。観客ハ例ノ跣足ナレバ右ニテ充分事足ルコトナルヘシ。但シ土間ハ一日四銭ニテ、棧敷ハ六銭ナリトス。外題ハ種々アルモノト見ヘ、時代モノ、世話モノ取交セ演行セリ。予ノ観タル日ハ、尾類馬、金細工踊、獅子踊、女雑踊、女笠踊、旅願、国頭サバクリ、其他種々アリタレトモ、今一々記臆セズ。総ジテ時代モノハ内地ノ能ニヨク似タリ。口上ノ使ヒ振り、役者ノ足ノ踏ミ方、殆ント能ノ如シ。其他ニ至テハ、今日ノ世俗ヲ其儘ニ写シ、或ハ古代ノ踊ヲ模擬シタ

ルモノナレバ、能トハ全ク別物ノ如シ。但シ普通ノ踊ハ概シテ内地ノ「カツボレ」踊ニ彷彿タリ。此芝居ニハ一幕・二幕ト云フ如キ幕ハナク、一段・二段ト唱ユル方ニテ、一段済ムトキハ役者ハ橋ガカリヨリ楽屋ニ入ルノ仕掛也。又楽器ハ笛・太鼓・小鼓(ツ、ミニハアラズ)・「ドラ」・「スリ鐘」・三味線・ブー竹位ノモノナリ。衣裳ハ概シテ木綿・メリンス・唐金巾ニテ、絹類ハ一向見ヘス。其仕立方ハ沖縄固有ノ服・内地ノ服・支那服(明服)・其他陣羽織ノ如キモノ・袴ノ如キモノ等種々アリ、太刀・長刀ノ如キハ皆内地製ノモノナリ。全体ノ仕掛ハ余程奇ナルモノニテ、大ニ其国ノ民度ヲ察スルニ足レリ。只遺憾ナルハ言語ノ分ラサルコト是ナリ」(句読点は著者)

ここに紹介されている劇場は、内地人の筆者をして乞食芝居と言わしめている。古板で周りを囲み、狭く汚いが無理をすれば能舞台に見えなくもない舞台が設えられている。観客席については、屋根はあっても壁がないということなのか、日差しは防げても雨が降れば休業するという。

池宮正治氏が「明治の演劇」(『沖縄県史』6文化2、『琉球文学論』収録)の中に、「一八八七年(明治二〇年)ないし八八年頃までは、仲毛も本小屋になっていたのである」と述べているが、つまりこれは上のような劇場を念頭にしての記述であろう。この劇場は取り敢えずそれとしての体裁を持っていたといえなくもない。

「舞台ノ正面ニハ黒幕ニ一ツ巴ノ紋アルモノヲ張り、其前ニ松ノ木ノ枯レ木ヲ立テタリ。但シ葉ハナクシテ幹ト枝トノミ也」との記述について、真栄田

勝朗氏の『琉球芝居物語』（青磁社、1981年）にも下記のような記述がある。

「この芝居で一番奇異の感じを受けたのは、舞台正面に一本の松の木を植えてあったことだ。根本は舞台下から生え、幹の太さだけ床板をくり抜き、枝は天井まで届いていた。幹の上部には大きな枝が二もとばかり出て、それに青葉もついていたように思うが、もしそうだとすれば、陽の当たらない所に枝が出るはずはないが私の錯覚であろうか。舞台は普通の劇場よりずっと客席の方に突き出して、観覧席の中に舞台が浮き出したかっこうで、だから四角形の三辺にカブリつきがあったわけだ。舞台と楽屋との境界には紅白だんだらの幕が引かれ、松の生えた具合や全体から受ける感じが、能舞台を思わせるものがあった。この松の木は組踊りで敵城に攻め入る場面ではその足場に使われ、また『銘刈子』ではあつらえ向きに松の枝に羽衣をかけ、天女の昇天には松に登って二階楽屋に抜けていた」（第一編／仲毛芝居）

舞台の正面に床板をぶち抜いて立つ松の木は、常設の大道具とでもいうようなものだったのである。真栄田氏が初めて仲毛芝居を見たのは明治30年頃のことだということで、「琉球見聞雑記」の明治21年以降、仲毛芝居は少なくとも10年近くも舞台に松の木を立てていたことになる。

渡嘉敷守良の「舞踊に関する随想録」には、明治25～26年頃に初めて那覇に民間演芸場が設立されたとある。これは仲毛芝居のことを指しているのであろうが、これは「琉球見聞雑記」や真栄田氏の記述とずれているということではなく、明治25～26年頃に仲毛演芸場が本建築になってからの守良の記憶とみるほうがよい。さらに同手記には「三十三、四年頃には新しく地の利を得て端道にできた二百余坪の本演劇場に押され、幾何もなく遂に由緒ある仲毛芝居も滅んでしまった」とあり、また明治33年2月23日付の琉球新報に載った矯風会の広告に「仲毛演芸場跡」とあることから、仲毛演芸場が存続したのは明治20～21年頃から少なくとも33～34年頃までと推

測できそうである。

仲毛演芸場が本建築になった頃に、本演芸場が設立されたという。真栄田氏の『琉球芝居物語』によれば、明治24～25年頃とのことである。そして壬辰座の旗揚げによる新演芸場の設立は明治25年で、首里演芸場の設立もそれと前後する時期であるという。5年あまりの間に3つの劇場ができたことになる。そのことが仲毛演芸場の閉鎖につながっていった。

〔明治31年〕

「●娘の逃亡 那覇区字久茂地の志堅原松長女オミトは去る旧二月廿日反布行商の□□外出したる儘帰家せざるより全人実母の□□常々より新演芸場の役者渡嘉敷龜と屢々密会□□居ることを知り居れば該役者と逃亡せしにあらざる疑念を抱き心当りの場所を捜索中去る廿八日取押へたるも容易に帰家せざるより那覇警察署へ右の趣きを届け出でたれば早速全署へ引致□□懇々説諭を加へたる上叔母国場カメへ引き渡したりと云ふ」

4月1日付の琉球新報に載ったいわゆるゴシップ記事であるが、渡嘉敷龜とは何者であろうか。池宮正治氏の「沖繩芝居参上」（『新琉球史』近代・現代編収録）にも、明治26年の京阪・名古屋公演に参加したメンバーを挙げた後、同名の人物を問題にしている。

「しかしここには渡嘉敷が牛と龜（何れも童名）の二人いる。年令順もしくは役者の格の順に上がっているとすれば、渡嘉敷牛は守儀のこととなる。問題は『龜』が誰か特定できないことである。弟の守礼はこの時十歳、守良の手記によると仲毛芝居に入ったばかりで、童名は次良である。守良の義兄にあたる染屋の渡嘉敷は童名を三郎といった。守良だとすると時に十七歳、そうとうはっきり記憶しているはずなのに、手記は遺漏や誤謬が多すぎる」

守儀（1873～1899）だとすると、彼は当時24歳で、

死亡する前年にあたる。「年令順もしくは役者の格の順に上がっているとすれば」と断っていることから、守儀の童名が「牛」であるという根拠はそう強いようにもとれない。あるいはもしかしたらそれを示す資料があるかもしれないが確認していない。守良（1880～1953）も含めて、誰が「渡嘉敷亀」であるか、いまだ謎である。

「●本演芸場 過日来休業し居りたる全演芸場は寒水川芝居の役者を引き入れ本日より興業すると云ふ」

上の記事は、明治31年4月19日付の琉球新報のものである。しばらく本演芸場は休業していたことがわかる。そして4月19日をもって興行を再開した際に、寒水川芝居の役者を引き入れた。同月23日付の琉球新報にその劇評が出ている。以下に引用する。

「●本演芸場 全芝居は寒水川芝居役者が合併したるより昼夜の木戸賃合せて殆んど二拾円に上る由なるが全芝居にて一番目立つ者は役者が前日の顔と異なるに在りて狂言の筋は前日と少しも異なることなし」

演じられた芝居が何という演題だったか、この記事からはわからないが、同じ芝居の同じ役柄を複数の役者が交代で演じていたらしいことがわかる。

5月18日に本演芸場から寒水川芝居の役者が分離して古巣に戻った。そのことを記した5月17日付の琉球新報の記事は以下のようなものである。

「●首里演芸場 同演芸場には先程来本演芸場と合併し居たりし所来る十八日を期し再び首里へ移転する由」

この時期、他の演芸場の活動状況はどうだったのか、新聞記事を以下に引用する。

「●芝居の大競争 久しく雀羅を張りし新演芸場は具志川芝居より分離したる役者連が興行した

るに付き日々繁盛に趣き今や具志川芝居を圧倒する程に至りしかば具志川芝居にては二三日前寒水川芝居に百円の大金を与へて全芝居の役者を連れ来り目下新演芸場と大競争を始めしが初日の昼は木戸賃を出さずして入場したるもの多き為充分大入りなりしも夜は新演芸場の方が大入なればこの模様にては新演芸場を圧倒することは到底六ヶしかるべしと芝居通は躍起となりて語れり」

上の記事は、明治31年4月21日付の琉球新報のものである。具志川芝居とは何であろうか。ともかく新演芸場に具志川芝居から分離した役者たちが入った。そして新演芸場に対抗するかたちで具志川芝居には寒水川芝居の役者が入っている。すでに触れた琉球新報の4月19日付、本演芸場が寒水川芝居の役者を引き入れたという記事と符合していると考えるのはどうであろうか。つまり具志川芝居とは本演芸場の別名ではないかと考えるのである。新演芸場に本演芸場の役者が移り、本演芸場に寒水川芝居（首里演芸場）の役者が移り、そうすると寒水川芝居は、抱えの役者がいなくなったか、あるいは役者の数が不足を来したか、いずれかの状態に陥ったと考えられる。そこで役者を補充しなければならない。そのことを琉球新報4月23日付の次の記事が示しているのではないか。

「●仲毛芝居の役者寒水川芝居にて興行す 過日寒水川芝居の役者が本演芸場の役者と合併するや仲毛芝居にては金三拾円を寒水川芝居に与へて全芝居を借りたる由なるが一昨日より仲毛芝居の役者は寒水川芝居にて興行を始めしに近来稀なる大入りなりと云ふ」

役者の不足した寒水川芝居つまり首里演芸場には、仲毛芝居の役者が入っている。ここで「仲毛芝居の役者」という時、それは必ずしも仲毛芝居という演芸場を本拠にしている役者という意味ではないかもしれない。というのは、後述するが、例えば新聞広告に辻端道の仲毛演芸場との名があったりする。ち

なみに仲毛演芸場という劇場は、那覇西村の辻端道ではなく、東村の仲毛にあった。その他、本演芸場から新演芸場に移った仲毛演芸場の広告というのが新聞に出ていたり、仲毛演芸場跡の矯風会の新聞広告に前後して木戸銭の案内（新聞広告欄）に本演芸場・首里演芸場とともに仲毛演芸場の名があったりする。当時「～座」といった呼称は劇団名として定着していなかったようである。さらにいえば役者にしても、自分たちが劇団というひとつの団体組織に所属しているという意識はあまりなかったのかもしれない。

6月21日付の琉球新報に、本演芸場についての劇評が載っている。

「●芝居だより

新狂言貞女鑑 近頃は孰れの芝居も不景気にて門前雀羅を張ると云ふ有様なるが頻りに新狂言を仕組み客引するも物価騰貴の今日なれば芝居を見て日暮らしするものは至って少かるべし偕て本演芸場は昨年迄は他の芝居を圧倒する程景気宜しかりしが本年の二三月頃に芝居主と役者の間に悶着を生じ一時は閉場せし程なりしも幸ひ寒水川芝居の役者を合併して興行したるより少しく景気を増したれど近頃に至りては亦た役者の数を減じ観客至って少なし然れども全芝居には久高、渡嘉敷、杯腕きゝの役者が狂言を演じ居る故観客に欠伸を催ふせしめざるは大出来而して貞女鑑と云ふ新狂言は最初夫が娼妓に迷ひて妻子の生死を顧みず娼妓と共に山原地方に逃亡し居らざりしを妻は自分の子の教育を怠らず学校に通はし居りたるが遂に其の子が生長して学校を卒業し教員となりたれば母は其の子に養はれて一生を送ると云ふ境遇とはなりしに如何なる縁因か平素新聞杯手に取りしことなき山原に逃亡せし父は山より帰る途中新聞を見て我が子が教員となり母に孝養を尽すと云ふことを見て自分の過ちをも顧みず我家へ立ち帰りしが妻は大に立腹し如何なれば我家へ帰り来りしが早く出て行けと夫に迫まるも夫は一言の返答もなく只だ過まるのみこの時子は学校より帰り事

の様子を聞き父母の中をば和睦にせしめ其祝ひとして生徒に踊らしむる趣向なるがこの狂言中生徒に踊らす丈は止めて唱歌のみか或は軍歌のみを歌はしめ渡嘉敷の縄挽口説きにて狂言を仕舞へば最一層宜しかるべし」

本演芸場のそれまでの事情についてはすでに触れておいた。本演芸場は明治30年までは他の芝居を圧倒するほどの盛況振りを見せていたが、明治31年の2～3月頃に興行主と役者との間で悶着が起きて、興行中止に追い込まれた。そして明治31年4月19日に興行を再開するにあたって、寒水川芝居の役者を引き入れている。これは役者の補充と考えられる。それから徐々に景気も回復していったが、5月18日には寒水川芝居の役者が分離して首里に戻ったため、役者の数が減り、それと並行して客足も減った。しかし新聞劇評にみえるように、久高某・渡嘉敷某といった優れた役者を抱え、充分見るに堪える芝居を舞台に上せていたという。そういう評価を受けた興行再開第1弾の芸題は、新狂言「貞女鑑」である。

「●芝居だより

▲新狂言正直者褒章 は目下新演芸場にて興行し居るが狂言の趣向は正直者が金銭を紛失し同ち正直者が其の金銭を拾ひ得て紛失者に返還せんとするも容易に受け取らざりしと亦た一方にては拾得物を隠匿して処刑を受けし点と両方の結果を演じたれば観客をして善趣向なりと云はしめたるが先づこの狂言の欠点を挙げれば結尾に至り躍るのは止めて正直物二人が金銭を貰ふて帰るとき兩人をして最少しく嬉しき状態を顕はせこれにて止めたら最一層宜しかるべし

▲遊廓会議伝 も新演芸場の新狂言にして屋嘉、禰覇、上間杯腕利きの役者が勤め居れば先づ遊郭の真状を写し尾類馬を仕込み遊客に疑を抱かしめざりしは趣向宜しかりし

▲柔術教授 これも新演芸場の新狂言なるがこの狂言之趣向も先づ宜しき方なれど教授中武道の必要如何んを教へずして免許せしは教師其の人の誤に帰すべければ狂言の骨は何れにあるや

ら訳のわからぬ」(琉球新報、6月27日)

一方、新演芸場では「正直者褒章」「遊廓会議伝」「柔術教授」が上演された。3本とも新狂言と銘打たれているので、方言セリフ劇とみてよい。

両演芸場の芝居が共通に批判されているのは、芝居の終わりに登場人物が踊る点である。本演芸場の「貞女鑑」と新演芸場の「正直者褒章」の2本にその批判が向けられている。「其祝ひとして生徒に踊らしむる趣向なるがこの狂言中生徒に踊らす丈は止めて唱歌のみか或は軍歌のみを歌はしめ渡嘉敷の縄挽口説きにて狂言を仕舞へば最一層宜しかるべし」(「貞女鑑」)や「先づこの狂言の欠点を挙げれば結尾に至り踊るのは止めて正直者二人が金銭を貰ふて帰るとき兩人をして最少しく嬉しき状態を顕はせこれにて止めたら最一層宜しかるべし」(「正直者褒章」)との批評がこれにあたる。めでたい場面であるから踊ってみせるというのは、確かに安易な発想と言えなくもない。現在でも時々見られることである。

両演芸場は7月に那覇警察署に呼出しをくらった。理由は「警察署に届け出たの芸題に趣向を変更して興行し居る」(琉球新報、明治31年7月11日)からだった。『沖縄県警察史』第1巻(明治・大正編)によれば、諸興行並遊戯場取締規則第6条第6項に「看板板ト実物ト相違スル事」を禁じるとあるが、これに違反したのだろう。

10月21日付の琉球新報には仲毛芝居の劇評が出ている。当時仲毛芝居は本演芸場を本拠にしていたと思われる。「若衆躍」「女躍」「二才躍」「女雑躍」「越来躍」「兄弟不和戒」「猿躍」「囲碁口説」「組躍」「八重瀬」が演じられたという。劇評中に「猿躍の渡嘉敷」と出てくるが、これは渡嘉敷守儀のことであろう。弟である守良の手記「舞踊に関する随想録」によれば、守儀は明治26年の京阪・名古屋公演の時に猿躍を習ってきている。手記には「兄が名古屋から帰ってから琉球演劇の改良に志し、従来の琉球狂言などとは全然飛び離れ、全部標準語で語る思い切った一幕物を上演したのである。(中略)その時代には猿芝居など観たこともないのは勿論、全部標準語を遣って演じたので、観客をアッと驚かすと共に大

変な評判を取ったのである」とある。池宮正治氏も「沖縄芝居参上」の中でこのことに触れている。

「守良の手記では、兄守儀は名古屋から帰って大和口でやる猿芝居(猿を使ってやる芝居)をやったとある。大和土産公演ということであろう。守儀も烏帽子に袴を着け拍子木を持ち、二匹の猿にも烏帽子とチャンチャンコを羽織らせて、大和口で口上を述べながら、母子猿がそれにつれて母子の情愛を演じるもので、本土ではよく大道で見られた猿廻しの芸能である。(中略)大和口を使うだけで珍しがられたと言われる時代だから、大和渡りの猿芸を物珍しく迎えたことは想像に難くない」

10月25日の琉球新報に新演芸場における興行の劇評が載っている。「若衆踊」「女踊」「二才踊」「女雑踊」その他種々の狂言等、そして組踊などを演じていた。この時期の新演芸場の売り物といえば「女雑踊」であり、劇評には「当劇場の得意なる女雑躍の中にて最も優美にして且つ情趣ある花風下げ述べの雑躍川平節等の雑躍鍛冶細工雑躍の三躍の中の一を毎日一回宛演ずる事とせば是より客足繁くなりて益々繁昌に至るべし」とある。

〔明治32年〕

下は1月5・7・9日にわたって琉球新報に載せられた広告である。

「御披露

御客様方益々御機嫌よく御座遊はされ恐悦至極に奉存上候従て当劇場儀皆様の御蔭を以て繁昌致候段難有仕合に奉存候偕て今般東京より蓄音機を下し本日以後演劇の道具につかひ東京橋の有名なる芸妓の歌三味線、東京役者の仮声及当劇場にて演ずる音曲並に役者の仮声等を御聴に達し候間何卒続々御参観の上御好評賜り度此段御披露申上候頓首敬白

一月五日

辻端道 仲毛演芸場

御客様」

明治32年1月、本演芸場の仲毛芝居では、東京から蓄音機を購入して演劇道具とした。東京芸者の歌三味線、東京役者や沖縄役者の声を録音・再生するという趣向だったようである。物珍しさからか、首里・那覇・地方からの見物人、また学生の関心を集め、未曾有の大繁盛を記録したという。上演方法についてはよくわからないが、蓄音機を舞台に置き、録音された音声を再生して流していたのだろうか。

一方、1月19日付の琉球新報の「大島通信（一月六日）」によると、奄美大島で「沖縄県仲毛演芸場」とのノボリを出して、12～13名の役者たちが興行を行っていた。本演芸場の蓄音機導入は、抱えの役者の仕事を奪ったのだろうか。大島へまで巡業に出なければならなかった事情をこのように推測しているが、どうだろうか。

「●新演芸場 辻端道なる新演芸場に於ては昨二月一日即ち旧十二月二十一日より新狂言を出し従来の役者の外に技芸に熟せる人気役者数名を雇入れ一座大勉強にて看客の好評を博する心組みなりと云ふ又た全日は那覇区の重立ちたる家々に招待状を發して見物せしめたりと云ふ」

上は2月2日付の琉球新報の記事である。2月1日から新演芸場では「偽巧戒狂言」「妖怪平狂言」が上演された。4日付の琉球新報にその大略が記されている。「偽巧戒狂言は強盗殺人犯者が不思議にも人形の物言ひたる為め事発覚したる故事にして妖怪平狂言は黒白の二蛇が二人の美女に化して大鱈大蟹大蝦等の怪物を率ひ来り人を悩しけるを和尚の祈念に依りて消失せる故事」といったものだった。記事の中では中国小説などからの翻訳ではないかとも推測されている。人形がしゃべったり、魑魅魍魎が登場したり、ずいぶん楽しそうな芝居だったと想像するが、どのように上演したのだろうか。それはとにかく興行は大盛況で、新聞記事でも絶賛されている。

5月13日の琉球新報には、寒水川芝居の大入りが報告されている。演題については記述がないのでわからないが、嘉手納小・屋嘉比小などの名役者がいたらしい。特に屋嘉比小という人は大阪で芝居の見

物を通して技芸を得たという。

池宮正治氏の「沖縄芝居参上」によれば、26年沖縄芝居が京阪・名古屋で公演されているが、その時のメンバーの1人とは考えにくい。というのは、上の論文に列举されている総メンバーの中に「屋嘉比」はいないからである。

9月には寒水川芝居にいた役者たちが与那原に移り興行している。しかし地元の村人や寄留人たちが風紀の乱れを嫌悪し、芝居見物禁止の規約を制定した。芝居を見物した者には3円の罰金が科せられることになったのである。7～8名の若者たちが見張りに立つようになり、興行は不景気に陥った。

上に関連して、12月25日付の琉球新報の「風俗談片～芝居と風俗」を下に引用する。

「▲糸満の芝居 全芝居は与那原にてひと儲けせんとて一二ヶ月間も興行せしが全地の人民は総べて芝居を見るものを賤の風習あるを以て見るもの至って少なく為に失敗を来らしたるに役者は増々勇気を励まし糸満村に興行地を変更することになりたるは近頃のことなるが糸満婦人の風習として十二三歳の頃より商売を営み婦女と雖も多少の貯金をなし居るが故に芝居を見るも他に干渉するものなければ毎夜大入りにて役者は一人にて三人位を勤め目下勉強し居ると云ふ」

与那原で迫害にあって追われた役者たちは、糸満に移っていたのである。

同じ記事中であるが、他に名護から大宜味・金武などへと巡業している劇団もあったという。

〔明治33年〕

下は1月13日付の琉球新報の記事である。

「芝居の移転 従来辻端道の二階芝居に在りて興行し居りたる役者連は今般都合に依り隣なる芝居に移転する事となり来十八日愈々移転し全日より賑々しく興行し役者一同相励みて従前の通り観客の心を引かんと心組みにて今より其支

度に忙かはしとの事なれば当日以後の人気思ひ
遣らるゝなり」

そして1月15・17・19日には下のような2つの広
告が琉球新報に載った。

「御披露

当演芸場の儀先般来本演芸場々主と一の悶着を
惹き起し裁判沙汰にまで及び候処今般同業者仲
間永遠の和親を謀る為め二階芝居の役者一同と
熟談を遂け右裁判事件は場主に代り該役者一同
に於て引受け金百五十円弊場へ支払ひ互に演芸
場を交換することに示談調ひ首尾能く落着せし
に就き来る十八日（旧十八日）より新演芸場
（二階芝居）へ引越し役者一同大勉強にて興行
致候間旧に倍し御最層被成下賑々敷御来観之程
頻に奉願上候敬白

一月十五日 仲毛演芸場
御客様」

「御披露

私共儀是迄辻端道新演芸場（上の二階芝居）を
借受け営業致居候処今般都合に依り来十八日
（旧十二月十八日）より本演芸場（下の□芝居）
へ移転致し猶一層相励み興行致し候間相替らず
御最層被下続々御来観の程奉願上候也頓首敬白
但し来る旧十二月十九日昼の部は無賃
明治卅三年一月十三日 新演芸場役者中
四方の諸君」

先にも触れたが、前者の記事、本演芸場に入っ
ていた仲毛演芸場が新演芸場に移転したという広告を、
どう見るかという問題である。本演芸場と新演芸場
とは劇場名に違いない。それでは仲毛演芸場とは何
であろうか。大変なじまない呼び名ということになっ
てしまうだろうが、これは劇団名と見たほうがよい
のではないだろうか。このことは次に挙げる矯風会
の広告がヒントになりはしないだろうか。

「廿才以上四十才以下ノ内地人ニテ普通教育アル者

拾名募集ス望ノ方ハ来廿日迄ニ御来談アレ
那覇警察署西 矯風会新演劇創設部」

明治33年1月15・17・19日の3回にわたって「琉
球新報」に上のような広告が載った。「矯風会」と
いう名称から、既存の芝居を矯正・改革する、ある
いは沖縄人を退けて少なくとも普通教育を受けた内
地人のみで構成された新しい劇団を目指す、といっ
た意気込みが感じられる。

そして2月23・25・27日、3月1・3日の5回に
わたって下のような広告が琉球新報に載った。

「新演劇開演広告

芸題美人薄命探偵誉毎日午後六時より十一時迄
二月廿二日 仲毛演芸場跡 矯風会」

仲毛演芸場跡とはどういう意味であろうか。つま
り仲毛演芸場（劇場）には当時、仲毛演芸場（劇団）
は入っておらず、本演芸場から新演芸場へと再移転
していた。そしてこの空箱になった劇場で矯風会が
旗揚げしたという意味にとれないであろうか。

ついでに広告に見る矯風会の芸題についてである
が、池宮正治氏は「明治の演劇」（『沖縄県史』6文
化2、1975年、『琉球文学論』収録）の中で、矯風
会のこの芝居を「美人薄命探偵誉」の1作とみてい
るように読めるが、これは1作とみるよりも「美人
薄命」「探偵誉」の2作とみたほうがよいであろう。

垣花山人という人が琉球新報（3月13・15・17・
19・23日）で「矯風会の演劇を見る」と題して劇評
を寄せている。その内容からして上の広告にみる
「美人薄命」「探偵誉」とは別の芝居のように思える。
別の新作かもしれない。日清戦争に取材した芝居の
ようである。芝居のあらすじに加えて、役者の演技
に特に力点を置いた批評になっている。

とりたてて問題にするべきことは述べられていな
いが、ただ矯風会という演劇集団の興行のありかた
について推察できる記述がある。普通教育程度の学
歴を有した役者を集めているため、芝居のキャリア
はそれほどではないが、セリフを誤ることがない。
世相を反映した芝居を演じている。人員が少ないた

め、俳優が同時に道具係でもある。そのように一人で何役もこなしているの、色々と次の幕の準備に追われて、自然幕合いが長くなりがちであるが、その穴埋めとして「家庭と教育の関係」などといった演説を取り入れている。

「新軽業広告」

是迄の演芸よりは一層奇々妙々なる新しき軽業
を演じ御客様の御覧に供し候間相替らずお最
願の程奉願候也 仲毛演劇

これは4月29日の琉球新報の広告である。軽業師は西浜万治、その他数名であろう。それから約二カ月後に、好評だったということで、リバイバル公演が計画された。

「謹而広告」

先般当場に於て内地軽業数名雇入れ興行致させ
候処幸に各位方の御最願を蒙り賑々敷興行中の
処都合に依り一時首里演芸場へ雇はれ候ひしを
亦々当場へ立戻り従来の芸□委皆相改め更に今
般壮士風の演劇をも組織し既に髪形及立て道具
等も大阪より着致し来る七月三日より昼夜興行
致し候間何卒御最願賑々敷御来車あらんことを
偏に奉希候頓首

七月一日 風も涼しき辻端道の二階芝居
仲毛演芸場

各位様」

しかし、大阪から取り寄せたという芝居道具が実はまだ届いておらず、興行が18日に延期となる。

さて、この時の芸題は「覚悟之決心」「源平遺恨復讐」「軽業遊芸」である。8月3日付の琉球新報に載った浮世なにがしの劇評によると、「覚悟之決心」と「源平遺恨復讐」の2作は、幡随院長兵衛と神明前の喧嘩を取り交ぜて沖縄風にしたものだったという。

ちなみに、広告の中に「都合に依り一時首里演芸場へ雇はれ候」とあるが、彼らが雇われる前、首里演芸場ではどんな役者たちが興行していたのだろう

か。話が前後するが、垣花山人という人が「首里の演芸を見る」と題して、4月11日付の琉球新報に劇評を寄せている。「報恩配偶」「継母懺悔」「因縁邂逅」「老若婚禮」「軍人名誉」「組踊手水ノ縁」の6つを上演していたという。それが終わってから、入れ代わりで仲毛演芸場が首里演芸場に雇われたようである。

8月23日付の琉球新報に、注目すべき劇評が載せられた。浮世何某という人の「狂言作者に一言す」と題した劇評である。この時期の仲毛演芸場は、おそらく新演芸場に入っていたと思われる。中国小説に取材した「危難凌」という方言セリフ劇を上演していた。彼はそれを、外国の小説を無理に沖縄風に焼き直すから芝居の筋がおかしくなると評している。そして「本島の狂言なら北山の由来記採も大に趣味あるべし」と最後に締めくくっている。この批評が後に、渡嘉敷守良による方言セリフ劇「北山由来記」改め「今帰仁由来記」の誕生につながっていくのである。

参考文献

- ・琉球新報
- ・筆者不明「琉球見聞雑記」（『沖縄県史』第14巻雑纂1収録）
- ・渡嘉敷守良「舞踊に関する随想録」（改題「ある俳優の記録」、『沖縄の芸能』収録）
- ・真栄田勝朗『琉球芝居物語』（青磁社、1981年）
- ・池宮正治「明治の演劇」（『沖縄県史』第6巻・文化2、『琉球文学論』収録）
- ・池宮正治「沖縄芝居参上」（『新琉球史』近代・現代編収録、琉球新報社、1992年）

琉球王府の糖業規制・取締りについて（概観）

金城 功

1. はじめに

砂糖が琉球王府の財産面でいかに重要であったかは、『琉球館文書』中の次の文書でも明らかである。即ち、「砂糖之儀者 琉球統料ニ相成候物産ニ 而年々渡唐料銀諸上納銀其外借銀五千貫目余之利払館内諸遣料取合壺ヶ年ニ千貫目余之払方有之候処近年砂糖積船難船破船等有之届高少統料及不足追送ニ成来候付頃年者二三百貫又者及四五百貫借入候事 茂有之至極難決之砌候処……………琉球之儀者 専砂糖を以諸事取統申事ニ 而登方随分……………」とあり、王府の財政運用の上で砂糖が大きな役割を果たしていたことがわかる。

質の良い砂糖をある一定量を確保するために、琉球王府は糖業についての規制を行ない、それを守るために諸取締りを行っていたことは、これまで多くの研究者が論及しているところである。

小論では、琉球王府が糖業についてどのような規制を行っていたか、どういう取締りをしていたのか、概観することにした。糖業の規則等について鳥瞰し、問題の所在を明らかにし次なる研究に役だてたいと思っている。

2. 流通面についての規制等

儀間真常が中国から黒糖の製造技術を導入したが、1623（元和9）年であった。製糖業が当時すぐに受け入れられたかどうかの検討はおくとして、交易による利益が多く望めない状況下にあった当時としては、交易にかわる地元の産業をということもあり、糖業は浸透していったものと思う。

琉球にとって砂糖は大事な物産であり、交易品であった。琉球で製造された砂糖は薩摩の船頭との間で取引された。製造する側にとっては、確実に売れる物産であった。売れるからといって百姓達がすぐに製造できるものではなかった。製糖となると、甘蔗のそれなりの栽培が必要であり、また製糖の施設を負担しなければならないことになる。製糖に必要な条件をみtusことのできる人は、それなりの力を持っている人ということになる。そのような人とは、一般の百姓ではなく地頭衆ということになる。地頭衆は生活を支えるため、大和との公界のために資金が必要になり、それを砂糖の製造に進んで求めたようである。

琉球における製糖はそのような中で普及していったことになる。製造された砂糖は、薩摩の船頭との間で相対で取引がなされていたようである。

そのような状況下に出てきたのが、1652（承応1）年の砂糖等の王府専売ということであった。王府の借金返済の手段として考え出されたものであった。それは、當間親雲上重陳と古波蔵筑登之賀親の意見に基づくものであった。（樋口弘『日本糖業史』60ページ）

1623年に製糖技術が導入され、27、8か年後の1652年には王府としての借金返済のための専売品になるまでに製造量がのびていたものと思われる。砂糖が王府の専売品になると、困ったのがこれまで相対に取引をしていた薩摩の船頭達であった。そのために琉球王府に抵抗したという。薩摩の船頭と取引していた地頭衆はどうであったのか、と考えることもあるが、その動きを知ることのできる史料は今のところない。

相対で売買できたのが、王府による専売となり流通面での規制が加えられたことになる。それは糖業に対する王府の最初の規制であった。

砂糖が確実に売れ、利益をもたらすものとなると、王府も財政面からの視点で糖業を見るようになった。そのあらわれが買上糖制の実施であった、と考えられる。

雑穀類の租税と相殺されるようになっていた買上糖の制度がいつ実施されたのか明確でないというのが現状である。買上糖の制度が実施されるようになったのは、百姓が自分たちのために製糖するようになって後からだと考えている。専売制の実施よりかなり後のことだと思っている。その制によって百姓の手もとには砂糖がほとんど残らないようになった。

専売制や買上糖制の実施により、地頭衆や百姓の砂糖が琉球王府の管理下におかれ、唯一王府の手を経て薩摩方の手に渡った。はじめにのところでもみたように、王府が砂糖の流通をおさえていたことにより、王府はそれなりの利益をあげるようになった。

砂糖は租税の対象ではなく雑穀類にかかる租税と相殺するために買上げられ、時には米の代わりに納入を要求されることがあったが、1831（天保2）年に租税の一部を一定量の砂糖で納めるようになった。いわゆる貢糖と呼ばれている制度のはじまりである。75万斤から97万斤に増額された。琉球産の砂糖の流通の一角に薩摩側が入りこんで来たことになり、琉球王府はそれに抵抗し一時米納に戻ったが、結局薩摩側に押しきられ貢糖の制は琉球処分後まで存続することになった。

王府の専売制、買上糖の制度、あるいは貢糖の制度によって琉球で製造された砂糖は殆ど全部が王府に収納され薩摩等へと搬出されたことになる。

砂糖に対する大和船頭の執着があり、脇売りもおこなわれていたようである。王府は砂糖密売の取締りのため1731（享保16）年に砂糖密売に関する取締規則を設け、その取締りにあたっている。

3. 甘蔗の作付制限

王府の甘蔗作付制限・砂糖の生産制限は、最初に

地頭衆への規制となってあらわれた。前にもふれたように、意欲的に砂糖生産に取り組んだのは地頭衆であった。砂糖生産が利益につながることを知った地頭衆は甘蔗の作付けを地頭地以外にも行うようになった。即ち百姓地への植付けであった。1692（元禄5）年、王府は百姓地への甘蔗作付を百姓の食料生産計画に及ぼす影響が大きいとして禁止の旨を布達した。が、それでもなお百姓地への作付けがなされたとみえて、1697（元禄10）年には地頭衆に対する産糖高の制限を行った。そのことを甘蔗の作付制限と呼んで来たが、布達の文面からみる限りでは砂糖の生産制限といった方がよいと思う。生産制限をすると結果的には作付制限に結びつくので、1697年の布達を作付制限としたとも思えるが、それを作付制限と位置づけたのは、1888（明治21）年の県令の甘蔗作付制限の解除をもとにして仲吉朝助が最初に取り上げたのではないかと考えられる。

地頭衆への砂糖の生産制限は、1697年の布達があり、その確認はできるが、百姓自体への作付制限がどうなっていたのか、生産地域の規制がどうなっていたかについては今一つははっきりしない。

1882（明治15）年の県の調査によると、砂糖を製しているどの間切にも規制があったことがわかる。一例を示すと次の通りである。

◇真和志間切制度

御 届 真和志間切

旧藩中甘蔗坪数に制限有之其手続は地方厚薄見合坪に何合実と被定置取締方は挿付次第総耕作当にて一々竿入差過の分は抜捨てさせ左様で帳面製置田地方春廻勤の砌毎敷原字坪付番付等にて小札立置帳面引当勘定有之尤も兼て被定置候坪例にて不_{（候）}相出来_{（候）}所は其訳願書取仕立田地奉行奥印申請御物奉行方へ差出許可を得て例直仕たる事御座候右に拠すべき書類は及_{（候）}紛失_{（候）}申候此段御届仕候也

明治十五年十二月

総耕作当

新垣 萬仁

同

大嶺 全吉

島尻役所御中

(仲吉朝助編『糖業と旧慣諸制度』210ページ)

右の真和志間切の「御届」にあるように、甘蔗坪数に制限があったこと、甘蔗植付けた後総耕作当が一夕見てまわり植付け本数が多いと抜き捨てたことがわかる。地頭衆への制限以外に百姓への制限があったことになる。が、前にもふれたように、いつ制限がなされたかは不明である。百姓への作付制限と共に、地域規制(沖縄本島中南部と北部の一地域と伊江島に限定されていた)もあったというが、地域の制限が実施された経緯も明確でない。

小論「甘蔗作付制限についての考察」(『史料編集所紀要』第19号)の中で次の史料を利用して間切の産糖高を定めたのは、1758(宝暦8・乾隆23)年ではなかったかと論じた。その史料中の「入切高」ということばが間切への産糖高の制限に結びついているのではないかと理解している。

覚

砂糖雑くり 五百三十五丈六尺八寸

同ふたいた 百五十八丈四尺

同底板 百四十四丈

右は乾隆廿三年¹⁷⁵⁸入切高被召定置候処連々御所帯方御統方及御不足館内へも御物入打続御借銀相増御本済として諸間切へ砂糖焼重被仰付置候故入切高にて過半致不足年々手形を以納方申渡候付同五十七子年不足丈は一節仮入切被仰付置候処道光十寅年御国元より出物米直成替を以砂糖上納被仰付候故其以来右入切高にては及不足年々不図手形入を以納方申渡候処其通にては不締之儀も可致出来候付此節より本行之員数相重一節仮入切被仰付候条無親疎賦入納月限之儀は入切同前申渡候様収納奉行へ申渡置候間収納方可被申渡候 以上

亥正月(嘉永四年辛亥) 御物奉行

砂糖奉行

砂糖そのものを規制せず、砂糖を入れる樽の材料

の制限を申し渡している。何故なのかということになるが、ここに沖縄の置かれた状況を確認することができる。山林の保護とのかかわりを強く感じる。製糖に必要な燃料として、樽の材料としての樹木の伐採、圧搾器調製のための大木の切り倒しが、製糖の普及と共に盛んにおこなわれ、その結果は山林の荒廃へとつながることになり、王府としては頭をいためたのではないかと思う。樹木の伐採を増加させたのには、製糖以外に瓦焼きや住居の建築等が増えたこともあった。

1737(元文2・乾隆2)年「山奉行所規模帳」が評定所から布達された頃の琉球の山林の状況を「山奉行所規模帳」は、第一項で次のように記している。

一前々は中頭方之内北谷読谷山越来美里具志川五ヶ間切山よりも材木出為申事候処最早相絶仮屋材木をも達兼且又金武恩納名護本部今帰仁五ヶ間切山も頃年大木相絶候付当時大材木は羽地大宜味国頭久志四ヶ間切山より乍漸取出申鉢に候(以下略)

(立津春方『林政八書』19ページ)

中南部の山から必要な材木を出せる状況ではなかったようである。北部においても製糖がおこなわれていた金武、今帰仁、本部で中南部と同じ状態にあったことになる。

産糖高の制限を砂糖樽の材料を規制することで行なったことに、王府の山林保護の取り組みを見ることができる。今後は、砂糖の生産制限について考える際に山林保護との関わりからも光をあてる必要があるのではないかと思う。

1758(乾隆23)年の樽材の「入切高」が間切への砂糖制限に関係があるものと今のところ理解している。

4. 取締りについて

専売制、買上糖制の実施により、確実に砂糖が王府の手元に集められるようになったが、それでも脇売り即ち密売があったとみえて、王府はその取締り

に目をひかせていた。

1731（享保16）年に王府は砂糖密売に関する取締規則を設け、2年後の1733年にはその規則を改正し取締りにあたったようである。密売した者は一生流刑にするという厳しい罰則を設けていた。そのような規則が設けられていたということは、逆にいうと密売が行われていたということになるものと理解している。

砂糖は確実に売れ、しかも儲けになったようで大和船頭は専売の網の目をくぐって砂糖を密かに買っていたのではないかと推測できる。幕末になると、大和商人が砂糖前代でもって砂糖を手に入れ、王府が困ったという記録もあり、密売取締規則があっても協売りは存在していたことになる。

1860（万延1）年に、琉球王府の田地奉行は、12ヶ条に及ぶ製糖取締令を出して製糖についての取締りを実施している。品質の良い砂糖を製造し、高値で売ることのできる砂糖の製造をということで、砂糖製造にあたっての取締りをおこなっていた。

甘蔗の作村、栽培関係では甘蔗畑を見てまわり、制限以上に作付けされている甘蔗は引き抜いて処分

した、ということである。

原料である甘蔗の栽培から製造段階の取締り、そして製品である砂糖の流通面にいたるまで王府の規制の網がかかり、取締りが実施されていたことになる。

5. おわりに

琉球王府が糖業について、どのような規制、取締りを行っていたかについては、これまで多くの研究者が論及している。改めて小論で新しい研究成果を出した訳ではないが、糖業の規制について概観することで、何が分かり、何が分からないのかを確かめておきたかったためである。近世期琉球の糖業について研究をしていくためには必要な作業だと思いまとめてみた。

概観する中で、燃料としての樹木の消費と山林の保護とのかかわり、それに糖業がどうかかわるのか検討してみる価値があるのではないかとおもっている。

ささやかな愛知県岡崎市との交流

—— 志賀重昂を背景に ——

栗 国 恭 子

明治から大正にかけて活躍した地理学者、政治家の志賀重昂（しがしげたか）と沖縄の関わりは以外に長期にわたっています。

1995年2月に愛知県岡崎市の市議会議員の鈴木雅美氏、近藤隆志氏の両人が、愛知県岡崎市出身の志賀重昂と南島との関わりを調査するために、南大東島を中心とした視察で来県されました。また、来県の際に岡崎市の文化行政に郷土の文化、歴史を取り組む参考事例として、浦添市立図書館の中に沖縄学研究室が設置されていることに興味を示されての視察依頼がありました。

また両氏からは、岡崎市で所蔵されている琉球からの江戸上り関係資料『萍水奇賞』のコピー資料の寄贈がありました。

この資料は、1790（寛政2）年江戸上りの慶賀正使・宜野湾王子朝祥一行が、岡崎へ宿泊した際（帰1791年）に、地元の旅籠柏屋主人・金沢休と藩医・萩須親卿との漢詩を通して交流した内容をまとめて出版したものです。

当館で編集刊行している『浦添市立図書館紀要』に掲載された、志賀の所蔵していた沖縄関係扁額資料（1号：高良倉吉「新発見の冊封使資料（愛知県岡崎市）」）、志賀と沖縄との交流関係資料（5号：栗国恭子「国粹主義の周辺と沖縄—真境名安興の活動を中心に—」）の論文を紹介しました。また研究室で収集した志賀重昂関係の資料コピーを提供しました。

それから4ヵ月ほど経過した6月に、再度鈴木氏の訪問を受けることになりました。鈴木氏夫妻が中心となって編集されている岡崎市のタウン情報誌『リバーシブル』（6月号、通刊176号）の提供があ

りました。その中で、沖縄（南大東島）と志賀重昂の関わりが、特集記事「鳥島上陸人の安否如何—志賀重昂と南大東島」でとりあげられています。

志賀重昂と沖縄の関係はこれまで、近代史研究分野で断片的に取り上げられてきましたが、沖縄関係資料を整理した目録が示されていません。今回は、志賀重昂沖縄関係資料を目録の形で紹介します。

— 志賀重昂関係資料目録 —

沖縄学研究室所蔵の文献は◎、未所蔵資料は☆で表記。若干の内容説明を加えてあります。沖縄県立図書館史料編集室所蔵資料は、県立史、コピー資料は（複）で表します。

【志賀重昂著作論文及び関係記事】

1903（明治36）年

1月

☆「南鳥島と北太平洋問題」、『地学雑誌』第15集第169巻135頁～143頁、*県立史（複）

2月

☆「南鳥島と北太平洋問題（承前）」『地学雑誌』第15集第170巻

*明治36年7月にだされた『地学雑誌』第15集第175巻は鳥島の特集と大東島関係論文が掲載されている。（小瀬桂太郎「大東島探検記」等も収録）

*県立史（複）

8月

◎「実業上教育上より見たる対世界日本」『琉球教育』第85号

1905年（明治38）年

11月

◎琉球新報 13日（月）

- ・志賀重昂氏と本県

◎琉球新報 15日（水）

- ・尚家の晩餐会
- ・講演会

◎琉球新報 19日（日）

- ・松江丸乗組員の歓迎会
- ・将校以下の休息所
- ・帰還兵の歓迎
- ・尚家の凱旋軍人招待会

◎琉球新報 25日（土）

- ・久米島通信（11月24日）志賀矧川氏の来島
笑古（真境名安興）

◎琉球新報 27日（月）

- ・久米島通信（11月24日）志賀矧川氏の来島（続）
笑古（真境名安興）

◎琉球新報 11月29日（月）

- ・久米島通信（11月24日）志賀矧川氏の来島（続）
笑古（真境名安興）

◎琉球新報 12月1日（金）

- ・久米島通信（11月24日）志賀矧川氏の来島（続）
笑古（真境名安興）

◎琉球新報 11月29日（水）

- ・志賀、中川氏講演会 志賀氏の演説（承前）

12月

◎琉球新報 1日（金）

- ・志賀、中川氏講演会 志賀氏の演説（承続）

◎琉球新報 3日（日）

- ・志賀、中川氏講演会 志賀氏の演説（承続）

◎琉球新報 5日（火）

- ・志賀、中川氏講演会 志賀氏の演説（承続）

◎琉球新報 7日（木）

- ・志賀、中川氏講演会 志賀氏の演説（承続）

1906（明治39）年

2月

◎琉球新報 11日（日）

- ・県外名士の沖縄観（大阪毎日新聞掲載「大東島」

「琉球に学ぶべきもの」転載）

「琉球に学ぶべきもの（一）」

◎琉球新報 13日（火）

- ・県外名士の沖縄観（大阪毎日新聞掲載「大東島」
「琉球に学ぶべきもの」転載）

「琉球に学ぶべきもの（一の続き）」

◎琉球新報 15日（木）

- ・県外名士の沖縄観（大阪毎日新聞掲載「大東島」
「琉球に学ぶべきもの」転載）

「琉球に学ぶべきもの（二）」

◎琉球新報 23日（金）

- ・県外名士の沖縄観（大阪毎日新聞掲載「大東島」
「琉球に学ぶべきもの」転載）

「大東島（一）」

◎琉球新報 25日（日）

- ・県外名士の沖縄観（大阪毎日新聞掲載「大東島」
「琉球に学ぶべきもの」転載）

「大東島（二）」

☆「沖縄県の水産業」

『大日本水産会報』192号10頁～13頁

*上田不二夫氏（複）

10月

☆「琉球の話」

『歴史地理』2巻4号

*県立史（複）

1908（明治41）年

9月

◎琉球新報 15日（火）琉球新報社創立15周年記念号

- ・志賀重昂氏の書簡紹介記事

創立15周年記念に寄稿に関する手紙（9月2日付）

「貴社十五周年に付御寄稿申しべく御書面の處、
夏期中は各處に旅行頃日」

1909（明治42）年

4月

◎沖縄毎日新聞 13日（火）

- ・琉球の発達—ナポレオンを地下に驚倒せしむる
二新現象（沖縄青年会二十年記念会に於て）の

志賀の講演

◎沖縄毎日新聞 16日（金）

- ・琉球の発達－ナポレオンを地下に驚倒せしむる二新現象（二）（沖縄青年会二十年記念会に於て）の志賀の講演

◎沖縄毎日新聞 21日（水）

- ・琉球の発達－ナポレオンを地下に驚倒せしむる二新現象（二）（沖縄青年会二十年記念会に於て）の志賀の講演

1910（明治43）年

☆「艱苦欠乏」

『沖縄教育』第47号

1911（明治44）年

2月

◎沖縄毎日新聞 28日（水）

- ・琉球建築及史料保存の必要 志賀矧川

1912（大正元）年

☆『世界山水図説』 地理調査会編

* 県立図書館東恩納文庫

1923（大正12）年

2月

☆「東部水産の開発には沖縄漁民を入れよ」

『台湾水産雑誌』86号25頁～26頁

* 上田不二夫氏（複）

☆「沖縄の水産問題」

『台湾水産雑誌』86号60頁～62頁

* 上田不二夫氏（複）

3月

☆「沖縄節の改良問題」

『台湾水産雑誌』87号34頁～35頁

* 上田不二夫氏（複）

11月

☆「鹿児島及沖縄県下に於ける鯉節類調査報告書」

『水産講習所試験報告』19巻5冊、11月

* 上田不二夫氏（複）

1925（大正14）年

4月

◎琉球新報 14日（火）

- ・志賀重昂氏邸宅に「中山門」の扁額^{（額か）}（断片記事のため後半なし、以下□は不明）
－由緒ある首里の□□□思い寄らざる所□□－
首里市当局が「正殿保存」を機会に散在した市内の宝物を蒐集する旨は既報の通りであるがこれ等宝物の中には現在思いも寄らざる人々の手に帰しているものもあり、現に「中山門」の扁額が地理学者として有名な志賀重昂氏の邸宅に掲げられているといわれているがこれは知花朝章氏の首－（不明）－壊はした－（不明）－里小学校－（不明）であった－（不明）－本松－（不明）－た由であ－（不明）－無責任に－（不明）－ある由で－（不明）－戻そうと－（不明）－

1926（昭和元）年

4月

◎朝日新聞 28日（水）

- ・「パウロに優る苦難を忍んで琉球に福音を伝えた聖使徒の記念碑ゆかりの地の石を集めて礎に、この五月波之上で建碑式」
志賀重昂が来賓予定であるとの記事。

5月

◎沖縄朝日新聞 13日（木）

- ・志賀重昂氏、各校で講演（断片記事）

◎沖縄朝日新聞 19日（水）

- ・沖縄救済の要諦は人口問題の解決－盛んに海外に雄飛せよ、少額の助成金では焼石に水－

◎沖縄朝日新聞 20日（木）

- ・除幕式を終えて 先覚への責務果たしたブルー氏の感懐
志賀重昂参加記事及び日程。

◎沖縄朝日新聞 ?日

- ・清く挙行されたベッテルハイム記念碑除幕式
－集まった知名の来賓と感激に燃えた信徒たち－

【志賀重昂全集】

・『志賀重昂全集』 全8冊

1928(昭和3)年7月～1929(昭和4)年3月、
東京 志賀重昂全集刊行会

1巻 矧川論説集

2巻 歴史地理編

3巻 南洋時事

4巻 日本風景論

5巻 大役小志

6巻 大役小志

7巻 札幌在学日記(上)

8巻 札幌在学日記(下)

【その他の資料】

☆斉藤用之助宛て書簡(明治39年2月14日)

- ・島尻博物館斉藤用之助関係資料、上江洲均「久米島天后宮の聯」(『地域と文化No.8』、1981年、ひるぎ社)で紹介。

☆東恩納寛惇宛て書簡 4通

*県立図書館東恩納文庫

① 封書(大正15年5月3日)

(東恩納文庫資料2943の1)

- ・ベッテルハイム琉球上陸80年記念式典参加への日程報告。

② 封書(大正15年12月24日)

(同2943の2)

- ・甘藷試味立会開催のお知らせ。

③ 封書(大正15年)

(同2943の3)

ベッテルハイム略歴(印刷物)

④ 封書(?年)

(同2943の4)

中身なし

☆東恩納寛惇宛てはがき 11通

*県立図書館東恩納文庫

① 葉書(大正5年1月1日)

(東恩納文庫資料2997の1)

年賀状(印刷)

② 葉書(?年)

(同2997の2)

東洋文庫の所在の問い合わせ

③ 葉書(大正?年正月)

(同2997の3)

年賀状(印刷)

④ 葉書(大正?年12月28日)

(同2997の4)

- ・琉球芋試味会開催のお知らせ。

⑤ 葉書(大正14年12月14日)

(同2997の5)

『尚泰侯実録』、伯徳令の遺稿発行、横山健堂『薩摩と琉球』三点の出版等について。

⑥ 葉書(大正15年4月)

(同2997の6)

⑦ 葉書(大正15年4月4日)

(同2997の7)

- ・ベッテルハイム琉球上陸80年記念の出版に関して(琉球訳聖書関係)。

⑧ 葉書(大正14年正月)

(同2997の8)

年賀状(印刷)

⑨ 葉書(大正14年5月30日)

(同2997の9)

「琉球人名考」寄贈のお礼、
「海兵団の銃体教練」の写真葉書。

⑩ 葉書(大正15年11月30日)

(同2997の10)

『明治維新前の琉球』寄贈へのお礼。

⑪ 葉書(?年12月7日)

(同2997の11)

「長岡公会堂全景」の写真葉書。
薩摩芋・大東島の関連内容。

【関係論文資料】

◎真境名安興「東恩納寛惇宛書簡 1926(大正15)年5月19日付」

『真境名安興全集第4巻』388頁、琉球新報社

◎我部政男「日本の縮図・＜沖縄＞論」

『沖縄タイムス・唐獅子』1974年12月21日初掲載

- 『沖縄史科学の方法－近代日本の指標と周辺－』
213頁～214頁、1988年、新泉社
- ◎「志賀重昂、菊池幽芳の久米島訪問記－志賀氏の『南航日記』から－」
仲里村誌編集委員会編『仲里村誌』 83頁～85頁
(87頁～88頁に内容解説)、1975(昭和50)年、
仲里村役場
- ◎新城安善「沖縄研究の書誌とその背景」
『沖縄県史 第6巻各論編5 文化下』1975年
- ◎高良倉吉「志賀重昂と沖縄」
『沖縄タイムス』1980年2月2日～3日初掲載。
『沖縄歴史への視点』収録、140頁～145頁、1981
年、沖縄タイムス社
- ◎上江洲均「久米島天后宮の聯」
『地域と文化No8』1981年、ひるぎ社
- ◎栗国恭子「国粹主義の周辺と沖縄－真境名安興の
活動を中心に－」
『浦添市立図書館紀要No5』58頁～70頁 1993年、
浦添市教育委員会

- ◎鈴木雅美「鳥島上陸人の安否如何－志賀重昂と南
大東島」
『リバーシブル』No176、1995年、リバーシブル編
集室(在：岡崎市)

【志賀重昂収集の沖縄資料関係】

- ◎高良倉吉「新発見の冊封使資料(愛知県岡崎市)」
『浦添市立図書館紀要No1』グラビア、1989年、
浦添市教育委員会
- ◎上江洲均「久米島天后宮の聯」
『地域と文化No8』1981年、ひるぎ社

【浦添市立図書館所蔵の志賀重昂著作資料】

- ◎『日本風景論』
- ◎『近代論集－志賀重昂－』
- ◎『世界山水図説』
1912(明治45)年3月28日10版、富山房、
*コピー、志賀本人の署名入、資料提供：新城栄
徳氏。

『仲西村の沿革誌』（増補本）外間 太和 著

仲西村は、『おもろさうし』や『琉球国由来記』『琉球国旧記』などの近世史料に記される村名で、浦添のなかでも古い村落のひとつに数えられる。前記の史料は1623から1731年の間の事項が記録されるが、この時点では「仲西村」は「中西」が宛字されている。その後の史料では、現在の「仲西」と表記された。

さらに、首里王府修史の『球陽』によると、1767年に小湾川沿いの居住区が風水見立てのうえで、悪い所なので、村域の外間門原に移動したことが述べられている。以後、仲西村の中心地として、現在に至る。

外間氏は明治33年に仲西で生まれ、大正13年に上阪し、約60年近く県外で生活された方である。『仲西村の沿革誌』は、前記の史料などに記録される拝所と神女による祭祀儀礼のことを拾い挙げ、さらに、著者自身の大正13年頃までの青年期の記憶を基に、帰沖後の聞き取りを文献資料との比較を行いながら、年中行事や伝説、仲西出身の人物伝、戦前・戦後の仲西の民俗習慣などをも述べている。著者自身の「仲西村の文化誌」として纏められている。

著者の外間氏がこの本を刊行する（1989年発行）以前、86年頃に当時の文化課浦添市史編集室に原稿（大学ノート）を持参し、コピーの提供がなされたことがある。編集室での刊行を意図したが諸々の事情で頓挫してしまい、結果的には外間氏個人による出版となってしまった。

1989年8月に発行された初版本（110ページ・A5判）と、同年10月発行の増補本（118ページ）とは、その内容に大きな違いがあるわけではない。後者により多くの写真・スケッチ画が挿入され、項目名の変更、文章の一部削除、さらに新しく別立てされた項目などが数カ所あるだけである。情報としては当然に増補本がすこし豊かになっている。

現在、浦添市における字誌や自分史づくりは、それほど盛んではない。掲げるに、『内間字誌』（1981

年）・『なかま誌』（1991年）・『牧港字誌』（1995年）・『小湾字誌』（1995年）・『島やかちゆし』（1984年）を数えるのみである。本書同様に、自費による字（部落）誌刊行に、字城間の民俗をまとめた『島やかちゆし』がある。他は編集委員会が字自治会で組織、予算が組まれ多くの執筆者陣を抱えての出版である。本書刊行の経緯を考えると、字や市当局の消極的な対応が悔やまれる。浦添市の民俗調査の際、本書発行以前にそのコピー資料が、大いに活かされたことはいうまでもない。

沿革誌の内容概略は次のとおりである。

①村の成り立ち ②各所祭祀 ③葬祭 ④年中行事 ⑤仲西にかかわる人物評伝 ⑥伝説・わらべ歌などである。

特に注目される記述は各所祭祀である。その中で興味がひかれるのが「仲西の殿小」の挿絵である。解説によると稲麦四祭（ウマチー）の前日に殿小（トゥングラー）の香炉の前に青竹を2本東西に離し立て、その間に注連縄を張ってあった、と記録している。民俗地理学者・仲松弥秀氏によると、ティダ（太陽）ガ穴を象ったアーチ門で、神々はこの門を通して村人の前に出現するのであるという。仲間・前田両村の浦添城内の殿前でのウマチーを執り行なう前日も同様な門が作られ、ノロ（祝女）らによって拝みがなされたことが、伝承されている（『浦添市史』）。明治25年頃の雨乞行事では、仲西ノロ殿内の神アサギ・庭でウスデーク（臼小太鼓）を打ちながら、「雨乞のおもろ」を詠唱していたことや、かつて八月十五夜に「北の松金」なる組踊りが仲西の村芝居で演じられ、その脚本を太和氏の父が保管していたこと、さらに人物評伝では、又吉喜戸と宮古島人頭税廃止運動に関わった中村十作との交流談などが列記される。

聞き取りや体験を軸に、80歳あまりの古老お一人による1部落についての諸々の記述とはいえ、本書は浦添市の歴史・民俗を知り得る貴重な文献となっている。

初版本・増補本ともに浦添市立図書館沖縄学研究室に所蔵。

＜長間安彦＞

『琉球王国評定所文書』既刊分の紹介

■『琉球王国評定所文書』第11巻

※1995年3月発行 ※口絵8頁、本文518頁、総604頁

※市販定価 4,120円（消費税込み）

☐発刊のあいさつ 浦添市教育委員会委員長 福山朝秀

☐目次 ☐凡例

〔巻頭論考〕ロバート・バウン号事件再考

— 東アジア国際秩序再編の一契機として — …… 西里喜行

1 仏船来着并仏人逗留付而之日記（咸豊5年）

※1533号 ※解題・里井洋一

2 仏船三艘来着付那覇ニ而之日記（咸豊5年）

※1534号 ※解題・田名真之

3 仏船来着成行守衛方江御届申上候扣（咸豊5年）

※1535号 ※解題・豊見山和行

4 年中各月日記（咸豊6年）

※1540号 ※解題・高良倉吉

5 標題のみ（8件）

☐編集委員名等

『琉球王国評定所文書』発行予定分の紹介

■『琉球王国評定所文書』第12巻

※1996年3月発行予定

☐発刊のあいさつ 浦添市教育委員会委員長 福山朝秀

☐目次 ☐凡例

〔巻頭論考〕（題未定）…… 真栄平房昭

1 年中各月日記〔帳当座〕（咸豊6年）

※1541号 ※解題・金城 功

2 案書（咸豊6年）

※1542号 ※解題・徳元 剛

3 異国御用掛日記（咸豊6年）

※1547号 ※解題・恩河 尚

4 亜船来着ニ付守衛方江御届申上候写（咸豊6年）

※1548号 ※解題・西里喜行

5 標題のみ（5件）

☐編集委員名等

沖縄学研究室寄贈受付図書資料

【1993年度～94年度前半期】

※但し、雑誌・抜刷物・要覧・宣伝小冊子などは除外した。

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
1993. 5. 11	世界の島嶼研究と沖縄の役割＜沖縄問題研究シリーズ第118号＞	財団法人沖縄協会
"	えとのす 第9号 隼人の国と黒潮の島々	浦添市立図書館資料係
"	崩御昭和天皇・激動87年のご生涯のすべて＜毎日グラフ緊急増刊＞	安仁屋真現（浦添市）
"	台湾地区現存碑碣図誌 台南市（上）篇	国立中央図書館台湾分館
"	台湾地区現存碑碣図誌 台南市（下）篇	"
"	地域と文化 第75号	ひるぎ社
"	年報 No. 3＜平成元年度＞	沖縄市立郷土博物館
"	館報 第2号＜1990年度＞	ひめゆり平和祈念資料館
"	資料館だより 第2号 1991・6・9	"
"	第89回九州医師会医学会講演集	沖縄県医師会
"	西郷隆盛の詩魂	古謝 安子（佐敷町）
"	鹿児島ふるさと歴史散歩	"
"	沖縄国際大学文学部紀要＜国文篇＞第21巻第1号・通巻第33号	沖縄国際大学文学部
"	日本女性生活史 第2巻中世	豊見山和行（那覇市）
"	商経論集 第21巻第1号 No.36	沖縄国際大学商経学部
"	アメリカ文明と地域の役割＜琉球大学アメリカ研究大会論文集＞	琉球大学アメリカ研究会
"	資料館だより 第16号＜沖縄県立平和祈念資料館＞	沖縄県立平和祈念資料館
"	久米村 歴史と人物	高良 倉吉（那覇市）
"	あやみや 創刊号	沖縄市立郷土博物館
6月11日	南島文化 創刊号	沖縄国際大学南島文化研究所
"	南島文化 第2号	"
"	南島文化 第8号	"
"	南島文化 第9号	"
"	南島文化 第10号	"
"	南島文化 第11号	"
"	南島文化 第14号	"
"	波照間島調査報告書＜地域研究シリーズNo. 3＞	"
"	伊良部島調査報告書＜地域研究シリーズNo. 4＞	"
"	徳之島調査報告書(3)＜地域研究シリーズNo. 8＞	"
"	徳之島調査報告書(4)＜地域研究シリーズNo. 9＞	"
"	鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書(2)＜地域研究シリーズNo. 11＞	"
"	鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書(5)＜地域研究シリーズNo. 14＞	"
"	宮古下地町調査報告書(1)＜地域研究シリーズNo. 15＞	"
"	宮古下地町調査報告書(3)＜地域研究シリーズNo. 17＞	"

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
6月11日	沖縄地方の天気のことわざ<金武湾・中城湾周辺>	金武中城港海難防止会
"	南西地域研究資料センター報告 No.50	鹿児島大学南西地域研究資料センター
"	中城村史 第三巻資料編2(教育・文化・考古・雑纂)	中城村役場
"	沖縄県史料 八重山郡島議会記録 戦後4	沖縄県立図書館史料編集室
"	美里村誌	福村 光敏(嘉手納町)
"	史料編集室紀要 第18号	沖縄県立図書館史料編集室
"	第四回琉中歴史関係国際学術会議 琉中歴史関係論文集	高良 倉吉(那覇市)
"	地域文化研究 8 <地域文化研究所紀要>	梅光女学院大学
"	ふるさと物語 付・中国紀行	青山 洋二(沖縄市)
"	おきなわ 村の伝説	"
"	農業と生活 池原・登川・知花	沖縄市経済部農林水産課
"	琉球の方言 17 1992年度	法政大学沖縄文化研究所
"	嘉手納の先人たち	嘉手納町教育委員会
"	なきじん研究 3 <今帰仁の歴史>	今帰仁村歴史資料館準備室
"	平成2年度 こども博物館集録	沖縄市立郷土博物館
"	子ども文化学研究 第1号	中京女子大学
"	年報 No.4 <平成2年>	沖縄市立郷土博物館
"	道光七丁亥年科人手形写与与那国島[]写(複写製本)	沖縄県警察庁
"	未年怪我帳 (複写製本)	"
"	科人公事帳 (複写製本)	"
"	八重山島小与座公事帳 (複写製本)	"
"	聞得大君御新下日記 (複写製本)	"
"	取調書 (複写製本)	"
6月17日	九州文化史研究所紀要 第38号	九州大学文学部
6月27日	創立百周年記念誌 多良間小学校	多良間小学校
"	笠利町立歴史民俗資料館々報 第10号<平成4年度>	笠利町立歴史民俗資料館
"	沖大経済論叢 第16号第2号・通巻41号	沖縄大学経済学会
"	沖縄短大論叢 第7号第1号・通巻8号	沖縄短期大学
"	平良市総合博物館年報No.3<平成4年度>	平良市総合博物館
"	自治おきなわ No.334 1993・5月号	沖縄マイクロ・センター
"	石垣市史叢書4<進貢・接貢船、唐人通船、朝鮮人乗船、日本他 領人乗船、各漂流并破船之時、八重山島在番役々勤職帳、他>	石垣市総務部市史編集室
"	石垣市史叢書5<翁長親方・富川親方、両八重山島蔵元公事帳>	"
"	石垣市史のひろば 第18号	"
"	琉球のパイオニア・浪漫は海を越えて	琉球銀行本店
"	孤島苦の琉球史(初版)	濱元 哲文(豊見城村)
"	公式ガイドブック・ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
"	都市計画区域内施設調査報告書 沖縄県浦添市	浦添市都市計画課
"	浦添の都市景観(第9回都市景観賞表彰式・まちづくり基調講演)	"

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
6月27日	国道58号沿道牧港地区地区計画	浦添市都市計画課
"	浦添市安波茶地区植生調査報告書	"
"	浦添市小湾地区城間地区植生調査報告書	"
"	浦添の都市計画<平成5年度>	"
"	浦添の都市景観<平成4年度>	"
"	浦添市都市景観形成基本計画<昭和63年>	"
"	地区景観ガイドプラン(都市景観形成モデル都市重点地区)	"
"	紺碧とともに<沖縄県酒造組合10周年記念誌>	沖縄県酒造協同組合
6月29日	未公開作品による琉球王朝の書画	観宝堂
7月9日	占領27年為政者たちの証言<おきなわ文庫65>	ひるぎ社
"	波瀾の琉球王朝・南洋王国に迫る嵐	三谷茉沙夫(東京都)
"	南海の王国 琉球の世紀	高良 倉吉(那覇市)
7月14日	沖縄県立博物館紀要第19号	沖縄県立博物館
"	那覇地方検察庁沿革誌	那覇地方検察庁
"	具志川市史だより 4・5合併号	具志川市史編さん室
8月5日	那覇学童疎開体験座談会	那覇市企画部市史編集係
"	特別展 沖縄の川と生きもの	沖縄県立博物館
"	那覇市史だより 第40号	那覇市企画部市史編集係
"	那覇市史だより 第42号	"
"	那覇市史だより 第41号	"
"	浦添市の社会教育<平成4年度>	浦添市教育委員会
"	沖縄芸術の科学 第6号	沖縄県立芸術大学
"	芭蕉布と平良敏子	沖縄県立博物館
"	歴代寶案 校訂本第三冊(第2集目録・巻1~14)	沖縄県立図書館史料編集室
8月17日	大正・昭和戦前の具志川を語る<具志川市史編集資料2>	具志川市史編さん室
"	具志川市史 第2巻 新聞集成(大正・昭和戦前編)	"
"	すくみち 第29号	今帰仁村歴史資料館準備室
"	高嶺古島遺跡<豊見城村文化財調査報告書第4集>	豊見城村教育委員会
"	豊見城村の文化財<平成2年度>	"
"	浦添市美術館紀要 第2号	浦添市美術館
"	南島文化 第14号	沖縄国際大学南島文化研究所
"	宮古下地町調査報告書(4)<地域研究シリーズ№18>	"
"	多良間島調査報告書(1)<地域研究シリーズ№19>	"
"	浦添市の歴史散歩	浦添市教育委員会文化課
"	写真誌・ばいぬしまじま<竹富町史別巻3>	竹富町史編集室
8月25日	沖縄生物教育研究会誌 第24号	沖縄生物教育研究会
"	沖縄の三線<沖縄県文化財調査報告書第110集>	沖縄県教育委員会
"	文化課紀要 第9号	沖縄県教育庁文化課
"	地域と文化 77・78合併号	ひるぎ社

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
9月3日	写真集 多良間島の八月踊り	多良間村役場
"	早稲田大学大学院文学研究科紀要 第38輯 哲学・史学編	紙屋 敦之（東京都）
"	第1回先島文化交流会議報告書	仲宗根将二（平良市）
"	第2回先島文化交流会議 テーマ・祭祀儀礼	"
10月12日	民俗文化 第359号	滋賀民俗学会
"	民俗文化 第360号	"
"	文化ジャーナル鹿児島 No.39 1993・9・10日号	比嘉美津子（浦添市）
"	尚家本「おもろさうし」＜沖縄研究資料14＞	法政大学沖縄文化研究所
"	与野の歴史	与野市史編さん室
"	沖縄県警察史 第2巻	沖縄県警察本部
"	沖縄ことばの散歩道＜おきなわ文庫66＞	ひるぎ社
"	沖縄大学紀要 第10号通巻第30巻	沖縄大学教養部
"	宮古上布 その沿革と技術技法	宮古織物事業組合
"	渡辺家史料目録 1993年＜柳川古文書館史料目録第6集＞	九州歴史資料館分館柳川古文書館
"	名護市の歴史碑をめぐる1＜ふるさと探訪2＞	名護市史編さん室
"	屋我地の歴史をあるく＜第4回ふるさと探訪＞	"
"	屋部の歴史をあるく＜第5回ふるさと探訪＞	"
"	関西のウチナーチュ・やまとの群星＜名護市史研究資料77＞	"
"	名護・山原の歌謡目録1＜名護市史研究資料73＞	"
"	戦後新聞記事目録第1集（琉球新報）昭和20～昭和30年	"
"	戦後新聞記事目録第2集（琉球新報）昭和31～昭和35年	"
"	大熊（正）家文書目録＜収蔵文書目録第32集＞	埼玉県立文書館
"	埼玉県行政文書総目録第5集（昭和53～昭和55年度完結文書）	"
11月5日	地域と文化 第79号	ひるぎ社
"	広島県立文書館事業年報 第4号＜平成4年度＞	広島県立文書館
"	広島県立文書館だより 第3号	"
"	川内市歴史資料館年報＜平成3年度＞	川内市歴史資料館
"	写真集 激動・読谷村民戦後の歩み	読谷村史編集室
"	琉球王朝の美 彦根城博物館	高良 倉吉（那覇市）
"	びぶろお VOL.26 No.3 創刊100号記念号	琉球大学附属図書館
"	宮平が語る沖縄戦＜南風原町沖縄戦戦災調査7＞	南風原町教育委員会
"	山城文盛寄贈資料・生まれじまの記＜具志川市史編集資料4＞	具志川市史編さん室
"	中頭郡具志川市小学校創立五十周年記念誌＜復刻＞	"
"	山梨学院大学「法学論集」26	我部 政男（山梨県）
"	西郷南州顕彰会賛助会員名簿（追加1）	社団法人西郷南州顕彰会
"	詳説・西郷隆盛年譜	"
"	敬天愛人 第11号	"
11月17日	沖縄写真帖・第一輯＜初版＞	元山 良満（鹿児島県）
12月9日	清代中流関係档案選編	財団法人おきぎんふるさと振興基金

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
12月9日	劇画・島燃ゆ 宮古島人頭税物語	宮古広域圏事務局組合
"	沖縄の農林業発展の条件・21世紀への展望<琉球大学放送公開講座16>	琉球大学公開講座委員会
"	復帰20年、沖縄はどう変わったか<琉球大学放送公開講座17>	"
"	首里城 Architectural Manual	社団法人沖縄県建築士会
"	民俗文化 第362号	滋賀民俗学会
"	藤原鎌足公 (新屋敷幸繁著)	岸 秋正(東京都)
"	史学 第5巻第3号 <大正15年7月>	"
"	資料館だより No.27<読谷村立歴史民俗資料館>	読谷村立歴史民俗資料館
"	読谷村立歴史民俗資料館年報 第17号	"
"	読谷村立歴史民俗資料館紀要 第18号	"
"	平和の炎 No.16 第6回読谷村平和創造展	読谷村総務部
12月24日	沖縄の神々と祭	安仁屋真現(浦添市)
"	祭祀空間の構造	"
"	鹿児島島の民俗文化	"
"	道之島紀行	"
"	ヤマト文化と琉球文化	"
"	高度情報社会と沖縄の未来デザイン<沖縄問題研究シリーズ第123号>	社団法人沖縄協会
1994.1.23	地域と文化 第80号	ひるぎ社
"	農林健児 沖縄戦を生き抜いて	知念 正喜(沖縄市)
"	「成形図説」の甘藷<さつまいも史料1>	小野まさ子(浦添市)
"	経済天気図 No.230	沖縄銀行
"	すくみち 第30号	今帰仁村歴史資料館準備室
"	シマおこしの構造<おきなわ文庫67>	ひるぎ社
"	比嘉昇歌文集 太陽子の街・浦添市と歩んだ12年	比嘉江美子(浦添市)
"	沖縄文化研究 20	法政大学沖縄文化研究所
"	鹿児島県史料 旧記雑録捨遣家わけ四	鹿児島県歴史資料センター黎明館
"	混効験集 乾坤 評定所	池宮 正治(北谷町)
"	沖大経済論叢 第17巻第1号・通巻42号	沖縄大学経済学会
"	勝連町の遺跡・遺跡詳細分布調査報告<勝連町の文化財第17集>	勝連町教育委員会
"	新沖縄県史だより 第1号	沖縄県立図書館史料編集室
2月16日	沖縄の保健婦たち<おきなわ文庫68>	ひるぎ社
"	官報綴(沖縄の復帰に伴う関係法令等)	浦添市総務課
"	さつま日光・花尾神社	高良 倉吉(那覇市)
"	夢万年・聖獣伝説	(株)オリオン・ビール
"	琉大経済研究 第46号	琉球大学法文学部
"	地域文化研究所通信 No.18	梅光女学院大学
"	民俗文化 第363号	滋賀民俗学会
"	民俗文化 第364号	"
"	沖縄開発庁二十年史	沖縄開発庁

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
2月16日	歴代寶案 校訂本第四冊(第2集目録・巻15~30)	沖縄県立図書館史料編集室
"	第1回琉球中国交流史に関するシンポジウム論文集	"
"	歴代宝案研究 3・4合併号	"
"	第15回南島文化市民講座	宜野湾市
"	琉球之風 壹 疾風之巻<実用歴史65>	陳 舜臣(兵庫県)
"	旋風児・小説鄭成功 貳 波滔之巻<実用歴史70>	"
"	地域と文化 第81号	ひるぎ社
"	資料館だより 第17号<沖縄県立平和祈念資料館>	沖縄県立平和祈念資料館
"	資料館だより 第18号<沖縄県立平和祈念資料館>	"
"	南西地域研究資料センター報告 No.51	鹿児島大学南西地域研究資料センター
"	鹿児島県史料 玉里島津家史料三	鹿児島県歴史資料センター黎明館
"	薩摩蔭絵巻 儒者泊如竹の生涯	屋久町教育委員会
"	歴史が波うつ港町 防津	栗国 恭子(浦添市)
"	防津町の文化財	防津町教育委員会
"	玉里文庫漢籍分類目録	高津 孝(鹿児島県)
"	屋久町郷土誌 第1巻 村落誌・上	屋久町教育委員会
"	屋久島の地名考	"
"	屋久島の昆虫相	"
"	横峰遺跡<屋久町埋蔵文化財調査報告書1>	"
"	屋久町の民具<屋久町民俗文化財調査報告書1>	"
"	屋久町の民俗<屋久町民俗文化財調査報告書2>	"
"	屋久町の民俗Ⅱ<屋久町民俗文化財調査報告書3>	"
"	知覧町の民具<知覧町民俗資料調査報告書1>	知覧町教育委員会
"	知覧町の民俗<知覧町民俗資料調査報告書2>	"
"	知覧町農漁村の民俗と技術伝承<知覧町民俗資料調査報告書3>	"
"	知覧麓の武家屋敷群<伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書>	"
"	南別府城跡(城山遺跡)<知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第4集>	"
"	奄美学術調査記念論文集<南日本文化研究所叢書18>	鹿児島短期大学付属南日本文化研究所
"	南日本文化研究所ガイドブック	"
"	南日本文化 第26号 <1992年度調査報告書>	"
"	薩琉文化 第43号	"
"	薩琉文化 第44号	"
"	薩琉文化 第45号	"
4月5日	十島村文化財調査報告書 第1集	十島村教育委員会
"	十島村文化財調査報告書 第2集	"
"	十島村文化財調査報告書 第3集	"
"	十島村文化財調査報告書 第4集	"
"	地域文化研究 9 <地域文化研究所紀要>	梅光女学院大学
"	資料館だより 第18号<沖縄県立平和祈念資料館>	沖縄県立平和祈念資料館

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
4月5日	資料館だより 第19号<沖縄県立平和祈念資料館>	沖縄県立平和祈念資料館
"	那覇市史だより 第43号	那覇市文化局歴史資料室
"	経済と社会 第10号	沖縄経済学会
"	漢那ウェーヌアタイ遺跡<宜野座村乃文化財9>	宜野座村教育委員会
"	漢那福地川水田遺跡発掘調査報告書・グーヌ地区<宜野座村乃文化財10>	"
"	漢那福地川水田遺跡発掘調査報告書・ユマビチャー地区<宜野座村乃文化財11>	"
"	松田区の地名調査報告書<宜野座村乃文化財3>	"
"	字宜野座の地名調査報告書<宜野座村乃文化財5>	"
"	クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書<宜野座村乃文化財6>	"
"	宜野座の京太郎<宜野座村乃文化財8>	"
"	宜野座の文化財分布地図	"
"	前原第2遺跡・E地点発掘調査報告書<宜野座村乃文化財12>	"
"	宜野座村字松田(古知屋)の組踊集・翻刻集<宜野座村乃文化財7>	"
"	宜野座村字松田(古知屋)の組踊集・影印本<宜野座村乃文化財7>	"
"	あしびなゝ 第6号<伊江島特集>	沖縄県地域史協議会
"	山城文盛寄贈資料・生まれじまの記<具志川市史編集資料4>	具志川市史編さん室
"	羽地の民話<名護市史叢書14>	名護市教育委員会
"	ピトゥと名護人・沖縄県名護のイルカ漁	名護博物館
"	移動展・特別展実施報告書	沖縄県立平和祈念資料館
"	宮城真治・折口信夫関係ノート<宮城真治資料7>	名護市史編さん室
4月13日	黎明館開館10周年記念シンポ「南九州の地域性と文化を語る」	池宮 正治(北谷町)
"	中国結<Traditional Chinese Culture in Taiwan 22>	中琉文化経済協会駐琉球弁事処
"	景泰藍<Traditional Chinese Culture in Taiwan 23>	"
"	刺繍<Traditional Chinese Culture in Taiwan 25>	"
"	書画的歴史<Traditional Chinese Culture in Taiwan 28>	"
"	皮影戯及偶戯<Traditional Chinese Culture in Taiwan 30>	"
"	屋久島<鹿児島大学南西地域研究資料センター報告特別号第5号>	鹿児島大学南西地域研究資料センター
"	笠沙町の民具<笠沙町民俗文化財調査報告書1>	笠沙町教育委員会
"	笠沙町の民俗・上巻<笠沙町民俗文化財調査報告書2>	"
"	笠沙町の民俗・下巻<笠沙町民俗文化財調査報告書3>	"
"	山口図書館新収図書目録 59 平成3年4月~平成4年3月	山口県立山口図書館
"	岩手県内出版物総目録<平成4年版>	岩手県立図書館
"	千葉県の図書館<平成5年度>	千葉県立中央図書館
"	作家原田種夫・原田種夫文庫目録	福岡市民図書館
"	民俗学の祖・菅江真澄とふるさと展(展示資料目録)	豊橋市教育委員会
"	久米島具志川村の文化財	具志川村教育委員会
"	清水貝塚発掘調査報告書<具志川村文化財調査報告書第1集>	"
"	キリスト教文化研究所年報 第27号	宮城学院女子大学
"	平和の礎 シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦IV	平和祈念事業特別基金

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
4月13日	平和の礎 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅳ	平和祈念事業特別基金
〃	平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅳ	〃
〃	沖縄大学地域研究所々報 No.8	沖縄大学地域研究所
〃	沖縄大学地域研究所年報 No.5	〃
〃	沖縄の歴史・地理条件と文化振興開発<沖縄問題研究シリーズ第124号>	財団法人沖縄協会
〃	伊志嶺隆遺作集	那覇市文化局歴史資料室
〃	那覇市史だより 第44号	〃
〃	那覇市史 資料篇第1巻11<琉球資料・下>	〃
4月28日	大河ドラマ 琉球の風 第1回・海の王国（脚本）	小野まさ子（具志川市）
〃	大河ドラマ 琉球の風 第2回・遼かなる故国（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第3回・父子の再会（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第4回・若夏の恋（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第5回・南海の密約（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第6回・愛の女たち（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第7回・大漂流（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第8回・受難（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第10回・女たちの戦い（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第11回・父子の悲劇（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第12回・侵攻前夜の宴（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第13回・首里城明け渡し（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第14回・薩摩連行（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第15回・江戸上り（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第16回・父の愛（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第17回・命どろ宝（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第18回・啓泰の結婚（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第19回・生みの親育ての親（脚本）	〃
〃	大河ドラマ 琉球の風 第20回・羽儀の死（脚本）	〃
〃	冲大法学 第14号	沖縄大学法学会
〃	冲大法学 第15号	〃
〃	沖縄大学紀要 第11号・通巻31号	沖縄大学教養部
〃	沖縄短大論叢 第8巻第1号・通巻9号	沖縄大学短期大学部
〃	たらまじまの八月おどり	東恩納よし子（浦添市）
〃	びぶろお VOL.27 No.1	琉球大学付属図書館
〃	びぶろお VOL.27 No.2	〃
〃	資料館だより 第20号<沖縄県立平和祈念資料館>	沖縄県立平和祈念資料館
〃	資料館だより 第21号<沖縄県立平和祈念資料館>	〃
〃	琉清後援会報 第6号	末吉 ゆり（西原町）
〃	地域と文化 第82号	ひるぎ社
〃	新沖縄県史だより 第2号	沖縄県立図書館史料編集室

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
4月28日	新沖縄県史編集に関する基本計画	沖縄県立図書館史料編集室
"	官報 資料版 No.1851	内閣総理大臣官房広報室
"	官報 資料版 No.1852	"
"	移住研究 No.31<業務資料No.882>	国際協力事業団
"	沖縄県立博物館年報 No.23	沖縄県立博物館
"	平成4年度・新収蔵品展	"
"	まちづくり No.2	財団法人区画整理促進機構
"	まちづくり No.4	"
"	まちづくり No.7	"
6月1日	あやみや 第2号	沖縄市立郷土博物館
"	こども博物館集録<平成5年度>	"
"	佐喜真興英・誕生百年記念事業報告書	宜野湾市教育委員会
"	検証6.23 障害者の沖縄戦	南風原文化センター
"	津嘉山大綱曳き調査報告書	南風原町教育委員会
"	なきじん研究 4 <すくみち第17号～第25号>	今帰仁村歴史資料館準備室
"	ピトゥと名護人・沖縄県名護のイルカ漁	名護博物館
"	ぶりでい<名護博物館年報第9号>	"
"	ぶりでい子ども博物館<平成5年度>	"
"	海外に雄飛した三兄弟の軌跡<具志川市史編集資料5>	具志川市史編さん室
"	具志川市史だより 第6・7合併号	"
"	羽地地区の墓<名護市墓分布形態調査報告書4>	名護博物館
"	写真と年表に見る糸満市の現代の歩み<糸満市史別巻・写真資料>	糸満市教育委員会
"	南西地域研究資料センター報告 No.52	鹿児島大学南西地域研究資料センター
"	博友(沖縄県立博物館友の会)第8号	(株)南西印刷
"	琉球舞踊	"
"	子どもの世界<宮古・八重山編>	"
"	名護市史の移民調査の結果と課題<ハワイ移民調査を中心に>	名護市史編さん室
"	第3回新収蔵品展<平成5年度分>	石川市立歴史民俗資料館
"	沖縄国際大学文学部紀要<国文学篇>第22巻第1号・通巻34号	沖縄国際大学文学部
"	沖縄国際大学教養部紀要 第19巻第21号	沖縄国際大学教養部
"	商経論集 第22巻1号 No.38	沖縄国際大学商経学部
"	法政大学沖縄文化研究所々報 第41号	法政大学沖縄文化研究所
"	地域文化研究所通信 17	梅光女学院大学地域文化研究所
"	地域文化研究所通信 19	"
"	沖縄県立芸術大学紀要 No.2	沖縄県立芸術大学
"	第4回沖縄県立芸術大学美術工芸学部卒業製作図録 1992	沖縄県立芸術大学美術工芸学部
6月24日	琉球列島における宗教関係資料に関する総合調査<総目録篇>	渡名喜 明(与那原町)
"	琉球列島における宗教関係資料に関する総合調査<漢籍目録篇>	栄野川 敦(具志川市)
"	奄美の歴史さまざま(歴史手帖抜書)<奄美文庫2>	山下 文武(鹿児島県)

受付月日	書名	寄贈者・寄贈機関
6月24日	平良市総合博物館紀要 第1号	平良市総合博物館
"	平良市総合博物館年報 No.4	"
"	琉球大学経済研究 第47号<三浦桂先生追悼号>	琉球大学法文学部
"	沖縄女子短期大学紀要 第10号	沖縄女子短期大学
"	笠利町立歴史民俗資料館々報 第11号	笠利町立歴史民俗資料館
"	石垣市史のひろば 第19号	石垣市総務部市史編集室
"	石垣市史叢書6<山陽姓大宗・上官姓大宗・長栄姓小宗・錦芳姓小宗、各家譜>	"
"	石垣市史叢書7<翁長親方八重山島規模帳>	"
"	九州文化史研究所々蔵古文書目録18	九州大学文化史研究所
"	九州文化史研究所々蔵古文書目録19	"
7月1日	回顧録・大阪の建設 明治黎明期から昭和終戦まで	社団法人大阪建設業協会
"	ブラジル沖縄移民名簿	在伯沖縄県人会
"	国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告書 14	鈴木紀美子(大阪府)
"	浦添市文化財悉皆調査報告書<浦添市文化財調査報告書第17集>	浦添市教育委員会文化課
"	生活文化研究所年報 第7輯	ノートルダム清心女子大学生活文化研究所
"	従軍慰安婦問題の経緯<国民会館叢書10>	社団法人国民会館
"	戦争責任の宿題<国民会館叢書11>	"
8月11日	北谷町史 第3巻資料編・民俗下	北谷町役場企画課町史編集室
"	竹富町史 第11巻資料編・新聞集成 I	竹富町役場町史編集室
"	伊江島のはなしことば	伊江村教育委員会
"	首里昔語り史跡マップ	首里自治会長連絡協議会
"	特別展・子どもの世界	沖縄県立博物館
"	読谷村統計書<平成5年版>	読谷村役場
"	感想文集・ひめゆり 第5号	ひめゆり平和祈念資料館
8月11日	館報 第5号<1993年度>	"
"	韓国のすべて	大韓民国海外広報館
"	資料館だより 第9号 1994・5・23	ひめゆり平和祈念資料館
"	びぶりお VOL.27 No.3	琉球大学付属図書館
"	文書館だより No.6<平成6年>	徳島県立文書館
9月1日	九州文化史研究所紀要 第39号	九州大学文学部
"	山川が語る沖縄戦<南風原町沖縄戦災調査8>	南風原町教育委員会
"	照屋が語る沖縄戦<南風原町沖縄戦災調査9>	"
"	60年前の南風原<南風原町歴史民俗地図>	"
"	沖縄県立博物館年報 No.27	沖縄県立博物館
"	沖縄県立博物館紀要 第20号<1994>	"
"	地域と文化 第84号	ひるぎ社
"	てだこ・ふくしプラン21 浦添市地域福祉計画	浦添市

「史料紹介」

民俗研究家・源武雄氏蔵書の「寄贈資料」報告

長 間 安 彦
栗 国 恭 子

浦添市安波茶にお住まいの源武二氏（弁護士）から父武雄氏の蔵書が浦添市立図書館に寄贈された。浦添市への蔵書寄贈の意向は父の遺言であり、その旨を取り計らって欲しいとの話が、今年の夏頃から当図書館沖縄学研究室に対し、ご子息であられる武二氏から再三にわたり要望がなされた。折しも、当図書館の開館十周年記念事業、戦後五十年記念事業展示の企画と多忙をきわめていた本館は、そのご厚意に対し機敏な対応がなされぬまま三、四か月が過ぎ、やっと十一月になって「源武雄図書及び史資料」を、ご遺族から受け取ることができた。

今回、本館沖縄学研究室に寄贈された故源武雄氏の図書及び史資料の数（約一、一五〇件）は、氏の長年の研究活動をとおしてみると幾分その量が少ないのではないかと思われる。聞くところによると、氏の出身地の東風平町にも多くの図書等（約四七〇冊）が寄贈されたようである。が故に本館に提供された図書等の数量をもって、源武雄氏が歴史・民俗研究、さらにそれに伴う諸活動のなかで得た図書及び史資料を網羅することにはならない。しかし、本館に提供された史資料類をみる限りにおいて、氏の民俗研究の成果の一端を如実に理解し得るものが多く含まれ、民俗研究家「源武雄」の足跡を知ると共に、これからの沖縄民俗研究に

少なからず寄与する貴重な史資料群となっている。とくに民俗探訪のための調査ノート類・日記等をみると、単なるフィールドに終わることなく、祭祀を司る神人たちに対しても温かな眼差しを向けながら記録している（例「塩屋地域海神祭・写真及解説」）。そのノートにみる細やかな記述方法は、若手の民俗研究者にとっておおいに参考になろうか。

提供された蔵書等の説明（概略）については、後記の「寄贈資料内容」「資料紹介」にゆずることにして、先ずはじめに氏のこれまでの経歴について紹介しよう。

一 故源武雄氏の経歴と諸論文・著作一覧

一九〇四（明治三七）年、東風平村に生まれる。一九二八（昭和三）年に日本大学高等師範部国語漢文科を卒業し、同年に群書類従刊行会に入所した。その頃に本姓知念を源に改姓。東京在中、七か年の間に比嘉春潮・伊波普猷・東恩納寛惇・金城朝永ら沖縄出身の碩学に会う。さらに、比嘉の紹介で柳田國男と知り合い、帰沖の際には、柳田から沖縄の民俗研究を奨められる。この著名な日本民俗学者・柳田國男の助言が氏が沖縄の民俗研究を志したキッカケにもなっている。帰沖後の一九三二（昭和七）年、再び比嘉の推薦で沖縄日々新聞社に就職。翌年に宮古で教鞭を執りながら民俗調査をおこない、その資料を柳田に提供、また書簡の往復もあり両氏の交流は続いたようである。比嘉春潮とは戦後も親睦を深めた（参照『私の戦後史』第8集、沖縄タイムス社刊）。一九三七（昭和十二）年から終戦まで沖縄県立第一高等女学校教諭に就く。

戦後は、沖縄民政府文化庁博物館課を皮切りに、沖縄工業高校教官・

うまる新報記者・那覇琉米文化会館司書・琉球政府資源局を経て、一九五三（昭和二八）年から十四年間、社団法人琉球農林協会に勤務。これを機に農林業関係の協議会などの委員を託され、パイナップル産業審議会議長、全琉普及事業連絡協議会会長を兼任する中、農畜産の振興に尽力した。文化面では、一九六九（昭和四四）年から琉球政府文化財保護委員会委員長、さらに沖縄文化協会副会長、沖縄県史編集委員等を歴任。那覇市史編集には一九五五（昭和三〇）年頃から約三〇年間に携わり、同編集嘱託員ならび同編集委員長を勤る。とくに、『那覇の民俗』編の編集・執筆に大きく貢献。復帰後は首里城復元のための素案作成、その推進を図った。

◆著作・論文一覧（概略）

た。後に首里城復元期成会が発足した際、同会の副会長に就いた。このように多忙をきわめる中で、氏は『日本の民俗47沖縄』『宮古群島・八重山群島地域における婚姻民俗の概観』『冠船渡来と遊女疎開令』など歴史・民俗に関する多くの著作・論文を著した。

一九八五（昭和六〇）年、八十一才の高齢をもって那覇市史編集委員を勇退。同市は約三〇年間も源氏が那覇市史編集に携わってこられた功績に対し、八三年に市政功労者として表彰。先の七七年に県から文化財保護功労者、八一年には沖縄県功労賞をも授与しておられる。一九九二（平成四）年八月五日、八十八才で天寿を全うされた。合掌。

(1) 著 作	発 行 年	発 行 所
村起こし運動視察報告書		琉球農林水産協会
沖縄の黒糖文化史（『明るい村』第79号付録）	一九五八	琉球農林協会
考える農民の農業経営		琉球農林協会
陽のあたらぬ農村		琉球農林協会
琉球農業の現状と問題点		琉球農林協会
転換期の沖縄農業	一九六四	琉球農林協会
沖縄の伝説	一九六四	第一法規
琉球歴史夜話―琉球歴史の裏面を解明する	一九七一	沖縄文教出版
日本の民俗47 沖縄	一九七二	第一法規
続琉球歴史夜話―琉球歴史の裏面を解明する	一九七四	沖縄文教出版

(2) 論 文

掲載誌(書・紙)名・各号

発行年月日

発行所

大神島といふ離島を採訪

干魚の民俗

古い正月

ドウドウ馬と馬酒―手間について

アガリカーラのジラバー―高嶺翁からの聞き書き

マユンガナシの出現①―高嶺翁との問答ノート

マユンガナシの出現②―高嶺翁との問答ノート

川平のシツ祭―高嶺翁との問答ノートから

朝薫の人及び芸術についての覚書

神話の精神分析的解釈と民俗学的解釈

爬龍船民俗行事の系統

タナバタ祭の二重構造

米寿祝いと枕飯御願

冠船渡来と遊女疎開令

玉城朝薫の年譜と評伝

沖縄のまつり研究について

シヌグについての覚え書き

糸満のハーリー

結婚と貞操

玉城朝薫の人及び芸術についての覚書

宮古群島・八重山群島地域における婚姻民俗の概観

序説 沖縄の民俗―その位置づけと特色

『民間伝承』第4号

一九三五・一二・二〇

民間伝承の会

『民間伝承』第6号第20号

一九四一・九・一

民間伝承の会

『沖縄民俗同好会』No.10

沖縄民俗同好会

『沖縄民俗同好会』No.11

沖縄民俗同好会

『沖縄民俗同好会』No.12

沖縄民俗同好会

『沖縄民俗同好会』No.13

沖縄民俗同好会

『沖縄民俗同好会』No.14

沖縄民俗同好会

『沖縄民俗同好会』No.15

沖縄民俗同好会

『組踊研究』創刊号

一九六七

琉球組踊保存会

沖縄タイムス

一九六七・五・一五(6回)

沖縄タイムス社

琉球新報

一九六七・六・一〇(?)回

琉球新報社

琉球新報

一九六七・八・一〇(?)回

琉球新報社

沖縄タイムス

一九六七・八・二六(?)回

沖縄タイムス社

『研究余滴』第9号

一九六八

郷土史研究会

『劇聖玉城朝薫・組踊上演二五〇年記念誌』

一九六九

沖縄タイムス社

『まつり』第15号

一九七〇

国際アートコンパニオンまつり同好会

『まつり』第15号

一九七〇

国際アートコンパニオンまつり同好会

『まつり』第16号

一九七〇

国際アートコンパニオンまつり同好会

『琉球の文化』第1号

一九七二

琉球文化社

『琉球の文化』第4号

一九七三

琉球文化社

『琉球の文化』第5号

一九七四

琉球文化社

『沖縄県史』第22巻 民俗I

一九七二

琉球政府

一生の儀礼 産育	『沖縄県史』第22巻 民俗1	一九七二	琉球政府
一生の儀礼 厄年・年祝	『沖縄県史』第22巻 民俗1	一九七二	琉球政府
一生の儀礼 婚姻	『沖縄県史』第22巻 民俗1	一九七二	琉球政府
沖縄の民話	『沖縄の風土記 沖縄は生きている』	一九七三	新星図書
祭り遊び	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
世界観と信仰	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
信仰とくらし	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
人生儀礼のさまざま	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
家と門中	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
沖縄の習俗	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
祭り	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
年中行事	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
沖縄の神々	『守礼之邦』下巻	一九七四	講談社
柳田國男先生に激賞された「南島稲作儀礼の採訪談」の講演	『那覇市史だより』第2号	一九七四・一一	那覇市史編集室
金城朝永の思い出	『沖縄文化』第43号	一九七五	沖縄文化協会
漁村における婚姻習俗	『沖縄―自然・文化・社会』	一九七六	弘文堂
伊波普猷先生を偲ぶ	『養秀 同窓会会誌』第2号	一九七六	養秀同窓会
伊波普猷の美髯	『伊波普猷全集』月報10	一九七六	平凡社
沖縄の文化を守る―文化財保護行政五十年の回顧	サンデーおきなわ	一九七六・四〇・一〇	今週の日本沖縄支局
ククヌトゥ・グンジュの解釈	『沖縄文化』第49号	一九七八	琉球文化協会
沖縄学の基礎史料に―嘉手納宗徳編訳『遺老説伝』	琉球新報	一九七八・一〇・二八	琉球新報社
通い婚と嫁入り婚―沖縄の婚姻儀礼	『えとのす』第9号	一九七八	新日本教育図書
序説 首里那覇の民俗	『那覇市史 那覇の民俗』	一九七九	那覇市史編集室
人生儀礼 産育	『那覇市史 那覇の民俗』	一九七九	那覇市史編集室

人生儀礼 婚姻

人生儀礼 生年祝・厄年

先生の愛唱琉歌

沖繩からみた甘藷の歴史

ニイビチの語源―私の沖繩民俗研究

豚便所漫談

王代記から見た尚王家の家督相続

首里城復元とその意義

首里の起源と語源

比嘉春潮と柳田國男

「沖繩の歴史」の序文

「北京紫禁城」と首里城の建築様式

首里城の回祿と復旧の歴史

私の戦後史

鎌倉芳太郎先生と首里城復元―最後のお手紙から

故宮里栄輝先生を忍ぶ

阿波根朝松氏の死去

「久松五勇士」から八十年―巷説には誤りも

『那覇市史 那覇の民俗』

一九七九

那覇市史編集室

『那覇市史 那覇の民俗』

一九七九

那覇市史編集室

『東恩納寛惇全集』付報4

一九七九

第一書房

沖繩タイムス

一九七九・一一・一二

沖繩タイムス社

『季刊沖繩アルマナック』第2号

一九八〇

社会経済研究所

『青い海』7月号

一九八〇

青い海出版

琉球新報

一九八〇・二・九、一〇

琉球新報社

琉球新報

一九八一・三・三、五

琉球新報社

琉球新報

一九八一・四・七、一四

琉球新報社

沖繩タイムス

一九八一・一一・一

沖繩タイムス社

『沖繩文化』第18巻第1号

一九八一

沖繩文化協会

沖繩タイムス

一九八二・四・七

沖繩タイムス社

琉球新報

一九八二・八・二六、三

琉球新報社

沖繩タイムス

一九八三・三・一七、四・七

沖繩タイムス社

琉球新報

一九八三・八・一九

琉球新報社

『那覇市史だより』第25号、第27合併号

一九八四・三

那覇市史編集室

琉球新報

一九八四・九・一三

琉球新報社

琉球新報

一九八五・五・二三、二四

琉球新報社

二 寄贈資料内容(概観)

(1) 沖繩関係図書 六六〇冊

① 沖繩(歴史・民俗・その他) 関係一般書

三三〇冊

奥野彦六郎編著『法務資料三二〇号・南島村内法―民の法の構成素

因・目標・積層』(昭和二十七年初版)、我謝栄彦著『改訂・糖業教科書』(昭和十五年初版)、日本民族学協会編『最近における沖繩研究概観』(昭和二十五年)等の貴重本を含む。

② 沖繩関係報告書(歴史・民俗・その他紀要及び団体発行)

一八二冊

『沖繩文化』五七冊、『南島史学』二三冊、『南島研究』十九冊、『郷

土』十一冊、『沖縄民俗』十七冊、『おきなわ』十四冊、その他紀要等十六冊、その他雑誌等二十五冊を含む。

③ 沖縄県発行報告書及び各種目録・雑誌

一四八冊

文化財関係報告書、首里城関係報告書、『伊波普猷先生顕彰趣意書』

(昭和三四年)、『転換期の沖縄農業』(昭和三九年)等を含む。

(2) 歴史・民俗・その他一般図書関係資料

三八七冊

① 歴史・民俗関係一般書

一五一冊

柳田國男著『先祖の話』(昭和二年初版)、柳田國男著『年中行事賞書』(昭和三〇年再版、著者からの寄贈)等を含む。

② 全集・事典

六一冊

第一法規発行『日本の民俗』(全四七巻)等を含む。

③ 雑誌

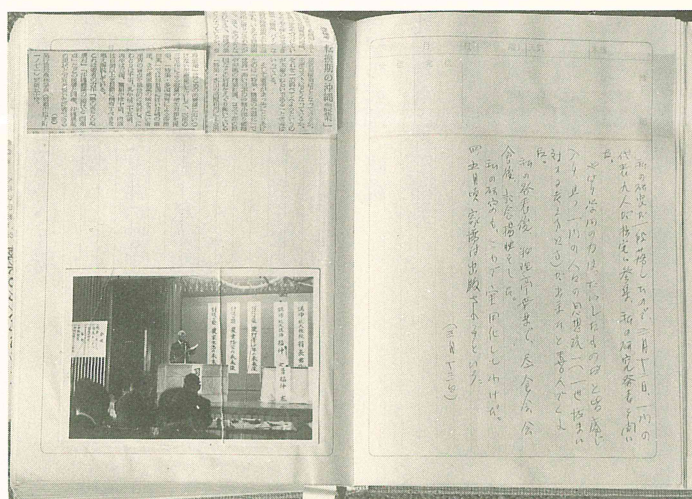
一七五冊

『日本民俗』五七冊、『伝承文化』七冊、『女性と経験』十冊、『月刊文化財』四七冊、その他歴史・民俗関係雑誌五二冊を含む。

(3) 抜き刷り及び個人ノート(調査ノート)資料

約一〇〇件

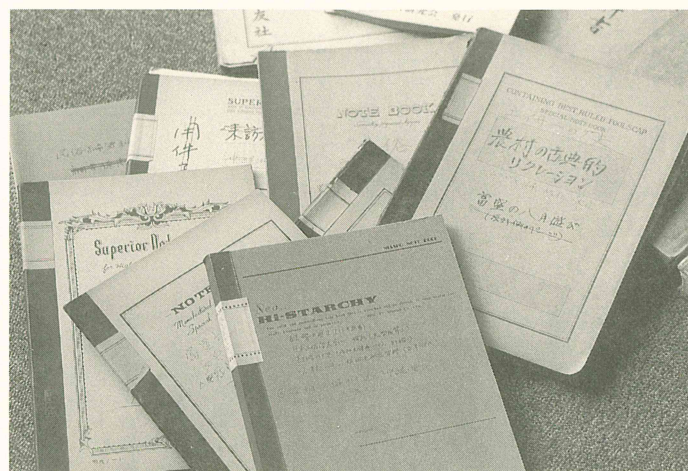
首里城復元関係書類(復元要請に關しての素案原稿等)、民俗調査ノート(塩屋地域海神祭写真及解説)昭和三〇年調査)等、日記(沖縄県史編集委員会、民俗調査等の業務日程中心)を含む。



「日記」新聞切抜や写真も貼付られている。



寄贈された沖縄関係図書・雑誌の一部。



民俗調査ノートは主に東風平村関係が多い。

三 資料紹介

浦添市立図書館に寄贈された源武雄氏関係資料の中には、蔵書の他に、個人資料として民俗調査フィールドノートおよび、会議用資料、また業務日記も何点が含まれている。

今回の紹介する資料は、氏の一九六七（昭和四二）年の日記から抜粋したものである。内容は、①民俗学関係（比嘉春潮氏との交流、論文案及び資料抜き書き）、②沖縄県史（民俗編）編纂業務関係、③農林業関係の協議会について、④離島等視察報告メモ、⑤郷土研究への思い等、が記されている。これらの記事には、関連した新聞記事切り抜きや写真資料等が添付されており、調査ノートと共に、氏が郷土研究に関して、どのような視点や関心があったのかを示す貴重な資料になっている。

今回は、氏の郷土研究への思いや民俗学関係、中心的な役割を担った沖縄県史（民俗編）関係の部分を抜粋紹介する。

尚、※は資料に関する若干のコメントで、紹介者が挿入した。

源武雄日記より ― 一九六七（昭和四二）年 ―

資料1 生活及び民俗学関係

新春雑感

明治三十七年（タツ年）六月の生れ。西暦にして一九〇四年の生れだから私はもう満六三才になった。

年を重ねることが「オメデタイ」のか「オメデタクナイ」のか、それ

は各々の人生観によるが、五官のおとろえの目立つことは、もう年をとることが、一種の淋しさを感じることはやむをえないことだ。

然し、人間が年をとって、いつかは死ぬということは、自然法則であり、人生の原理である。何人もこれに逆らうことは出来ない。

そこで、人生を楽しむということが考えられてくる。支えられた人生を出来るだけインジョイしてゆく。そういう人生観から、私の残された人生を、どう生きぬいてゆくかを考えるべきであろう。

この世の人生を限られたものとする、なんだか淋しく悲しくなる。

そこで、人生、私の生命を永遠なものにしてみたい。そういう悲願が出てくる。それがあらゆる宗教の根源かも知れない。現世に対して、来世とのつながりを考えてくる。

私は青年時代に読んだ、愛読した高山樗牛博士の「死と永生」という一文を忘れることが出来ない。

樗牛は、永生の道を示すに、事業を残すことにありとした。私も同感である。

然らば、私の永生に価する事業には何があるか。すでに私は、「琉球歴史夜話」一冊を介した。これも永生に値する事業だと考えている。これからは、郷土史研究に、うんと力を注ぎこんで、実のある著作を沢山やってゆきたい。余生を郷土史研究に没頭してゆきたいというのが、私の念願である。

×

私はこれまで主たる職業を農業政策関係の仕事に求め、自分のもっとも好きな郷土史研究は、従の仕事としてやってきた。これは私の経済生活を支える上で、止むを得ない生活法であった。

今度、農林協会事務局長のポストを去り、完全に自由な身となった今では、私の生活法を大転換させねばならない。

農業面と歴史研究面の二刀流的生活法から脱して、歴史研究一辺倒になりたいというのが、偽らざる私の念願である。然し、これまでそれが出来なかったのは、一定の職を離れると、生活費に困るということが原因であった。それが、今度はどうやら一定の職を離れても、メシだけは食ってゆけるという見通しがついた。

(一) 私の退職金としてこれまでの貯金、それに家内の退職金、これを合算して、一萬ドルの養老年金（利息だけで生活する構想）が可能である。

最低月五十ドル以上

(二) 右の一萬ドルだけでは不足であるが、家内の退職年金（月四〇ドル乃至八〇ドルの予想）を加えると、月九十ドル乃至一三〇ドルの生活経常費は出てくる。

このような養老年金の構想が可能になったことは、私のこれまでの二刀流の生活を清算して、郷土史研究に没頭することを可能にした。

そんな次第で私は、これまでの両面作戦的生活法、二刀流的生活法を清算してゆきたい。

×

新春にあたり、私は次のことを決意している。

- (1) もう農業関係の職業には職を求めたくない。
- (2) 郷土史の広範なしかも掘り下げた研究活動をもっと活発にしてゆきたい。
- (3) 健康がすべてに優先するので、健康法の実地に努力する。

新春の感想は以上の通りである。胃を丈夫にするように。腸を丈夫にするように。原稿活動が旺盛になるように。

（一九六七年一月二日朝）

この写真は、昨年九月、沖縄文化協会の役員評議員十数人が、南部戦跡廻りをした時のもので結核予防協会長で郷土研究家の川平朝申氏の撮影である。場所は摩文仁の健児塔の入口、左側の碑のあるところ。雑木林の背景がよく、私の白髪もよく出ており、上衣をぬぎ、夏パナマ帽を手にもったところ。

私の満六十二才の写真。

写真説明 「川平朝申氏撮影」

写真説明

この写真は、三月十二日、私の家で町田一門の家譜に関し、私の研究結果を発表し、その研究論文原稿六九枚を門中代表町田宗永氏に手交した。

発表会の後、料亭幸楽で昼食会を行い、記念写真をとった。ここに出ている人々は、本家、中本家、地方にいる分家を代表して参集した人々である。

医師（宗邦）、元県庁役人（宗永）、小学校長（宗敬）、コザ市PTA連合会長（宗徳）、宗綱（交通安全協会専務）などが重なる顔触れ。家譜は目下印刷所に廻し、四月の清明祭には出版されるという。

尚、三月二十八日には、宗永、宗邦の両氏が、わざわざ御礼に来られ、私の研究に対する謝礼記念品代として、金二〇〇ドルを下さった。これ

は原稿料として辞退すべきものでないので受け取ることにした。

(一九六七、三、二九、記)

私のライフ・ワーク

私はもう月給をもらうための農業関係の仕事には、政府関係から、どんな高級で迎えると云ってもお断りするつもりである。

知人の中には、私の農林協会の解散による離職を、失業したものとして、まだ若いのに、といって気の毒がる人々もいる。然し私は、失業離職をしても失意の状態にはいない。それは郷土史の研究に大いに意欲を燃やしているからである。それに、これまでの貯金の利息だけで、どうやら月、五、六十ドルの私一人分の生活費は出せる。もし家内が勸奨退職した一時金、それに、恩給(年金)をもらえる額を計算すると、月百ドル以上の収入は確実で、夫婦二人の生活には困らない。

それで、今後は沖縄県史、那覇市史の編集に関係し、それに関する仕事を中心にした原稿生活に没頭し、愉快に人生を送ってゆきたいと思う。

―後略―

三跪九叩頭、五拝三叩頭

明国皇帝に対する最敬礼は、五拝三叩頭の礼であった。(陳侃の使琉球録の冊封の式典の明国皇帝からの詔勅に対する中山国王の記をみれば分かる)。

それが、清国になってからの、中山伝信録の徐葆光の書いた尚敬王冊封の様子を見ると、清国皇帝に対する最敬礼は、三跪九叩頭の礼となつて、明国皇帝に対するよりも一段と重々しくなった。

沖縄の士族階級がやっていた祖霊に対する礼拝のウヌフェー(御拝)

という、拝み方は、この冊封使たちのやり方が、上流王族から下流へ、そして農民迄もおりてきたのだろう。

(六七、五、一一)

※同頁には、仲宗根泉月「地頭代うぬへー伊野波親方が創造した感謝祭――」の新聞切り抜き記事(『沖縄タイムス』五月九日付)が添付してある。

比嘉春潮先生の生年祝

春潮先生の八十五才の生年祝が、六月十一日上野の静養軒で開催され盛会だった由。

性格が地直な方で、上に立って大向上を、うならせるといふことはやらなくて、どちらかと云えば、縁のしたの力持ちという存在だった。

タイムスから出版した「沖縄の歴史」が、まとまった本。

沖縄の古文書を、ほんとうに読める人は、もうこの人、ひとりしかいない。私なども、同氏の近くにあって、古文書を勉強してみたいくらいだ。

もっと長寿して欲しい。然し、質問するなら、今のうちに質問しておかねばならない。

※新聞切り抜き記事貼付

(※六月十五日頃執筆か)

久米島の思出

タイムス、文化協会、民芸協会主催の「久米島の史跡民芸廻り」は愉快な旅でした。

戦前のよき沖縄の姿を残した農村地帯、五枝の松、宇根の大そてつ。上江洲殿内、馬の角、太陽石、それにも増して、ホテルの窓からベットの寝ころんで眺めた海と空の色。それは、実に何ともいえぬ、得も云えぬ絶景でした。写真は観光ホテルの窓で。写真の写し手は、コザ高校教諭・曾根信一先生。海岸から望遠レンズで撮影したが、よく映って、ポーズも満点。

写真説明 「傍は比嘉俊成氏（元高校長、歌人）」

久米島の思出 (2)

七月初旬の久米島観光旅行の際琉球放送の伊波^(タ)□子さんの撮影したものの。

背景は有名な宇根の大蘇鉄、二百年以上もなるといふ。

「ゆき先生に怒られないかしら」とじょう談をとばしながら気軽に、同時にカメラにはいったのは、新島料理学園の院長・新島正子女史、年に似合わず、ハツラツと若い。僕のサングラス姿の写真も珍しいが、当時の気分がよく出ている。伊波ケイ子寄贈。

(六七、八、三二)

民俗同好会

琉大の民俗クラブの卒業生でつくっている民俗同好者の集まりがある。博物館の上江洲君が会長らしい。

この会に對し、会員の範囲を、もっと広げて、民俗学会を作ったら、どうかと意見を出しておいた。

昨十九日、その例会があり、出席して、この件について意見を開陳

したところ、大方の賛同を得た。

けっきょく、来年の三月をメドに現在の同好会を解散して、沖縄民俗学会を作ろうということになった。

沖縄で戦前民俗学を手がけていた自分にとっては、これで地下の柳田先生にも、申訳が立つような気がする。

民俗研究の心がまえ

われ／＼の郷土を文化の香り高いものにし、生活を豊かにし、生きる心の目標を、しっかりさせるためには、われ／＼が、ほとんど意味もわからないで、慣行的に行ない、かつ信じていることを、できるだけいねいに解いてみて、その上に新しい健全なものを築きあげていかなければならない。

そのためにこそ、身近な、ありふれた毎日の生活の民俗を解してみようとするのである。

(福島県史民俗I、心意現象一二四Pから)

筆者 山口 弥一郎

自宅茶の間で

季節は夏だが、なんの折り写されたか記憶にない。長男の弘毅がとったものと思う。

満六十三才の素顔である。一昨年从去年にかけて、胃腸疾患で入院。四十一キロの体重が、三六、七キロに激減。それからあまり回復しないまゝの超軽量体重である。

然し、頭脳は明晰で、いろ／＼な論文研究のヒントが雲の湧くが如く

に、ぞく／＼と浮んでくる。体力との調和が問題となってくる。

(六七、十二、十二)

一九六七年の回顧と感想

ヒツジの年一九六七年が去って、サル年一九六八年を迎えた。

一九〇四年生れの男は、六十四才を迎えたことになる。然し、もうこれからは、年を忘れて、楽しく過ごす年令層であるから、八十才になる迄は、老いのくりごとは言わぬことにする。

×

×

私は昨年 of 新春雑感で次のことを日記帳に書いてある。

- 一、もう農業関係の職場には職を求めることをしない
 - 二、郷土史の掘り下げた研究を仕事とする
 - 三、健康がすべてに優先するので体作りをしたい
- 以上の三つを生活目標にかゝげた。

×

×

農業関係に職を求めないというのは、郷土史の勉強に余生を打ちこみたい一念からであるが、又、これまでの退職金の運営で、自分だけの生活は、なんとかやってゆけるだろうという見通しをつけたからであった。

さて、年末になって、私の財産——資金状態を調べてみた。すると、十二月三十一日の資金現在高は七、六三五弗七五仙で、前年の十二月三十一日の資金は、七、六二〇弗で、増減なしということになっている。

毎月の実質支出、六七年間(一ヶ年間)の実質支出は、まだ計算してないので、どのくらいになるか分からないが、毎月そうとうの支出があった。その支出を、預金利息その他の雑収入でまかなってきたのであ

る。六八年も、そういうふうにして、元金を食いつぶさない方法でやってゆきたい。

定職収入はなかったにかかわらず家具の基本設備に、又、そうとう金をかけて購入し、楽しい生活設計をした。

- 一、冷房機の取り付け
- 二、石油ストーブの取り付け
- 三、応接用セットの取り付け
- 四、テープレコーダーの購入

更に、郷土史研究の基礎資料として、

- 一、おもろそうし(定本)
- 一、おもろそうし辞典
- 一、琉球資料叢書五冊

これだけの購入費だけでも、四二三弗を投じている。いずれ詳しい実質収入、実質支出を発表したいと思っている。

×

×

郷土史を深く掘り下げる研究作業をしたいと新春の抱負に述べたが、この点では、そうとう足跡を残した積りである。

まず、民俗調査では、中城村津覇、国頭村辺戸、宮古本島に出かけた。これらは、沖縄県史編集所、文化財保護委員会の仕事として出張調査したものである。

一九六七年中に、私が新聞に発表した論文は次の通りである。

- 一、神話の精神分析的解釈と民俗学的解釈

(沖縄タイムス、六七、五、一五——六回)

- 二、爬龍船民俗行事の系統

三、タナバタ祭の二重構造

(琉球新報、六七、六、一〇—^(A)□回)

四、米寿祝いと枕飯御願

(琉球新報、六七、八、一〇—二二)

(沖縄タイムス、六七、八、二六—^(A)□回)

私の民俗調査報告が、次のように、新聞ニュースとして報道された。

一、国頭村辺戸のシヌグ折目

(沖縄タイムス、六七、九、十六)

二、万葉時代の夕占、枕飯御願、宮古に残る

(沖縄タイムス、六七、一〇、三一)

なお、立法院図書館長の崎浜秀雄氏も、この年賀状の添え書きによると、サンデー毎日の十二月三日号に、私の宮古で調べたユウウラ(夕占)の記事がのっているそうである。

×

×

最後に健康についてである。

六五年、六六年と連続入院という羽目になり、六六年の十一月末に退院。

昨年は、その点に気をつけて体作りをした。乾布まさつをやったり、ジュースを買って野菜ジュースをのんだりした。

乾布まさつの効果は大きいようであるが、やはり、徹底的にやり通し切れないうらみがある。

ジュースは、これも効果が大きいですが、ジュースを作るのに、ほとんど二時間近くもかかり、又、材料購入が、めんどろくさいので、中断の状

態である。まあ、いずれにしても中途半端で、まだくである。

然し、胃腸の調子は、過食したり、アルコール飲料、コーラ飲料が過度にならなければ、食欲は十分出て来ており、無酸症あるいは酸過少症の症状は、大部好転していると思っている。

一方、目の方が、度がすんだら眼痛があったりして、時々困る。これも、いろ／＼と予防法は知っているが、面倒がったり、忘れたりしてやらない。

健康状態は、入院時よりは、うんと、よくなったが、まだムラがある。

体作りについては、一里に精進する必要がある。

×

×

六七年中におけるわが家の重大ニュースというものは、職を退いただけに、これといって大きなものはない。

一、美智子のところに長女智子が、誕生したこと。

二、紀子が三月に洋裁学校を卒業して帰ってきたこと。

三、ひきつゞき、県史編集委員、那覇市史委員、文保専門委員に任命されたこと。

四、民俗学関係の研究論文を盛に発表したこと。
などが、重なるニュースであった。

(六八年一月四日 記す)

資料2 沖縄県史編纂関係

沖縄県史編纂審議委員再任

五月八日、文教局長室で行れた。任期二ヶ年。委員は別表。

終って、八汐荘で民俗編の目次大綱について私から説明したが、時間無く、継続審議となった。(五月八日)

※新聞記事「きのう辞令交付式」の切り抜き貼付

沖縄県史民俗編 民俗委員会案

一、会議の期日・場所 一九六七、一〇、一四(土)二時から五時

源氏宅

一、出席者

源武雄、宮里栄輝、福地唯方、仲宗根政善、湧上元雄、名嘉宗八郎

審議の結果、中間報告として、次の通りまとめた。

章の分類立て方及執筆担当候補者。

但し、本日出席の分は決定。

上巻

〈解説篇〉

総論 沖縄の民俗

第一章 村の生活

第二章 生業と民俗

第三章 民具

第四章 衣・食・住

第五章 一生の儀礼(誕生、産育、婚姻、葬祭、墓制、年祝)(源武雄)

第六章 年中行事

第七章 信仰

〈資料篇〉

1、久高(湧上)

2、知念玉城(湧上)

3、首里(宮里朝光)

5、安田(未定)

7、本部久手堅(比嘉政夫)

9、久米島(仲原)

11、宮国又は砂川(未定)

13、川平(湧上元雄)

15、糸満

4、与勝半島(前川守夫)

6、塩屋(福地)

8、伊是名・伊平屋

10、狩俣(岡本恵昭)

12、多良間(比嘉政夫)

14、祖内(未定)

下巻

〈解説篇〉

第一章 神事芸能(福地唯義)

第二章 一般芸能(新城徳佑)

第三章 言語(仲宗根政善)

第四章 ことわざ・など(仲井真元楷)

第五章 民謡(嘉味田宗栄)

第六章 昔話と伝説(未定) 外間守善(※朱書き)

第七章 子供と民俗(※朱書き)

〈資料篇〉

(1)文化財保護委員会が、実施する民俗資料報告から編集収載する。

(2)全沖縄地区各市町村の原名の資料を町村役所を通して資料を収集する。(以上)

民俗編の編集内容について

十月九日、県史編集企画委員会で、民俗編を、どうするかについて、

一九六七、一〇、一四、夜

第四回目の協議を持った。前回で、上・下両巻とも、解説篇と資料篇をおく方針で、目次大綱の私案を発表した。処が、資料篇の調査費の点で、予算獲得上無理があるとして問題となった。

前回からこの問題で、委員側と執筆者側の間に意見対立、折り合わなかった。

今日の協議で

(1) 予算上の関係から地域別民俗誌は取り上げない。

(2) 全篇を「沖縄の民俗」の解説として、出来るだけ、皆に読まずようにし、微細にわたる学術研究の場とはしないこと。

以上のことで妥協することにした。

これが決ったら、次は執筆者だけの会議を開いて、具体的な内容について、話合う必要がある。

大宜味村誌の作業をやっている人。宮城倉啓（※上段の書込）

沖縄県史 民俗編

上巻

八〇〇頁 外に民俗図録を

五〇頁

第一章

沖縄の民俗

〇源 武雄

第二章

村と生活

仲松 弥秀
比嘉 政夫

第三章

生業と民俗

〇多和田真惇

第四章

民具

〇上江洲 均

第五章

衣・食・住

〇平敷 令治

第六章

人の一生（一生の儀礼）

〇源 武雄

第七章 年中行事

第八章 信仰

〇湧上 元雄
〇源 武雄

下巻

八〇〇頁 外に図録五〇頁

第一章

神事芸能

〇福地 唯方

第二章

民俗芸能

〇新城 徳佑

第三章

言語

〇仲宗根政善

第四章

ことわざ、なぞ

〇仲井真元楷

第五章

民謡（おもろ、流歌も）

〇嘉味田宗栄

第六章

昔話を伝説

川平 朝申（※朱書き）

第七章

子供と民俗

未定

第七節

子供と民俗

（わらべうた 遊戯） 未定

右のうち、氏名に〇印（朱書き）のあるのは、執筆者決定のものである。

四 著作および論文から

「比嘉春潮と柳田国男」

※一九八一（昭和五六）年十一月一日（日） 沖縄タイムス

春潮先生と初めてお会いしたのは、いつであったか、はっきりは覚えていないが、昭和四年ごろ、私が「群書類従刊行会」に勤めている時で

あった。その後私は金城朝永さんのところに下宿するようになったので、よくお話を聞く機会があった。先生はもちろん改造社に勤めておられた。戦前戦後を通して先生の思い出はあるが、紙数の関係で一つほど思い出を書きとめておきたい。

私が戦後初めて上京して先生と会った時の話であるが、私の上京は、非常におくれて昭和三十三年の四月であった。東京に着いたらすぐ春潮先生と柳田先生に、お会いしたいという速達を出した。春潮先生からは電話で、いつでもよいとの返事があり、また、柳田先生からは次のような返事がきた。

「二十何年ぶりに御上京よし御音信に接しなつかしく存じ候。まだしばらくは御滞在と存じ候も一日も早く御目にかかり度候。小生は年をとり外出の折も少なく候。日曜日など家を出ぬことにいたし居り候故、期日御示しの上、比嘉春潮君にももし御逢ひならば御同行御待ち申候」

つまり出来るなら春潮先生といっしょにおいでなさいという文面である。そこでまず春潮先生の御宅を訪れ、久々の対面をお互いになつかしがつた。

沖縄の話は多くしゃべったが、春潮先生は、「沖縄タイムス」紙上に、あしかけ三年ほど執筆されていた「沖縄民族の歴史」を、今度は単行本にして出版する準備を進めておられた。

新しく出す本の題名の件について私の意見を求められた。タイムス紙上では「沖縄民族の歴史」としたが、いろいろ考えて新刊の本の題は民族をとって「沖縄の歴史」としたいが、どうかねえ、といって、その改題の理由を述べられた。私もその方が誤解を招かなくて、いいでしょうと賛成した。

その改題の理由については、先生の著「沖縄の歴史」の自序の冒頭に述べられている。

日を改めて春潮先生と共に成城の柳田邸を訪れた。私は別に用件は無く、ただ久々の対面ということであったが、春潮先生は今度出す単行本「沖縄の歴史」に柳田先生の序文が欲しいので、その件をお願いするという用件を持っておられた。

私との二十年ぶりのめぐりあわせを柳田先生は大変喜んで下さった。そして、「源君、これまで調べて書いたものを発表したら、どうかね」と、すすめられた。私は、「先生、調査ノートも発表した新聞も戦争のどさくさで、すっかりなくなりましたよ。また、これからやりなおしたいですよ」と報告したら、先生は、そうか、残念だねえと、大変惜しがられる表情をされたのには恐縮した。

さて、春潮先生のご用件の、新刊『沖縄の歴史』の序文の件は、もちろん心よく引き受けて下さった。そして、今、耳に残っている先生の言葉であるが、先生はニコニコされながら、「私の序文書きは、もう春潮君の最後になるかも知れないよ。もう年をとっているの、序文の依頼はこれから断るつもりだよ」といわれた言葉であった。

柳田先生にはたくさんの門下生がおられたが、春潮先生はそのうちでも、きわめて先生の信頼を勝ち得ている一人であったようだ。ご両人の対談のふんいきが、それを感じさせた。

さて、春潮先生の新刊『沖縄の歴史』が出た時に、柳田先生が、どんな内容の序文を書かれたらうか?、と私は大変興味を持っていた。

序文の中で、宮古島の調査の重要性を説かれている部分では、私なども責任があるような気がしてはとした。また、勝連文化という言葉も

使われて、西海岸が栄える以前は東海岸が重要だったという新しい説に眼をみはった。

柳田先生の有名な『海上の道』が出たのは、それから二年後の昭和三十六年であるが『海上の道』構想が春潮先生の『沖繩の歴史』へ寄せられた序文の中で芽を出しているようで、今からふり返ってみても大変面白いと思っている。

その日は午後の三時から六時まで長時間にわたる楽しい話し合いであったが、柳田先生は、もっと話したいことがある。明日も来てくれんか、と言われた。

翌日は春潮先生は、私はいけないから、先生にそう申し上げてくれといわれて、私だけ再度訪問した。やはり午後であった。昨日のつづきの沖繩の話は私にしたが、先生は、成城大学の文庫を見てゆきなさい。——といわれて、成城大学内にいる柳田文庫に、先生自身が案内して下さった。これにはほんとうに恐縮した。柳田文庫には鎌田久子女史（現成城大教授）がいたが、先生が書庫にはいられて説明をなさった。また、柳田文庫には当時、島仲という八重山出身の若い人がいたが、このひとは八重山の出身だよ、といって大変かわいがっておられるようだった。帰りは柳田先生が成城駅まで見送って下さった。道順はよく分かっておりますから、どうぞ、おかまいなく——と固くお断りしたが、先生はいや、いつも散歩しているから、と、とうとう駅まで見送って下さった。これには全く恐縮したが、一生忘れられない思い出であり、また、柳田先生が、どんなに沖繩に愛着を持っておられるかが、よく分かったのであった。

（那覇市史編集委員）

『沖繩文化、比嘉春潮先生追悼特集号』から

「鎌倉芳太郎先生と首里城復元——最後のお手紙から——」

源 武雄（首里城復元期成会副会長）

※一九八三（昭和五八）年八月一九日（金） 琉球新報

鎌倉芳太郎先生は、大正時代（大正十一年）に首里城正殿が時の首里市によって取りこわされようとした時に、先頭に立たれて、それに反対され、大変な努力をされてそれをくいとめて国宝指定にまで持ってゆかれた。そのご功績は忘るべからざるものがある。これは先生が東京美術学校を出られて、間も無い二十四、五歳頃のことである。

私は今度の沖繩戦で首里城が破壊されたので、私が文化財保護委員長をつとめた頃から今日まで、広く県民に呼びかけ、先輩の先生方とともに首里城復元期成会を結成して、今日にいたっている。すなはち、鎌倉芳太郎先生と私とは首里城の保存問題を介して、深く結びつけられている。先生は亡くなられるまで首里城復元の問題には深い関心を示された。今回、先生から私に來たお手紙を新聞で公表しようと思うが、その内容は私どもの展開している首里城復元運動を、如何に有利に展開するかについての先生のご提言である。先生のお手紙を読む読者は、鎌倉先生が如何に沖繩の文化財の保存に深い関心を示しておられたかを感銘をもって了解し得ると思う。

私は先生の手紙の内容を発表することによって、われわれのやっている首里城復元運動が百歩も二百歩も前進するものと信じて、あえて、この先生のお手紙を新聞紙上で公表することにした。

なお、余談になるが、私と鎌倉先生とは首里城復元問題の外に、先生

私も共に沖縄県女子師範学校兼沖縄県立第一高等女学校の教師をしたことがあって、兩人とも客員となっていること、また昨年（昭和五十七年）、鎌倉先生が琉球新報賞をもらわれた時、私は社の依頼により祝辞を述べたこと。もっとも、この時は鎌倉先生はご健康すぐれず、ご令息の秀雄ご夫婦がみえられた。それは次に紹介する先生から私宛てへの手紙にもみえているが。

以上、鎌倉先生から頂いたお手紙を公表するに当たっての「まえがき」のつもりで書いた。いずれ、ご家族によってこれから先生のお仕事や、ご功績の整理が行われると思うが、私の文章のなかの年代の問題など、場合によっては修正するところが出てくるかもしれない。

前略、琉球新報社賞授賞に際しては、何呉（なにくれ）となく、御世話下され、殊に立派なる御挨拶のお言葉を、たまわりたる由、息秀雄、妻純子の二人から、お話の内容まで聞き、ありがたく存じております。ここに御礼を申し上げます。

岩波書店から出版の件、「沖縄文化の遺宝」は、拾年前の博物館開催の写真展の爾後（じご）から始まりましたので、数えれば十ヶ年を闊したことになります。今や八十四才翁となり、しかも、この仕事で体力も弱り、十三キロもやせ、まだ立居振舞ふらふらいたし、遂に授賞式にも出られなかった次第です。

さて、今年始めに貴方様に申上げましたところの平田松堂（栄二）（文展日本画特選）が、美校師範科の助教授の時、（私が）入学したことから、同先生に殊の外信用せられて、丁度、首里城正殿取りこわしの時には、小生は再び上野の美校の研究科へ再入学し、琉球で、それ

まで二ヶ年間に撮影した写真や史料を整理いたしていました。

その年（大正十二年）九月一日、関東大震災が起こり、その翌日、駿河台の平田家に行って見ると焼けて一物もなし。内大臣東助閣下は御家族を伴って牛込区山伏町の平田昇（三男、海軍軍人）方に避難したと書いてあり、早速行ってみると牛込酒井家の裏側で借家のような小さな家で、中から東助閣下が出て来られたので御見舞申上げ、その際一、二質問があったので、お答をしましたが、当時、沖縄は人心不安な時代でありました。

そんなことから思うと、伊藤広土が首里城正殿並に古文化国宝指定に骨を折って下さったのには、恐らく内大臣平田東助閣下の指示があったように思われます。後の亀井沖縄県知事も学生時代は平田伯爵家の書生でありました由です（松堂先生談）。

実は松下（ナショナル）幸之助さんの後継者正浩氏（ナショナル会長）は、幸之助設立者の唯一の娘御さん幸子様（養嗣子）で、現在では松下の大屋台を背負っている方です。

それで若し沖縄に於けるナショナルのチェーンの組織会長の了解が得られるならば、首里城保存は伊東忠太先生の生命線でありますので、ナショナルの沖縄で支払われる税金の何パーセントかは、首里城保存会（貴下以下の）に寄附を願い出してみるのも、文化建設をモットウとしているナショナルの幸之助様主張に合うこと故、何億かのお金は出してもらえるのではないのでしょうか。これに当たって見て下さい。

事業で利益を挙げるといふことは、その社会の文化を高揚し保存することなのです。それ故、現に私共会員である日本工芸会は、その会長の役を引き受けてもらっております。

これはナショナルの活動の様子をアメリカ側に説明するのに好箇の資料と思います。

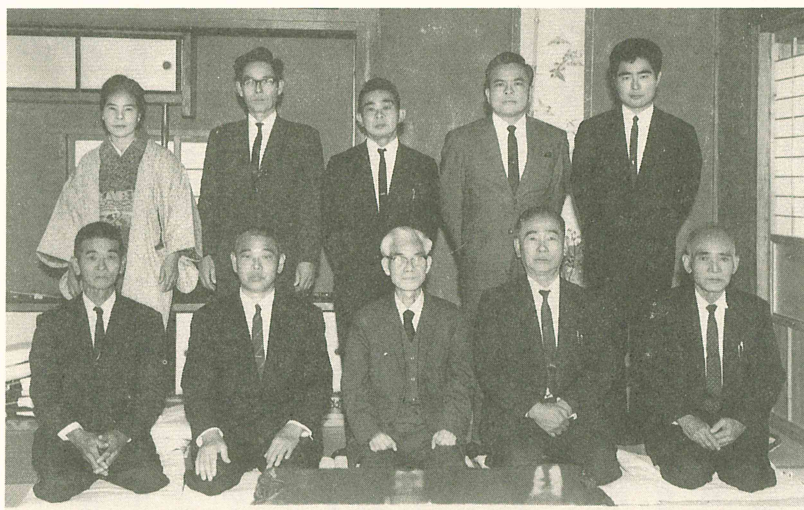
お互に行く先は段々短い老年ですから、何とか一日でも早く首里城の完成した姿を見たいものです。

とにかく、そのナショナルの正治会長の父平田（伯爵）松堂先生の弟子が私であり、平田家の本家が山形の伊藤家というわけです。この



写真解説

上段は源氏満62才の写真で、川平朝申氏の撮影（74頁参照）。中段は町田門中と共に（74頁）。下段は久米島にて（76頁）。これらの写真は、全て「日記」に貼付られている。



良縁は或は貴殿の御仕事に幸運をもたらすように思われます。

とにかく出来る出来ないにかゝらず、私がこの度出版した『沖縄文化の遺宝』が、以上のような因縁で出来ていることを思う時、その事を沖縄の皆様知って頂き、そのために御令息会長の時代に寄附を受けられることも、よい事だと信ずる次第です。頓首

昭和五十七年下済 鎌倉芳太郎



〔本号執筆者〕掲載順

栗 国 恭 子	AGUNI, Kyoko	沖縄学研究室嘱託員
遠 山 満	TOUYAMA, Mituru	浦添市立図書館奉仕係長
徳 元 剛	TOKUMOTO, Tsuyoshi	琉球王国評定所文書編集嘱託員
末 次 智	SUETSUGU, Satoshi	四條畷学園女子短期大学専任講師
金 城 功	KINJYO, Isao	琉球王国評定所文書編集嘱託員
長 間 安 彦	NAGAMA, Yasuhiko	沖縄学研究室嘱託員

1996年3月21日 印刷

1996年3月29日 発行

浦添市立図書館紀要

No. 7

編 集 浦添市立図書館沖縄学研究室

発 行 浦添市教育委員会

沖縄県浦添市安波茶151番地

PHONE (098-876-4946)

FAX (098-875-1772)

印 刷 株式会社 太 陽

沖縄県浦添市安波茶265-1

PHONE (098-876-4188)

